

---

# 前世の記憶

黎奈

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

前世の記憶

### 【Zコード】

Z3261M

### 【作者名】

黎奈

### 【あらすじ】

前世の記憶をとあるきっかけで思い出してしまった陽魔。平凡な生活を送っていた陽魔はこのことにびっくり仰天。

陽魔の人生は大きく変わる。でも自分と同じように前世の記憶を持つている陽香と出会い、受け入れ始める・・ワクワクドキドキのファンタジー。

## 前世について

俺は前世の記憶がない。 ·····いや、なかつたと言つまつが正しいか···

前世の記憶がないのは、当たり前だとみんなが思うのは当然だよな。

俺も実は先週まで前世の記憶がないのは当然だと思っていた。

そりゃあそうだ。なんだって、生まれ変わる前の記憶だもんな。ただでさえ、小さいころの記憶もつい先日言われたことも忘れるような奴なんかに前世の記憶なんて覚えているわけがない。

理屈から考へてもありえない話だ。

だが、ありえない話のはずがありえてしまつことになるのつて、いつも突然で何の脈絡もなく、くることつてあるんだよな。

ここで分かつた奴もいるだろつ。

まさか！？とおもうやつもいるかもしれない。でもその『まさか』なんだな。

自己紹介が遅れたが、俺の名は、幽鬼<sup>ゆうき</sup>陽魔<sup>ヨウマ</sup>っていうんだ。

結構、前向きな性格で平凡な学校生活を送っていたんだ。一週間前までは···。

一週間前、思いもしない出来事が起こつた。

そのせいで俺の人生は俺の前世の奴に持つていかれた。

くそー、あんのやろー、俺の人生返せーー、このまま平凡な人生を送つていきたかったのに···

そう叫びたかった。

でも叫んだって何も変わらない。

もう起こってしまったことは起こらなかつたことにはできない。  
俺は持ち前の前向きな性格を發揮して受け入れることにした。

## 第一章 前世の記憶の欠片

一週間前、俺こと、幽鬼陽魔は、交通事故にあった。

その日、俺は学校の帰り道だった。やつと終わったと気が抜けたときだった、トラックが俺に衝突しそうになつたのは。

・・ぶつかる！？・・やばい！！

とつたに目をつぶつた。が、いつまでもぶつかるような衝撃は来なかつた。

恐る恐る目を開けると俺に衝突寸前のところでストップしたトラックが目に映つた。

最初はそう思つた。

が、正確にはストップしたのはラックではない。時間の方だ。と気づいたのはそれから後の話だ。

話を元に戻すが、最初は本氣でトラックがぎりぎりのところでストップしてくれたと思い込んだ。

しかし、冷静に考えるとおかしいことがいくつかある。

一つは、もしほんとにトラックがストップしてくれたのなら、ストップするときの急ブレーキの音が耳に響くだろうということ。が、俺には周りの雜音すら聞こえなかつた。

特におかしいと思うのは「一つ目」だつた。

それは、トラックが本当にストップしたのなら、もつと動くはずである。なのに今も止まつた状態のままだ。

おかしいと首をひねったとき、ギギイ ヒトリックの何かの音が聞こえた。

ちゅうじゆのとき、視界が歪んだ。景色が変わっている。俺は一瞬氣を失っていたようだつた。

一瞬氣を失つただけで景色が変わるそんなことあるかと思つのも無理はない。

が、本当に景色が変わったのだった。

目の前は雲ひとつない青空！ 何事！？と思いつつ下を見た。

「！？」

俺は宙に浮かんでいたのだった。浮いてるという感覚はまったくない。おかしい話だが、足元に自分を支えることができるもの上にいる感覚すらある。

俺は田の前で起きてこむことにすべてが理解できなかつた。唯一、分かるのは、「生きている」ということだけだつた。

どうしたらいいのか分からない俺はその場に立ちすくんだ。

急に下の景色が一変する。まさにそのとき、左田に奇妙なものが見えた。

「！？」

何だこれは？

右田では左目で見ているものが見えない。

左田で覗いているものはこの世界とはまるで次元を超えた、別世界

のものだと思った。

何か見える。ただそれだけ。何か風景が見えるだけでほかに何もない。

風景が時間が過ぎたびにさまざまなものを見せる。

最初は見ていて楽しいと思えるほどの風景だった。  
それが何か黒いものに覆われその風景をまるで別のものに変えてしまつた。

その風景は俺の心に深く残るものとなつた。

左目からは、じきに何も見えなくなつた。

右目と同じような風景が映つていて。雲ひとつない青空だった。

まだ俺は浮いていた。

いつまで続くんだと半ば思つていたころだった、いきなり異形な風貌をした者が現れたのは。

髪の色は淡い青、人の形をしているが顔も漂わせる雰囲気も人とはかけ離れているものだつた。

マントのようなものを羽織つていて服装や体格とかは分からなかつたが。

俺と同じように宙に浮いている。

俺とそいつの目が合つた。そいつの視線が俺の左目だけをみつめてきた。

「あやまは誰だ？」

俺が問う。

「……俺の名は、ゼレナル。お前を・・幽魔を探していた。」

異形のものが名乗った。

・・しつかり日本語が話せるんだな。  
と氣楽に思いつつ、

「幽魔って誰だ？俺は幽鬼陽魔つて言つ名前だぞ。」

といった。ゼレナルはその言葉に動じた風でもなかつた。  
「お前の名は確かに幽鬼陽魔だ。だがそれと同時に幽魔なのも確か  
だ。」

と落ち着いた口調で言つた。

「どうこいつ」とだ？

ゼレナルの言つてゐる意味が分からぬ。

「・・つまり、お前の前世は幽魔なんだ。」

「こいつ、どうしたんだ？何をわけの分からぬ」とを言つてゐる。

「は？前世？何を言つてゐるんだ？」

「お前は空を飛べないはずだ。そうだろ？」

俺の質問には答えず話題を勝手に変えた。

「あ、ああ。普通なら飛べない。」

「じゃあ、何で飛んでいる?」

「わからん。気づいたときには浮いてた。」

「それや。普通なら飛ぶことも浮くこともできない。なのにお前は浮いている。それは前世の幽魔の力なんだ。」

「は? じやあなた? おれは前世の奴のおかげで俺がここにいるといいたいのか?」

「そうだ。お前は前世の記憶の欠片を持つていいだろ? 一部のものだが、左目で見えたはずだ。」

「確かに何か見えたが・・・なんでゼレナルが知っている?」

「お前、気づいていないのか? その左目色が右目と違い青い炎のような色になっているんだぞ。」

「は? そんなわけ・・・つ! ?」

俺は言葉を飲み込んだ。

ゼレナルが差し出した鏡で俺の左目が青い炎のような色合っこなっているのを。

「それを見てまだ信じられないか？」

## 第一一章 前世の瞳

俺の瞳を見ても信じられることができなかつた。

右田は俺の瞳なのに。

今日、学校から出る前までは左田も右田と同じ色だったのに。

だが、信じるしかなかつた。

「正直、信じられないが、信じるしかないんだよな。」

信じたくない。だが信じるしかない。

矛盾した二つの想いが心の中で葛藤している。

「お前の右田は、前世の瞳が刻まれている。その瞳から前世の記憶が一部分戻った証拠だ。」

今は淡い青色の炎のような色をしていて、やがてその炎はほつきり映し出されるだろう。

ゼレナルが言つ。

「一部分? 全部戻ると俺の右田は前世の瞳になるのか?」

「そうだ。もともと、全部戻ればおそれ右田も左田と同じ運命が訪れるだろうが。」

「あ～ふざけんなよ。左田だけでも厄介なのに右田もおかしくなっちゃうのか?」冗談じやねえ。

学校はどうすんのさ? こんな右田だと、不審に思われるだろ?

マジに困る。いつたいどうすんのや？

こうなったのは全部俺の前世の奴のせいだ！俺はそいつを恨む。

「その心配はない。左目だけなら眼帯すればいいさ。その目は隠さないとな。それにだ、お前の目が両方とも前世の瞳になるには気の遠くなるほど長い時間がかかる。そうすぐにはならない。

まあ、もしおなつたら、俺の世界に来い。」

「ゼレナルの世界？」

「そうだ。何のために俺がお前を探しに来たんだと思つていい。お前の都合を考えていらないわけでもないが俺のほうも非常にやばいんでな。」

ゼレナルは真剣な口調で言ひ。

本当にやばい状況なんだと思つた。

俺はゼレナルに聞ひついと想つて口を開ひとしたとき、視界が歪んだ。

あのときの怪んだ感じとは違う。  
意識ももつぶつとしてきた。

俺を支える何かの圧力が突然消えた。  
俺は下にまっさかさまに落ちるはずだった。  
ゼレナルが俺の腕をとつさにつかんだおかげだった。

俺はこのとき、氣を失つたのだ。

ゼレナルは氣を失つた陽魔の腕を自分の肩に乗せ、かついた。

ゼレナルは少しバランスを崩した。

そのとき突然、ゼレナルのそばに現れた奴がゼレナルを助けた。

「ゼレナルちゃん。何で一人で勝手にいちゃうんだよ。心配するじやんか。」

突如現れた奴がゼレナルに叫びつ。

「その名を言うな。怒るぞ、ゼルテ。」

ゼレナルはゼレナルちゃんと呼ばれることを拒否した。

「そつちこいや、ゼルテって名前を略すなよ。僕にはちゃんとゼレナルーっていう名があるんだからぞ。怒るぞ僕も。」

ゼルテと呼ばれたものが者がいかにも怒つていな口ぶりでゼレナルーと訂正した。

「ほんと君は言葉遣いが悪いんだから。そんなんだぞ、モテナイゾ。

」

ゼレラルーテがゼレナルをちゃかす。

「ほつとけ、俺はモテるとかそんなこと考えてもないし気にもしない。

」

冷たくゼレナルが言ひ放つ。

「やつ? ほんとほんとうんじゃないの? 幽魔のときはやつだつたじやないか。

こんなに君のこと僕は大事にしているの?・・幽魔の後世を探すつて諦めもしないで・・」

ゼレラルーテが少し悲しそうに言ひ。

「それは・・。」

言葉を濁すゼレナル。

「それは仕方のないことだつたけど・・それにしてもこの子、幽魔にそつくりだね。もしかして性格も一緒にだつたりする?」

ゼレラルーテが話題を変えた。

「少し似ている。こいつの中に眠る二重人格はもしかしたら幽魔そのものかもしれないな。」

「やつか。じゃあゼレナルちゃん、幽魔のときと回り歩きに恋をするの?」

いきなり、ゼレラルーテがとんでもないことを言つてのけた。ゼレナルは顔を赤くする。

「!、恋などしない!・・・何度も言つてゐがそのだけは言つたまつた!」

ゼレナルはゼラルーデを怒鳴りつけた。

「あ～、じめんじめん。でも顔赤くなつてゐるよ・・ふふ、かわいい  
っ

ここでさうじゼレナルの顔が赤くなつた。

「！」

「すぐ顔が赤くなるんだねつ。ふふふ・・・さてからかうのはそれまでとして、どこまで話したの？この子だ。」

ゼレナルは自分を落ち着かせて

「まだそんなに話していない。本格的なことは明日だ。」

といつた。

「僕も手伝おうか？」

「余計なことはしないでいい。」

ゼラルーデが聞いたがゼレナルはあつさりそれを冷たくあしりつた。

「君がなんと言おうが僕は行くからね、君は僕をとめることなんてできないからね。」

ゼレラルーデはゼレナルに言い放つた。どうやら、どうしてかゼラルーデは行く気らしい。

「ちこ、勝手にしや、だが変なことさせないからな。」

舌打ちし、ゼレラルーテにぐさを刺すゼレナル。

「はいはー。わかつたよー。」

守れそもなに口調で言つゼレラルーテ。

(絶対何か言つな、こいつ)と心の中で思つゼレナルであった。



## 第三章 ゼレナルの幼馴染

陽魔は意識を取り戻した。

そこは陽魔自身よく知っている自分の部屋だった。

まだ視界がぼやけている。

「目が覚めたか？」

突然声をかけられた。

「あ、ああ。・・・・はあー、夢じやないのか・・・」

俺は声をかけてきた者に返事をしてため息をついた。  
声をかけてきた者はゼレナルだった。

「何だ、そのため息は。俺はお前をここまで運んできてやつたんだ  
ぞ。少しは感謝しろ。」

怒っているのか、あきれているのか微妙な口調のゼレナル。

「あ、そういうえば俺、氣絶したのか・・・悪かつたな、運んでくれ  
てサンキューな。」

ゼレナルに素直に礼を言った。

「べ、別に。お前があそこで落ちて死んでもうわれたくはなかつた  
からしたまでだ。」

ゼレナルが照れたように言ひ。

それを俺は不思議に思った。

俺がしゃべりつとしたとき、突然何かが現れた。

「ゼレナルちゃん、お・待・た・せ。例のものもって來たよー。」

声とともに現れたのはゼレナルと同じ異形の者だった。

髪は、ブロンド。背が高く、ゼレナルとはまったく違う印象を俺は受けた。ちなみにゼレナルは背が高い。

・・誰だこいつ？・・それより、ゼレナルちゃんってゼレナルのことか！？・・・・・

「ゼレナルちゃん？」

俺は誰だと思う以上に気になつたことを聞いた。

「ゼルデー！」

ゼレナルがいきなり大声で叫んだ。

「ん？君、知らないの？実はゼレナルちゃんは・・

それを気にした風でもなく俺の質問に答へようとする。

「畜生！いい加減にしろ！だからお前は来るなといったんだ！」

ゼルテと呼ばれた者の声を一番聞きたいといひでゼレナルがえりあむ。

「「」こつばゼレラルーテ。略してゼルテだ。それとこいつの言つてことは聞くな。自分までおかしくなるべ。」

ゼレナルが本当にいやそつた顔をして説明する。

「俺、幽鬼陽魔。まあ、よろしく。」

一応自分の名を言つて挨拶した。

「あ、僕はゼレラルーテ。ゼレナルちゃんの幼馴染なんだ。あと、ゼレナルちゃんが言つほど僕、そんな変な奴じゃないよ。」

「はあ。」

どう反応していいか分からず俺は頷いた。

「自覚がないんだお前は。それより、例のもの持ってきたって言ったな。早速出せ。」

「はいはい。まったく人使い荒いんだから。」

ゼレナルが急かしそれに応じてゼレラルーテが半ば咳きながら、ごそごそとポケットのようなものから、例のものとやらを取り出した。

それは、水晶くらいの大きさの泡のよつたものに、コンタクトのようなものが中に入っているものだった。

「何だ？それ。」

「それはお前に前世のこと教えるためのものだ。これなら信じるだろう。」

「これはね、僕とゼレナルちゃんの世界を映す物で、この世界で言つ、ビデオのようなものかな。」

俺の問いにゼレナルとゼレラルーデが答えた。

ゼレナルがゼレラルーデからそれを受け取りコントラクトのよつなのを取り出した。

「これを見田にはめてみる、やつすれば俺の世界、俺の過去が見れる。」

ゼレナルが言つ。

俺はそれをはめてみた。

## 第四章 陽魔の前世がいた世界

陽魔は左田で見るものの聞くものすべてにひきつけられた。

色とりどりの花や木々が広がる美しい風景を眺めているゼレナルとゼレラルーテの姿。

「何できれいなんだい？」  
「幽魔がこの世界を変えてくれたおかげで  
よつこつやう美しくなったよ。」

「ああ。幽魔のおかげだ。あいつはすうじい。」

ゼレナルもゼレラルーテも微笑んでいた。

・ · ·

「何であいつが……ようつてなんでこんなことになつたんだ  
……！」

「落ち着いてゼレナルちゃん……僕だつてつらいんだ。」

「でも……でも……！」

ゼレナルが怒りで混乱している。  
ゼレラルーテが落ち着かせようとする。

ゼレナルとゼレラルーテの田の前には幽魔の眠るかんおけが……。

「幽魔は・・この世界の民のために・・・永遠の眠りについたんだ。だから・・泣かないで・・・」

「・・なんで・・何も言わずにお前は・・・一人でやるいつとするんだ・・いつも・・おまえは・・」

ゼレナルが幽魔のかんおけにすがりつき、涙を流していた。ゼレナルー<sup>ル</sup>デも垂んだ顔で慰める。

「俺が・・・いや、私が幽魔の力になりたいと・・何でもいいから言ってくれと・・・言ったのに・・何でお前は言つてくれなかつたんだ。・・・それほどお前にとつて私は・・頼りなかつたのか・・・・それとも・・頼るに値しないとでも言つのか・・・お前に・・幽魔にとつて私はなんだつたんだ！・・」

もう、目覚めることのない幽魔に向かつてゼレナルは泣き叫んだ。

「・・・きっと・・・大切な存在だからこそ言わなかつたかもしれない・・僕はそう思う・・・でも・・・それは・・・ずるいよね・・・幽魔は・・残された僕たちのことなんか考えていらないんだ・・」

ゼレナルの言葉につられたのかゼレラルー<sup>ル</sup>デも涙を流した。

「一人とも泣きながら幽魔が安らかに眠るよう祈りをした。

「無理だよー!こんなに探しても見つからないんだ!」

「無理じゃない…きっと…どうかに…いるはずなんだ…」  
幽魔の後世が…。

ゼレナルーデの諦めの声に心を揺るがされ惑わされ、それでも諦めようとしないゼレナル。

「こんな・・こんな世界を・・幽魔は望んでなどいない…そのために探さなければならないんだ！」

ゼレナルは叫ぶ。ゼレナルの周りの景色は・・いや、この世界の縁が、荒れ果てていた。

草や木は枯れ、水もひあがり幽魔のいたときの、風景が、環境が、全てが、消える寸前だった。

幽魔の努力が失われようとしている。

幽魔の瞳と力さえあれば元に戻る・・いや、今まで以上に豊かになる。  
「ゼル、テ…！お前は、幽魔の努力が無駄に消えていくことを黙つてみでろと言つのか…！」

「それは…・・・。わかった、僕も諦めずに探す。この世界を…マフィルヨウトウルードを救つて見せる…！」

ゼレナルの言葉にゼレナルーデも決意を強めた。

二人は幽魔の後世おそれを探すとここに誓つたのであった。



## 第五章 陽魔の決心

陽魔がゼレナルたちの過去を見ている間、ゼレナルはゼレラルーテに

「ゼルテ、お前に持つてこさせたのは俺だが、今、あいつが見ているのはいつのものだ?」

ゼレナルは確かに自分の過去が刻まれている過去映し鏡を持つてこそせた。

だが、どの時代をもつてこことは言っていない。年代を特定して命じなかつたのだ。

ただ、

『幽魔がいるときのマフィルコウトウルードの風景と幽魔のいないときの風景が見られるやつをもつてこ』

と言つただけだつた。

それ故に陽魔がなにを見ているのか気になつて仕方がなかつたのだ。

ゼレラルーテが

「うーん、どれだつたかな? 確か・・MD789つて、書いてあつたかな? 急いでたからな、あの時は

と思い出したようなそぶりで言つ。

「MD789・・・・と書いてあつたんだな?」

ゼレナルが確認するように聞か返す。

ゼレナルの漂わせるとんでもなく大きい邪氣のオーラにゼレラルーテはビクッと体を震わせた。

「仕方がなかつたんだよ。あれしかなかつたし……急いでいたから・・」

ゼレラルーテはどんどん声を小さくしていく。

説得力の言葉にゼレナルは怒りをみなぎらせた。

「ゼーラルーテー！貴様と言う奴は……どれだけ余計なことをしたら気が済むんだ！！」

ゼレナルは怒りで声を振るわせた。

ゼレラルーテの顔色が見る見る悪くなる。

怒りで我を忘れたゼレナルはもはやゼレラルーテにはじつうこともできない。

ゼレナルが怒るのも無理はない。

ゼレナルが過去の中でも最も人には見られたくない場面が、今、陽魔が見ているのだから。

でも、ゼレラルーテがゼレナルが怒るのを知つていてなお持つてきたことには訳があつてのことだった。

このとき、陽魔がゼレナルたちの過去を見終わった。

陽魔はコンタクトをはずした。その動作を見て、ゼレラルーデが  
「あ、陽魔君、見終わったのかい？・・ビリ・・これでも信じられな  
い？」

陽魔に聞いた。

ゼレラルーデの問いにゼレナルは顔を赤くした。

「これを見たらもう信じるしかないだろう・・俺は不本意だがな。」

陽魔が言つ。

このとき陽魔は

・・・いろんなもの見せられたら信じる以外選択はないや、俺が信じ  
てやらないといつらの涙は報われない・・・信じて・・・こいつら  
のために・・何かしてやりたい・・

と、何か心の中に使命感みたいなものがこみ上げてくるのを感じた  
真っ最中だった。

ゼレナルは自分を落ち着かせ、だがゼレラルーデを睨みながら

「そうか・・。お前はこれからどうしたい？俺たちはお前を探し俺  
たちの世界を・・マフィルヨウトゥルードを救うのが俺たちの願い  
でもあり使命でもあるが。」

ゼレナルは言つ。

「俺は・・ゼレナルたちの言つこと聞くぞ。俺の目はもう人間の目には戻らないんだろ? だつたら、今まで通り生活なんてできねえし。第一、俺が死にそうになつたとき助けてくれたのは、俺の前世の奴なんだろ? お前等には借りがある。どうせあのときに終わる命だつたんだ。だつたら何か役に立ちたいじゃないか。役に立つんだろ? 俺の力が。」

素直に自分の思ったことを口にする。

あの時・・トラックが来たとき、死ぬ! -と本能が察したとき俺は死ぬ覚悟をしていた。

俺の両親が小さじきになくなつてもう生きる意味がないと小さいころ思った。

そんな命を俺の前世の力が助けた。こんな命でも誰かの役に立てるなら役に立ちたい。

今までの生活は楽しいものであつたが、つまらないものでもあつた。こんな非常識な展開になつてもう後戻りもできない状況で俺は面白くなりそうだと思つてしまつた。

それによくなつた俺にはもう選択肢はない。

今までどおりに生活なんてできやしない。俺の人生は俺の人生ではなくたのも同じこと。

少し厄介なことになつてしまつたがあんなものを見せられてしまえば自分はこのまま今まで通りに生活したいと言えるわけがないのも事実だ。

現に困っている奴を田の前で見てみぬふりなんて俺にはできんしな。

「そうだ。お前の力が必要なんだ。お前は・・陽魔は力を貸してくれんんだな？」

ゼレナルが俺に問う。

「ああ。」

俺は答える。

「あ、ゼレナルちゃん今ほつとしたよね？」

ゼレラルーテがにっこり笑って言いつ。

「え？」

思わず声に出る。ほつとしたような表情には見えなかつたからだつた。

「・・・・。ほつとしてなんか・・・いない。」

「またまたあ、照れちやつて。図星でしょ」つづきゼレナルちゃんはすぐ顔に出るんだから。」

ゼレラルーテがゼレナルをからかいつひよひよひ。

「・・・・。」

ゼレナルは、ゼレナルちゃんと呼ばれていることにもかかわらず

押し黙つて反抗すらしない。

「なんかいいなよー。」

俺は驚いた。

あの過去のことも驚いた。

ゼレナルはいつも冷静沈着。

俺は初対面のときからそう思った。

だから余計に驚いた。ゼレナルが泣いたことも今ほっとしたのも。

ゼレラルーテはゼレナルのことによく知っている。

さすが幼馴染と言つべきだね。ゼレナルはいやそつこしていたが。

ゼレナルとゼレラルーテの関係を少しうらやましく思つ。

俺もいつしかゼレナルたちと何もかも話し合えるような関係になりたいと思つた。

そして、ゼレナルたちの力になりたいと心のそこから思つたのだった。

だがそれと同時に、自分が人間ではなくなったことはいまだに信じることができずにこんな風になってしまった自分の人生を俺の前世の奴のせいだとうらみまがしく思つたのだった。



## 第六章 転校生、陽香

「で、俺はなにをすればいいんだ?」

陽魔がゼレナルに問う。

「お前の学校に陽香と言つ転校生が来るはずだ。そいつを調べる。どういう奴か俺に報告してくれ。」

そういうつて陽魔に笛を渡す。

「何だ?これ。」

俺は笛を受け取りゼレナルに問う。

「その笛は、俺たち妖幽鬼ようゆうきならどこにいても聞こえる音の出せる笛だ。その笛で俺に知らせる。笛を吹くときに俺を心で念じろ。そうすれば俺に笛の音は届くはずだ。」

ゼレナルが分かりやすく説明してくれる。

「笛のことは分かったが、妖幽鬼ってのは何だ?」

「妖幽鬼とは、お前にとつて異形な風貌をしていてそれぞれの属性によつて髪の色も気性も違う奴等のことを言つんだ。そうだな・・見てすぐ分かる特徴は・・属性によつて違うが角が生えていたり、周りに魂みたいなものを漂わせていたり、耳がとんがつっていたり・・などなどさまざまなものがあるわけだが・・」

「ふーん。で、属性とやらはいくつあるんだ?」

「属性と一つにくくつたが、まだいろいろ分かれていてな、大まかにくくると三つに分かれるんだ。」

一つは『妖』と呼ばれている系統の奴で魔法などを呪文一つでこの世に具現させることのできる奴らを言つんだ。一つ目は『幽』と呼ばれている系統の奴らでいろいろなものを操ることが出来る奴らのことと言つんだ。三つ目は『鬼』と呼ばれていて主に攻撃系のものを得意とする。」

「へえ。俺はどの部類に入るんだ?」

俺がごく普通の質問を口にするごとにゼレナルとゼレラルーデは顔を見

合わせて

「え～とね、陽魔君のはね・・どの部類にも当てはまるんだよ。すばり言つちやうと、『特例妖魔幽鬼型』っていう、極々稀な系統の型の奴なんだよ。」

ゼレラルーデは気まずそうに言つ。

「ああ。そんなもんだ。あんまり氣にするな、お前の力は、威力が強いが、使うと魔力の消費がものすごいからな。おまえ自身簡単に使えないだろうし、今はあんまり氣にするな。」

ゼレナルが気にするなど強調して言つ。

その物言いに多少引っかかった俺だがその話は今は触れないほうがいいと思い

「ああ。分かった。で、俺の学校に転校生が来るのか？こんな時期に。」

俺は話題を変えた。今は夏。でもつてもう夏休みはもう間近の迫っている七月だった。

「そうだ。だからそつちのほうは頼んだぞ。俺たちはいつたん、マフィルヨウトウルードに戻るからな。俺たちが戻つても聞こえるはずだからな。じゃあ、後は頼んだぞ。」

「じゃあ、またね、陽魔君。」

そういうて二人は一瞬で姿を消してもとの世界に戻つていった。

「はあ、転校生か～。名前からして女なんだろうなあ～ああ～いやだな～」

そう、呟いて俺は明日の用意をしたのだつた。

そしてその翌日の朝。

俺の教室は例の話題で盛り上がりしている真っ最中だつた。

「なあ～聞いたか？俺たちのクラスに転校生が来るんだつてよ。びっくりだよなあ～こんな時期に来るなんてな～。」

「え？まじ？こんな時期にか？珍しいことがあるんだな。いや、珍しいことはほかにもあつたな。」

俺のクラスメイトが、例の話題をしながら俺を見た。

「俺の左目には眼帯をしている。おそらくこの眼帯を言っているのだろい。」

「おー、何で眼帯なんかしてるんだ？ 昨日はなかつただろう。」

「クラスメイトの一人が聞く。」

「あ、ああ。ちょっといろいろあってな。」

「俺は言葉を濁しながら言つ。」

「昨日休んだことも関係あるのか？」

「鋭い奴だな。と、そう思ひながら、」

「ああ。ちょっとな。」

といつた。クラスメイトはまたほかの話題に移つた。

「珍しいといえばほかにもあるや。確か昨日テレビでやつてた。」

「なんだ？ 何かあつたのか？」

俺はなぜか冷や汗が出てくるのを感じた。

「昨日、俺たちの通学路で事故があつたんだよ。トラックの衝突事故がさ。」

「へえー。その辺が珍しいんだ？ 別に事故なんてしようもないあるじゃないか。」

「ああ。事故のほうはな。問題はそこじゃないんだよ。で、テレビでな、トラックの運転手がこうじつてたんだ。『道を曲がつたら子供がいたから急いで急ブレーキしたんだ。そしたら子供がいたはずなのに消えたんだ。』ってな。おかしいだろ？」

俺は今どんな表情をしているだろう？ 俺は今にも卒倒しそうだ。きっと顔色が悪いに違いない。

「ああ。おかしい話だな。信じられんよ。だが、もし、実際に姿をくらませることができる奴がいたら俺たち卒倒しちゃうんじゃないか？」

「俺です、それ。マジに俺です。」

「心の中で言つ俺。」

「卒倒しちゃねえよ。叫びまくつて、頭どうがするんぢゃないか？」

のか？「

姿をくらましたのは俺なんだよな。自分でも信じられないが、ここに  
らに俺がそいつだつて言つたら、  
もし信じてもらえたとしても、ただじや済まされんだらうなあ。  
クラスメイトの話題はそこで途絶えた。  
担任の先生が来たからだ。

先生が

「今日、このクラスに転校生が来ます。さあ、入つてきて。  
教室の扉に向かつて言つ。

ガラーと音を立てて入つてきたのは、少女だった。  
少女は黒板の前にぴたつと止まってクラスメイトのいる方向を向く。  
クラスメイトたちは驚きのあまり声が出なかつた。  
俺もその中には含まれていた。

彼女はとてもかわいかつたからだつた！！！もあるけど、それよ  
り驚いたのは、彼女の左目のことだつた。俺のようにもはや人間の  
目ではない。彼女の目は俺と違ひ薄いきれいな紫色の炎が宿つてい  
るようだつた。俺は息を呑んだ。

彼女の美貌も彼女の瞳も俺の予想を遥かに超えていたからだ。

先生が俺やほかのクラスメイトのことに気を取られず黒板に彼女の  
名前を書いていた。

『妖鬼<sup>ようき</sup> 陽香<sup>ようか</sup>』

書かれた名前がそれだつた。

「さあ、陽香さん、自己紹介をしてください。」

先生が彼女を促す。

「妖鬼陽香です。よろしくおねがいします。」

きれいな透き通る声を出してペコッとお辞儀をする。長いロングス  
トレートの髪がさらつと揺れる。

そのしぐさは俺を含めてこの教室にいる男子にはたまらなかつた。  
クラスメイトたちはここでよろしく声を出すことができた。

「え」と、陽香さんの席は・・陽魔君の隣でいいわね。あの子の隣

よ、陽香さん。」

俺を指差して呟つ。

そのとき、クラスの男子全員からいたい視線が俺に集まつたのを感じた。

俺は幸い教室の窓側の席の一番後ろだから背中にはあのとつともなく大きい憎悪の視線は当たらずには済んだ。

彼女は俺のほうへと歩いてくる。

そして、俺の隣に座つた。このとき、

「よろしく。」

とわざやいで、意味ありげに可愛いく笑うので、

「よ、よろしく」

といいかえした。

その言葉と彼女の笑顔は俺をひどく混乱させた。

その日の授業は集中できなかつた。

無理もなかつた。

クラスの男子は俺をにらんでくるし、休み時間も教室の中は騒ぎっぱなしでぜんぜん休めなかつた。

だが、不思議なことに誰も彼女に話しかけることはなかつた。

休み時間でさえも。

俺は必死で彼女を調べようと彼女にばれないように観察していた。だが、時々目が合つた。彼女はそのたびに可愛い笑顔を俺に見せてくれたのであつた。



## 第七章 陽香の情報

陽魔は帰り道、はあとため息をついた。

あ～、授業に集中することができなかつた。

なんてことだ。ただでさえ成績が悪いのに。

いつ、この世界を離れるか分からないつてのに。

そう思いながら道端をとぼとぼ歩く陽魔だつた。

そのとき、

一ピ

と、何か笛の音がなつたのが聞こえた。

「！？」

何だ、何だ、何なんだ？

俺が俺でなくなる。

そう、本能がとつそに感じたとき、俺は俺でなくなつた。

眼帯が急に取れた。

左田があらわになる。

笛の音がさつきよつも強く聞こえる。

笛はあるで俺を呼んでいるかのようだつた。

俺は幽魔の能力を使い笛の音がするほうへ向かつた。

空中に浮かび笛の音するまくまくすぐ向かう。

笛の音は俺の中の何かを呼び覚ますよつた音を響かせていた。

俺は体中に走る痛みをぐつとこらえる。

その痛みと同時に頭痛と急激なだるさが襲ってきた。

だが、不思議なことに力尽きたよつたことはなかつた。

体はどこかで自分の疲れや痛みを感じていて。

でも今、飛んでいるといつ行為を邪魔しているわけではなかつた。

おかしい。

普通なら疲れや痛みを体が感じるなら行つていて動作を邪魔しようとするよつなものだ。

そこが不思議でたまらなかつた。

景色はすごい速さで変わつていく。

本来ならありえないことだ。

そう思えるのに、今はそれが当たり前のように感じる。

それも不思議に感じた。

俺は笛の音の原点を見つけた。

それは、森の中 だつた。

俺は森の中に降り立つ。笛を吹いていたのはゼレナルだった。

「ゼレナル・・お前だつたんだな。」

俺が言った。

そのはずなのに声の調子がおかしい。

自分がいっているはずなのに自分ではない誰かが言っている気がする。

「！？・・・ああ。お前を呼ぶためにな。」

ゼレナルが言つ。

ゼレナルは笛を吹くのをやめた。

ゼレナルが笛を吹くのをやめたとたんに、俺は地面に座り込んだ。

体中から一気に力が抜けて、立つていても立つていられなかつたからだつた。

「この笛はお前を呼ぶ道具もあるが、同時にお前の力を呼び覚ます道具もある。」

「だからか。変な感じがしたのは。道理でおかしいと思つたわけだ。

」

ゼレナルの説明に俺は納得する。

「どうして俺を呼んだ理由は何だ？」

「それは陽香の事についてだ。先ほど情報が入った。」

「情報つてのは？」

「その前に、お前から、陽香のことを話してもいいとする。話せ。」

「俺がゼレナルをせかしたのがいけないのか、ゼレナルは俺から話させようとする。」

「俺からって言われても。普通の子とは違うなって思つただけだな。後は誰も、その転校生に近づいたりしなかつた。つてのが俺から見て気づいたことだな。」

「やはりか。」

俺の言葉にゼレナルはなぜか予想的中つて感じの言葉を吐いた。

「やはり？」

「ああ。情報からは、陽香といつ奴は自由自在といつわけにいかんが多少なりとも能力は使えるらしい。その能力は霧。」

「霧？」

「ああ。霧だ。相手を惑わし自分には近づけなこようとするところ、ある意味恐ろしい技だ。」

「じゃあ、何で俺は……いやなんでもない。他には？」

「？・・ほかこといつど、陽香の前世は 香鈴 といつりじい。

俺はそいつはあまり見たことはないが。とにかくそいつと接触しないことには変わりないが。」

「・・・接觸したらどうなるのかな？」

透き通つたきれいな声は俺の後ろから聞こえた。

「陽香ー!？」

思わず叫んだ。

陽香は俺とゼレナルのまわりに向かって歩き出す。

「あ、名前を言つてくれるなんてうれしいわ。陽魔君だったわね。君も能力が使えるのね。」

「しまつた。」

陽香の声に俺は眼帯をして左目を欄と輝かせて言つた。

陽香はつまご紫色をした左目を欄と輝かせて言つた。

「わー・・・わー・・・笛を鳴らしてたのはあなたなのね・・・・

「あ。」

「・・あなたは誰?」

「俺はゼレナル。お前を探してた。」

「あなた・・自分の事・・・隠していろよ! ほんのま  
あいいけど。」

何でだらうか。陽香は辛うじて息を吐いてしゃべる。

俺が不思議に思ったそのとき、陽香の足が止まりその場に倒れた。

「!?

「おこつー?」

俺は自分の足に力をいれ立ち上がり、陽香のところへ駆け寄った。

俺は陽香を抱き起します。

陽香は気を失っているようだった。

田を開じた陽香の顔はかわいらしく無防備なものだった。

だが、顔色が悪い。

「・・こつは俺たちに接触しようと無理をしたよ! だな。」

ゼレナルが見透かしたように言った。



## 第八章 強気な陽香

俺は陽香を自分の家に連れ込んだ。

言い方が悪かつたが別にやましいことなんて考えてないぞっ。  
これっぽっちもなつ。

あんなとこに置き去りなんてできなかつたんだから仕方がなかつた  
んだつ。

「お前に言つておかなければならぬことがある。」

ゼレナルが言ひ。

「何だ?」

「お前が能力を多少なりとも使えるようになったら俺たちの世界マ  
フィルヨウトウルードに  
きてもらひ。」

「ああ。いいぜ。」

俺は言つた。

冷静にこの件のことを考えればいい判断だと自分でも思ひ。

「ん? いは・・・?」

陽香が田を覚ましたようだつた。

「俺の部屋だ。あんたをあんなとこに置き去つてあるよつましだり  
いと戀つて。」

陽香は俺のベットから起き上がつた。

「わづね。置き去つにされるよつは。ありがとひ、陽魔君。それよ  
り、名前で言つてくれない?..  
あんたとかそんな風に呼ばれるの好きじゃないの。陽香よ、よ・ひ・  
か。」

陽香は最後に自分の名前を強調して叫びへ。

「分かつた。」

「じゃあ、名前で呼んで。ほひ。」

俺に陽香は顔を近づけていった。

元気だな。わざはあんなにうなされていたんだが。

俺は内心やう思つた。

わづね、俺がここまで連れてくる最中、何度もうなされてこらゆつ  
な声を出していた。

それが今やこんな状態である。

回復が思つたよりも早い。

「・・陽香・」

俺は言った。

なんかとんでもなく威張られてる気がする。

「よろしい。じゃあ、わたしも君付けじゃなくて呼び捨てにするわ。  
ねえ、陽魔はいつ記憶が戻ったの？」

「は？ あ、ああ、つい最近だな。何でそんなこと聞くんだ？」

なんか俺、陽香のペースに乗せられてる気がするぞ。

「それは今から分かるわ。  
ねえ、ゼレナルといったあなた、陽魔の前世がそちらの世界で死んだのはいつのこと？」

「・・半年前だ。」

ゼレナルがぶつかりぼつに言い放つ。

「それを聞くために俺に聞いたのか？」

「そうよ。私は陽魔より、一週間以上先に記憶が戻ったから、  
陽魔の前世が死ぬ前に私の前世は死んだのね。」

陽香は自分でうなづんと頷く。

「なぜこんなことを聞く？」

ゼレナルが陽香に聞いた。

「それは前世から後世になるまでどのくらいかかるかなと思つて聞いたのだけど。でも、私たちが生まれる前に前世がいるわけじゃないことが今判明したわ。」

「それってありえるんだ・・・」

俺は呟いた。

普通前世が死んだ後に後世つてのが現れるんだとばかり・・・

「普通はありえない。だが、世界が違うから時差が生まれる。俺が今までそう予想がついた。」

ゼレナルが言った。

「そうね。それならありえるわね。」

だったら私や陽魔がそっちの世界にいてもこっちの世界の時間をとめておくことはできるかしら?」

「止めるのは無理だが、時間を戻すことならできるはずだ。もともと、お前らがこの世界に帰る勇気があればの話だが。」

「やうね。私を笑うよつた奴がいるこんな世界に戻つて無意味だと私は思うけど。」

まあ、念のために聞いたことよ。気にしないで。」

「陽香はあつちの世界に行く覚悟はできてるって言つのか?」

「ええ。あるわよ。陽魔はないの？」

「あるや。ただ、当たり前のようになつてゐるからつい聞きたくなつただけや。」

「そういうもの？私はこの目がなくとも、それが日常だつたから、  
陽魔の気持ちは分からぬにけど・・・」

「人生人それだからな、その辺はやっぱいいぜ。で、ゼレナル、  
これからどうすんだ？」

「とにかく今までじおり過いしてくればまわない。  
ただし、陽魔、お前は能力の訓練を受けてもらひ。」

「訓練？それってきついのか？」

「陽魔の訓練、私が付き合つてもいいわよ。」

「いいのか？」

「ええ。」

「え？陽香が俺に？？」

俺はびっくりした。

まさか陽香が突然そんな発言するとは思つても見なかつた。

「じゃあ、頼む。やり方は任せる。俺はいろいろ手続きがあるから

しづらへ留守に」する。

その間、多少なりとも使えるよ」になれよ、陽魔。」

ゼレナルはそうこうして、虚空に消えた。

おやらくもとの世界に戻つていったのだろう。

俺の部屋には俺と陽香だけになつた。

「じゃあ、私もこれで失礼するわ。陽魔、また明日学校でね。」

「ああ。だが、一体いつからはじめるんだ?」

「訓練のこと? それは夏休みからよ。もうすぐでしょ?  
そのときになつたらまた会いに来るわ。そのとき、陽魔も私に勉強  
教えてね。」

「勉強だと?」

「わうよ。わたしできないうから。じゃあまたね。」

そつこつて陽香は俺の家から出て行つた。

俺、人に教えるの苦手なんだけどな~

心の中でそう思いながら俺は明日の支度をした。



## 第九章 訓練

陽香が転校してきてからもなく夏休みに入った。

夏休みってのは楽しいだけの時間がずっと続くわけではない。

それを俺は夏休み序盤に思い知らされたことになった。

夏休みに入つて早々に陽香が俺の家に訪れた。

訪れるなりいつた言葉は

「陽魔、こんにちは。早速、勉強教えてもらひにきたよ。」

だった。

「は?」

俺は、一瞬、頭が真っ白になつた。

「だから、勉強だつて。昨日のこと、もう忘れちやつた?」

陽香は宿題を俺に見せ付けて言った。

昨日・・そりいえば

「明日、陽魔の家に行くから、そのとき、勉強教えてね。」

つていわれた気がする。

それ思い出した俺は

「あ、悪い。今思い出した。」

と、素直に言つた。

「記憶力悪いのね、陽魔は。」

「そうか？」

陽香のあきれた声に俺は首をかしげる。

「まあ、いいわ。とにかくあがらせてもらひますよ。」

「あ、ああ。」

陽香は俺の家に即座に入つていた。

俺は俺の部屋に案内して、テーブルに勉強道具を置くよう指示した。

「分からないとこがあったら言えよ。あと、俺、教えるの下手だからな。」

俺は陽香に向かつて言つた。

「分かつたわ。」

陽香は言った。

それで俺たちは宿題を終わらすために励んだんだ。

陽香はちょくちょく俺にわからないといつて聞いてきた。  
そのつど俺が教えた。

俺の教え方で理解したのかどうか分からなかつたが、  
同じ問題には何回も質問はしてこなかつた。

宿題の半分以上を一日で俺と陽香は終わらせた。

一日でこんなに終わらせるなんて・・・普通、無理だ・・

そつ思ひざる終えないほどの量を俺と陽香はやつてしまつた。

我ながらにすごい集中力である。

「陽魔の教え方は下手じゃなかつたわよ? 理解できたし。」

「やうか?」

陽香は俺の教え方は下手じゃないといつてくれた。

でもなんか妙に引っかかる。

理解できただけなのか?

俺はわかりやすいといつてほしかつたなと心の中で思いながら、

「ヒーリング、どうあるんだ？俺の訓練のほうは。」

と、話題を変えた。

もつの方である。

「わうね、とりあえず能力開花からかしぃ？」

「能力開花？具体的にはどうやって？」

「陽魔の能力はどの部類にも当てはまるでしょ？私もそうだけど。特に当てはまるものを探す訓練をするの。そして自分の能力で最も得意とする能力を見つけるのよ。」

「その見つけ方は？」

「全部の部類の練習法を行いつてのが一番手っ取り早いわ。とりあえず、妖、幽、鬼、の三つの属性の練習法を行いつてからはじめましょうか。」

「どれが得意かすぐ分かるのか？」

「そうね。

まあ、練習法って呼べるものじゃないけど、一つの属性に反応を示す水晶を使って調べるのよ。」

「水晶？」

「さうよ。

一つの水晶に大まかに分けた一つの属性しか反応しないから結果的

「は三つ用意するんだけどね。」

「水晶を使ってどうやって？」

「それは自分の中にある波動エネルギーを水晶に注ぎ込むのよ。まだそれすらできないみたいだから、波動エネルギーを自分の外に具現するところからだけど。」

「実際どうやって？」

「手と手の間をじぶしの大きさほど開けて手に力を集中させてイメージするの。実際にやってあげる。」

陽香はそうやって実際にやって見せた。

陽香は説明じおりに手を構えた。構えを取つてから波動エネルギーが具現化されるまでそんなにからなかつた。

そして、陽香の手と手の間に薄い紫色の光が生まれた。その光こそが波動エネルギーだと分かつた。

光を維持したまま、

「陽魔、背中を私に向けて・・そのまま陽魔に私のはどうHエネルギーを注ぎ込むから。

注ぎ込めば訓練しだいですぐに陽魔も・・具現することができる・・

「

と、陽香はひょいと辛をつて言った。

俺は陽香の指示に従つて背中を向けた。

「いくわよ。」

陽香が言つたと同時に、俺の背中から何かが入れられたような感覚に陥つた。

「…」

声にならないほど体中に違和感が襲つて来る。

痛いわけじゃない。

でもなんかおかしい。

じきに違和感はおさまった。

違和感がおさまると同時に体中から力が湧き出でてきた。

「な、なんなんなんだ、これはっ」

体から何かオーラみたいのが沸き起ころ。

「それは…オーラよ。陽魔…それが体を包むようなイメージをして。集中して。」

陽香が言つ。

俺は言われたとおりにイメージに集中した。

するとそのオーラは俺の体を包むよじにしてどぎました。

「なんとか、開花は成功させたわね。後は具現化だわ。」

「具現化？」

陽香の声に思わず聞いた。

すると、俺の体を包んでいたオーラが突然消えた。

「なつ」

「集中力が切れたからよ。さて具現化法だけど、まずはイメージ練習よ。

さつき私がやつたようにするの。

まあ、それは明日ね。陽魔はイメージ練習を今日はやつてね。最低一時間はやってほしいわ。

じやあ、私は帰るわ。」

「あ、ああ。大丈夫か？顔色良くないぞ・・・って、おいつ――！」

俺が声をかけたと同時に立ち上がった陽香がふりついて倒れそうになる。

俺は急いで支えた。

「おい、大丈夫か？」

「・・・」

声をかけたが返事はない。

気を失つた？

俺はそう思つて陽香のあいをくつと持ち上げると、案の定、氣を失つていた。

おわりへ、わざ、波動エネルギーを俺に注ぎ込んだからだりつ。

俺は陽香を抱えながら時計を見た。

5時を過ぎている。

どうじよづか？

俺、陽香の家、知らない。

このまま、陽香が意識を取り戻すまで待つしかないのか？

とりあえず、俺はリビングのソファに陽香を寝かせた。

相変わらず寝顔は可愛い。

その後、俺は夕食の用意をし始めた。

トドけられが済んでも、陽香は意識を取り戻さない。

時間は刻々と過ぎていった。



## 第十章 夕食

陽香は俺が夕食を作り終えたところで意識を取り戻した。

回復が早い奴だな。

「大丈夫か？」

俺の声にはつとして陽香は起き上がる。

「へいき、よ・・」

声からしてまだ調子が悪いみたいだ。

俺は窓から外を見た。

もう暗く、月が外をぼんやりと照らしていた。

こんな時刻に一人で陽香を帰らせるわけにはいかない。

「陽香、お前んちつてどーじだ？」

「え？」

「教えるよ。俺が送つてやるからや。」

「ひ、一人で帰れるわ。」

俺の言葉に驚きながらも断わりつとする陽香。

今の状態の陽香は一人で行かしちゃいけない。

「無理するなよ。困るだ、俺は。道端で倒れた、なんて。」

「・・・」

俺は素直に自分が思ったことを言つ。

陽香みたいなかわいい子が道端で倒れてるなんてところを他の男が見たら・・・

と、思うだけで怒りが込みあがつてくる。

「俺が送るから住所教えろよ。」

「分かった。教えるわ。」

俺の言葉に不満ながらも一応承諾してくれた。

陽香、腹すいてないかな・・・？

「なあ、時間も時間だし、俺んちで夕食食べていかないか?」

戸惑いながら言つ俺。

断られるかもしない・・・所詮、俺の料理だからな。  
だが料理はうまいはずだ。  
何年も作ってきてるんだからな。

俺は料理に自信があった。

だが、それと同時に俺の味付けは陽香に合つかどうかといつ不安もあつた。

「いいの？」

陽香は戸惑つているようだ。

俺は陽香と視線を合わせないようにしながら、

「いいぜ。陽香がいいならな。」

と、言つた。

「・・・じゃあ、お言葉に甘えるわ。」

陽香は言つた。

俺はリビングにあるテーブルに料理を並べる。

そして陽香のいるソファに近づき、手を差し伸べる。

「？」

陽香は俺のした行為の意味が分からぬようだった。  
分からぬいというよりリアクションに困つたという感じだったが。

「ほり。まだふらつくだろ？」

「・・・・ええ。ありがと。」

差し伸べた俺の手を陽香は戸惑いを見せたが手をとってくれた。

陽香の手と俺の手が触れた。

その瞬間、俺は顔が熱くなるのを感じた。

陽香の手は小さくわずかだがひんやり冷たい手だった。

でもその手が触れた瞬間、顔が、体中の体温が一気に上がったのを感じた。

どうなつてんだ？

俺は落ち着きを取り戻しながら陽香の手を引きながらテーブルへ促した。

陽香を座らせて俺は陽香の向かいの席に座る。

そして夕食を食べ始めた。

一口、俺の料理を口にした陽香が

「・・美味しい・・」

と、呟いたのが聞こえた。

さつき落ち着きを取り戻したばかりなのにまた熱くなるのを感じた。

「そ、そりゃあ？」

声がなぜか裏返る。

「え、ええ。とても。なんだかとてもあたたかい。」

「できたてだから、だろ?」

「そんなのじゃないの。言葉じゃ表現できぬ温かみが感じるのは。」

「ふーん。まあ、まあ、氣に入ってくれたんならいいけど。」

料理の出来立てとかと違つ、あたたかみ?

そんなの考えたことないな・・

まあ、陽香が氣に入つたんなら別に文句はないけど。

その会話以外俺と陽香は全く話さなかつた。

やがて夕食が食べ終わった。

そして俺は陽香に、

「行けるか?」

と、聞く。

「ええ。」

陽香は答える。

いつもより元気がない陽香に俺は不安を感じた。

不安を心の中に押し込んで俺と陽香は陽香の家に向かった。

俺たちの歩く道は月明かりに照らされている。

夜道を歩くのは久しぶりだな。

歩きながら少しうつ思つた。

俺の右隣には陽香がいる。

「その道を左。」

「次は・・右。」

「その・・ま・ま・・・・・まつすぐ・・

陽香の声は言つたびに小さくなつていぐ。

俺がそのことに気づいたとき、右腕をとつてつかまれた。

「陽香? ? .」

なぜつかまれたのか分からず言つてしまひ。

俺は陽香を見た。

すると陽香は俺の右腕に自分の腕を絡ませて下に俯いている。

「！」

陽香を見て声を上げそうになつた。

そこには自分の目を疑つほどの事実があつたからだつた。

陽香が震えてる！？

自分の目を俺は疑つた。

陽香のよつな強気な子が震えている。

その事実を今、たたきつけられていた。

なんでだ？なぜ、陽香のよつな奴が・・嘘、だろ？

嘘だと思った。

だが、陽香の腕から俺の腕を通して震えがとても伝わってきた。

俺はその場で立ち止まつた。

「陽香？」

「怖い

「！」

初めて聞いた陽香の怯えた声に俺は驚く。

「何が怖いんだ？」

「・・・・・」

陽香には俺の声が伝わってないはずだ。  
なのに返事がない。

陽香はいまだに震えている。

「怖いっ」

震えは声とともに止昇してくる。

俺は思わず陽香を抱きしめてしまった。

「ひー」

陽香は驚くよいつな声を漏らす。

陽香が震えていて、怖いって言つておびえていたことによつて  
俺から、『抱きしめて守りたい』ところの衝動が湧き起つてしまつ  
た。

我慢できずにしてしまつ。

何で俺・・・こんなこと・・

自分でも分からぬ。

何なんだ、この気持ちは。

「陽香、何をそんなに去えているんだ？」

「・・・」

「黙つてちや分からぬ。なんでだ?どうしてそんなに去えているんだ?」

「・・怖い・・怖い・・」

俺の言葉が届いていいかのよつた呟きを陽香は放つ。

俺はとりあえず陽香を放した。

「家はどうだ?」

一応聞く。

「い・・え・・」

「やうだ。ここからどう行けばいい?」

「・・あの道を左。そこまで・・家がある。」

「やうか。」

陽香には俺の声は聞こえていたとは分かつた。

だが、震えは止まらず、腕も絡められたまま。

腕はこのままのまゝがいいけど……震えは止めないと……

怯えている陽香は見たくない。

俺は絡められている腕を解き、陽香を抱き上げた。

「……」

驚く陽香にかまわず俺は歩き始める。

そして俺は道を左に曲がった。

そこに陽香の家があつた。

妖鬼といつ札をかけている洋風の家が。

家を見て安心したのか、陽香の震えが徐々にとまつていく。

「いいでいいんだよな?」

思わず聞いてしまう。

「うん。もう……いいから。……おひして」

「あつ、わるい。」

謝つて陽香をおひす。

陽香はおぼつかない足取りでドアの鍵を開ける。

「お、おい。大丈夫なのか？」

心配になつて聞いてみる。

「平氣だよ。ありがとね。じゃあまた明日。」

「あ、ああ。」

陽香は無理してそつた笑顔を残してドアの奥へと消えた。

あいつも・・・一人暮らしなんだよな・・・

不意に思つてしまつた。

何でだらり？俺だつてそつなのには。

俺は疑問と心の中から不思議と湧き出る不安を抱えて自分の家に帰つた。



## 第十一章 過去の出来事

俺は陽香を家まで送った日の夜はなかなか眠ることができなかつた。

寝不足のまま、陽香が来るまで待つていた。

待つていても来る気配はない。

あいつ、やっぱ調子が悪いんじゃないだろうか・・

心配になつて俺は陽香の家に向かつ。

そうこえは、訓練してないな。

そつ思いながら、陽香に教えられた道を歩く。

家だけでなく、あいつの電話番号も教えてもらひえよかつたな。

後悔しながら思つ。

天氣は快晴、雲ひとつない青空。

その景色を畠で見てくるはずなのになぜか左田だけは違つ。

そのことに驚いて思わず俺は道端に立ち止まつた。

なんだ？？これは？

前世の・・過去？？

まるで今、自分がその場にいるような感覚に陥った。

その風景は、建物の中で俺の前世がベットのようなところで寝ている誰かにタオルを額に当てるところだった。

その誰かは起き上がりうとするが体がふらつき倒れる。  
前世がそいつを慌てて支える。

不安、心配。

俺の前世が思つてることなのに自分の感情のよつて細えて仕  
方がない。

俺は右田を開じて左田でその光景を見入った。

『お、おい、香鈴。無理すんな。』

前世が言つ。

香鈴？？

俺はその名に聞き覚えがあつた。

あつー思い出したー！

香鈴つて陽香の前世の奴だつー！

俺は思い出した。

じゃあ、やっぱり・・過去・・なんだな。

ゼレナルが以前に言つていた。

「俺はあまり見たことがない」

と。

ゼレナルはあまり見たことがないといつただけであつて、俺の前世のことは何も言わなかつた。

ゼレナルは俺の前世 幽魔 と陽香の前世 香鈴 が接触していたことを知つていたんじやないかと、俺は思つ。

あまり見たことがないだけで。

だから、俺に陽香と接触しようと言つてきたんだらつ。

仮説を立てながら俺は過去の出来事に見入つた。

『大丈夫・・だつて。そんなに心配しなくたつて・・』

香鈴がつらそうに前世に向かつて言つ。

心配に決まつてゐるだろ。

前世の感情が痛いほど分かる。

『心配するわ。心配させたくないから早く風邪を治せ。』

前世が香鈴をベットに寝かせタオルを香鈴の額に当てながら囁く。

『・・心配かけて、めん・・

『いいわ。お互い様だろ?..』

『あはは・・そつかもね・・』

香鈴は力なく笑った。

『もひ・・寝る。早く治してくれ。でないと・・おれが・・

前世は辛そうに囁く。

俺にはお前が必要なんだつ!

俺には・・お前の存在がつ・・!

前世の気持ちが流れ込んでくる。

そこで途絶えた。

俺は右田を空けた。

両田は同じ景色が写っている。

俺は陽香の家に向かつて走り出した。

不安、心配。

前世の感情が今も俺の中にはあった。

いや、違う。

これは俺の感情だつ。

俺自身と前世の俺の想いが一つになつて俺の心を埋め尽くす。

俺は心の中にある想い全てを開放し走り続けた。

そして、ようやく陽香の家に着いた。

## 第十一章 熱

俺は「クツ」とつばを飲み込んだ。

女子の家に訪れるなんて生まれて初めて。

なんか異様に緊張する。

ドクン、ドクン。

心臓の音が高鳴る。

俺は思い切ってインターホンを押す。

ピンポーン

音が鳴り響く。

しかし、誰も出てこない。

やつぱり何かあったか？

不安になつて俺は一步足を踏み出した。

金属の出すいやな音が足元から聞こえた。

俺は足元を見た。すると俺の足元には鍵が落ちていた。

キギイイ

ん? 何で「こんなところにあるんだ?

俺は周りを見渡してみた。

「一。」

そういえば、ポストがあけたままだ。

ポストの中は空っぽ。

陽香が来たつてことか?

ポストは空っぽで鍵がドアの前に落ちてこる。

こんなことつてある??

陽香つてそんな奴だったか?

いや、昨日のあいつならありえる。

てゆーことは、今はドアが開いてるつてことか?

あさすに入られてもおかしくないぞつ

俺は恐る恐るドアノブに手をかける。

ガチャリ

やはり、ドアには鍵がかかっていなかった。

俺はドアから中へ入つてみた。  
そして靴を脱ぎ、

「お、お邪魔します」

と、小声で言つた。

中は明るい。

俺は、

「陽香ー、いるかー？」陽香ー」

と呟きながら家の中をうろついてゐる。

すると、

「ん、よおうまあ・・？」

と、ひょりひょり顔を出してふりふりした足取りで近づいてくる陽香  
がいた。

「陽香ーーー！」

格好は昨日のまま。だが、昨日より状態が悪化していくことは顔色  
と声から分かった。

俺は叫んだ。

陽香は突如その場に座り込んだ。

「あ、おこつーー。」

俺は急いで駆け寄った。

「なんだえ・・・」「おこなーー・・・?」

からつじて聞こえるが、なんだかわづが回つていなー。

陽香は俺を見上げた。

熱っぽい手で見つめてくる。

「何でって、言われても。ただ陽香が心配できただけなんだば。」

咳きながら、俺は陽香の背に触れる。  
服からでも熱が伝わつてくる。

陽香の背を上方で支え、もう上方の手で陽香の額に触れた。

「あつひ

思わず呟んだ。

「あつあやばー。高熱だ。

「お、お前つー熱あるじやんか。びりして寝てないんだつーー。」

俺は怒鳴った。

「はあ・・・はあ・・・」

陽香は俺の声が届いてないらしく、呼吸を乱していた。

意識も朦朧としてるみたいだ。

俺はひょいと陽香を抱き上げた。

「・・・」

熱で意識が薄れている陽香は抱き上げられても全く反応を示さない。

これか「りづ」する?

陽香の家にあるもので高熱を「じ」にかできなさそうだし・・・

俺の家に運ぶしかないか・・?

俺は考えた末、俺の家に運ぶこととした。

急いで靴を履き、一応落ちていた鍵でドアに鍵をかけ、陽香を抱え走つて俺の家まで運んだ。

抱き上げた格好は走りにくいから肩にかつぐ格好で走つた。

走つている反動で多少揺れただろうがそこは気にしない方向で。

とりあえず俺んちにあるソファに寝かせた。

そのあと、居間から毛布を持ってきて陽香にかける。氷水で濡らしたタオル用意して陽香の額に当てる。

これで何とか対処できた。

「はあ、はあ」

陽香の呼吸が聞こえる。

よほどつらじょうだ。

俺はタオルをいつでも帰れるように、氷水を桶に入れといた。

俺は陽香の寝るソファの下でソファにもたれるように腰掛けた。

ね・・むい・・

動いたから・・か・・?

寝不足だった・・せい・・かあ・・・

重いまぶたをゆっくり閉ざして俺はすやすやす眠りについた。



## 第十二章 過去と同じ出来事

俺は腹がすいて目が覚めた。

「ふああ。」

俺はあくびを一つかまして起き上がる。

時計を見たら1~2時を過ぎていた。

何か作るか・・

そう思って立ち上がったそのとき、

「ハハ・・ハハ・・ハハ・・」

と、陽香のうなされた声が聞こえた。

思わず陽香のほうを見る。

うなされた陽香も・・ぐつとくる。

思つてはならぬことを平氣で心の中で呟く。

俺は陽香の額に手を伸ばす。

わつきより熱が上がつてはないだらうな?

額に手が触れた。

さつきは燃えるような熱さだったが、今はほんのりとしたでも暖かさが残っていた。

熱は下がったようだな。

悪夢でも見ていくようなうなされかただ。

陽香の回復は予想以上に早い。

今までそのことに驚かされている。

俺は熱がある陽香にも食べれるような料理を作ることにした。

トントントントン、ジュー・ジュー・ジュー、ピトピトピトピト

手際よく進めていった。

そして全部作り終える。

俺は陽香の額においてたタオルを変えようと陽香に近づく。

そして陽香のタオルに俺の手が触れたとき、ぱっと陽香が起き上がり、手をつかまれた。

「…？」

俺は突然のことで混乱した。

「ハア、ハア、ハア」

陽香は肩で息をしていた。

そして俺をまっすぐ見つめてくる。つかんだ手を離さないとでも言いうよつて。

陽香の苦しそうな、つらそうな表情を俺は見た瞬間、俺は冷静さを取り戻した。

「陽香つ、まだねてるよつ。お前・・熱がまだつ・・・!？」

俺の言葉をさえぎるように陽香が俺に抱きついた。

陽香が俺に倒れる形で抱きついてきたからたまらずソファから落っこちた。

もちろん俺が下で陽香は上。

床にはじゅうたんを敷いてないから俺は思いつきり床にたたきつけられた。

だが、その負担よりも陽香に抱きつかれた衝撃のほうが俺には強かつた。

「陽香?..?」

俺は混乱状態に陥った。

「よよよ・・よ、陽香つ！」

なんで…?おまえ・・いったいなにを・・・?」

それまでの冷静さはもう碎けて散つていったかのようだった。

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

しばらへじの状態が続いてようやく俺は落ち着いた。

俺は落ち着いたが、陽香の様子がおかしい。

「どうした？」

思わず聞いてみる。

「ゆめ」

「ん？」

俺に陽香が抱きつき今は俺に陽香が顔をつづめたような格好にいる。そんな中で陽香は呟いたのであった。

「ゆめを見た・・・

「怖かったのか？」

俺がそう聞いたとき、陽香が震え始めた。

「陽香？」

陽香が俺の背中に手を伸ばす。

何の夢を見たかは知らんが悪夢だつたことに違ひない。

俺は陽香の頭をなでてやつた。

しばらくして続けて俺は陽香が落ち着いたと判断したとき陽香をゆっくり引き離した。

そして陽香の額に手を当てる。

急に動いたせいか、また熱が上がっている。

「まだ熱がある。まだ寝てろ、な？」

「もう・・大丈夫・・」

「無理してるだろ？無理すんなよ？」

「・・・心配しなくて・・」

「あるわ。そんな状態だと俺が困る。」

俺は言つた。

無理してよけい体を壊されると心配で仕方なくて・・いてもたつてもいられないんだよ

心の中で呟んだ。

「心配かけたくないなら早く治せよ、な？」

「・・・」

俺は何も答えない陽香を再びソファに寝かせた。

「・・・ごめん・・・」

「いいや。・・・」

俺はそろいながら毛布をかけ直す。

なんか、前世でやった俺たちの出来事と同じような感じだなあ。

と懶にながら俺は陽香を見つめた。

「料理食べれるか？」

俺がそういたとき陽香がまた起き上がりついた。

「お、起き上がるなくていこいっ。お、俺が運ぶから。」

やつこつて俺は近くのテーブルまで運んだ。

そして上半身を無理に起した陽香の前に持つていぐ。

「無理すんなよ。」

そういうながら俺は近くのいすに座った。

すると陽香は俺の料理をゆっくり口こじた。

「美味しい」

「わつか？なら安心だな。」

陽香は美味しいといって食べててくれた。

ちよつとうれしくてまともに陽香の顔が見れなかつた俺であつた。



## 第十四章 波動の光

俺と陽香は昼食を食べ終えた。

陽香には そのまま寝てろ といって  
自分は波動エネルギー具現化練習を開始した。  
あぐらをかいて両手を前に突き出し拳の大きさほど間を空けて集中  
する。

「・・・・・」

しばらくの状態で集中していただが波動エネルギーは全く出てこな  
い。

あつ！

俺はある!とを思い出した。

集中するだけじゃないんだつた。イメージしないと。

つていつもどんな風にイメージすればいいんだ??

悩みに悩んだ結果俺は陽香のした動作全てをそのままイメージした。

そのことだけに集中して雑念を追いやった。

「・・・・・」

「・・・・・」

しばらく続けると、俺の両手の狭間に青い光が輝き始めた。

思わず声を出さうとした。

(でたつーみせりへつ・・・)

心の中で叫んだ。

「・・・・・」

俺が今出したのは具現化した波動エネルギーだと想つ。  
でもこの後どうすればいい?

頼みの綱は隣にあるソファで寝てこる。  
と、こうよじ寝かせてくる。

一体どうすれば・・?

「ー」

そういえば、陽香が言っていた。

「水晶に注ぎ込む」

ヒ。

注ぎ込むって言つてたけどなぜひやるんだ?

波動エネルギー『これ』を自在に動かせるようになれて言いたいのか・・?

結構・・無茶な気が・・・

そんな諦めの言葉が脳裏をよぎる。

陽香にもできたことだ、俺もできるはず。

頭を振つて脳裏から言葉を追い払い自分に  
できるができるができるができるができる・・・  
と、暗示をかける。

傍から見たら怖いかもしない。  
うん、きっと・・・

そつ思いながらも暗示をかけて集中する。

注、<sup>き</sup>込もって言つただから伸びたり縮めたりできなことだめか・・?  
?

多少無理があつたが頑張つてイメージする。

漫画やアニメを見ていればイメージも楽にできた。

イメージしたらすばぐに伸び縮みできた。

想像力つて・・スバラシイ

不意にそう思った。

あ～ヤバイ。どんどん狂った《あつち》の世界へ行っちゃいそう。

暗示つて・・・オソロシイ

俺は・・もう無理つ。

「あー、ツカレタ～。」

青い光<sup>エネルギー</sup>は、ぱつと消えた。

言葉がなんかおかしい。

暗示の影響力か・・?

まあ、とにかくできてよかつた。

第一段階は無事できたな。

だが・・・

「ふー」

こんなにも疲れると思わなかつた。

体中に疲労と眠気が駆け巡つてゐるようだつた。

これで倒れない人つてすごいよな。いや、人じやないけど・・

そう思いながら俺はその場に倒れた。

すやすや寝息を立てて眠りの世界に落ちていった。

## 第十五章 第一段階突破

あれから陽香も日が覚めて、今は夕食を食べている。

夕食が食べ終わったら第一段階、波動エネルギー具現化・・・を見せるつもりである。

陽香の具合は時間が経過するたびに良くなつていった。  
そのことに疑問を持つて思わず聞いてみると・・・

「なあ、何でそんなに回復が早いんだ？」

「回復？そんなに早いの？私って・・・」

「ああ。お前、朝は高熱だしまくりだったってのに今はもうすっかり元気じやん。」

「ふーん。まあ、早くて当たり前かも。私も、妖、幽、鬼、の全ての部類に入るし。」

「やうやくものなのかな？」

「やうやくものだと思つわ。」

ところの会話の流れだから、いまいち答えが分からなかつた。

とりあえず、自分の持つ力のおかげらしことは分かつた。

夕食を済ませた後、俺は陽香に波動エネルギーを見せた。

わが家のイメージとコシを思い出して動作を行つ。

今度はわがよつも早くはビーフエネルギーを具現化させることができた。

そのことに陽香は驚いて

「陽魔・・あなたって飲み込みが早いのね。あつといつ聞いて第一段階突破じゃないの。」

と、驚愕の声を上げた。

「そんなことないさ。陽香の教え方が良かつたんだよ。」

実際、陽香の教え方は良かつた。

俺がすぐにできたのもそのおかげだと俺は思つ。

「私は口シと動作を教えただけよ。これなら次の段階もできやうね。

」

陽香は言った。

「次の段階?」

「せうよ。水晶こまびらエネルギーを注ぎ込むのよ。あなたなら明日中にこなれるわ。」

「明日?」

「やうひよ。いけない?」

「いや別にいいけど。持ってるのかよ? その水晶を。」

「水晶のことで言つてたのね。あるわよ。普通のでここのもの。」

「普通のでいいんだ。」

「ええ。エネルギーに反応したときを見て判断するかい。」

「やうひか。分かった。じゃあ、明日こやうひ。」

「やうね。」

「やうじた会話で第一段階をすむ」とが決定した。

その後、陽香は帰らうとしたから俺は引き止めた。

「俺が送つてくよ。」

「もしかして心配してくれてるの?」

陽香がからかうよつて言つた。

俺は陽香から視線をはずして、

「べ、別に。も、もつ帰るんだろう? もと行へや。」

といつて靴を履いた。

「照れてる？・・ふふふ」

陽香はくすくす笑った。

「ひーーー

俺は頬が熱くなるのを感じた。

そんなことがあつたけど、帰り道はすんなり送ることができた。

帰り道は前のよつなしじぐたを陽香はしなかつた。  
だが、甘えるような声を出してねだってきた。

「手～つな～？」

「えつ」

「ね、いいでしょ？」

そんな甘い声を出せたら何も言い返せない。

俺は陽香と田を合わせず手を差し出した。

田を合わせたら卒倒しそうだったからだ。

陽香は俺の手に自分の手を置く。

手と手が触れた瞬間、俺はまた頬が熱くなつたのを感じた。

わつきとは違ひ熱さ。

恥ずかしくて顔を見せれない。

その感情が何なのは俺は知らなかつた。

俺だけじゃなく言つてきた本人も俺と同じような心境にいると触れてみて分かつた。

陽香の手が熱い。

熱の熱さではない熱さ。

その熱さに俺は落ち着きを取り戻せないままそのままなく歩いた。

そのせいが、帰り道がとても短く感じた。

まだいたい。

そんな風に思つてしまつときがあつた。

明日にまた会えるのに。

なんだらうっこの気持ち。

陽香の家の玄関に来たとき俺は陽香から手を放そうとした。

「ん?」

放そつと力を入れても陽香は放そつとはしてくれない。

逆に力を入れる。

「どうした？ 陽香・・・」

思わず聞いてみる。

「別に・・・ただ・・・」

「ただ？」

陽香をせかすよひに言ひつい、

「ううん。なんでもないわ。じゃあ、また明日ね。」

といつてすんなり手を放した。

「ああ。また明日な。」

俺は家の中に陽香が入るのを確認してから帰った。

陽香・・いつもとなんか違つたな・・

心の奥でそう感じながら帰つたのだった。



## 第十六章 二重人格？

翌日、陽香は朝からやつてきた。

しかしそのことに気づかず俺は朝に弱くしかも昨日の疲れが残つて  
いたから爆睡してた。

ピンポーン

何かなつたのが聞こえた。

眠いからそんなの無視。

ピンポンピンポンピンポン！…！

連続でインター ホンを鳴らす音が…

あーうやれいっ！

俺は布団の中にもぐりこんだ。

・・・しーん・・・

あ・・止まつた。

諦めたかな・・?

安心したとき

ガチャガチャ

ん？

何だこの音？

ガチャリ

え？

キー・・ガチャン

誰か入つてきた音？

えー！？マジufff！！

かぎ掛けたよ。ちゃんととつ！！

なのにどりづして・・

そんな風に思つていて、足音がしてきた。

その足音はだんだん俺のベットに近づいてきて

「陽魔、起きてるでしょ？」

と上からこつってきた。

その声・・・陽香か・・・？

「んっ……どうして入ってきたんだ？俺、かき掛けたはずだけど・?  
・?」

「やつぱり起きてたんだ。私を無視するとはこいつ度胸だわ。」

俺の質問には答へず静かに言ひ陽香。

「、怖い。今田の陽香・怒ってないか・?」

「こんな朝早く来るのは思つても見なかつたんだ。とにかくひつ  
つてきたんだよつ？」

話をそらすと聞く。

「あ、鍵のこと？かかつてたから開けただけなんだけ?」

平然と言つ。

俺はむくつと起き上がりあぐびをかましながら、

「どうせ?」

と、聞いた。

「それは、ひ・み・つ。」

陽香はひ・み・つといつといひで人差し指を自分の唇に当つた。

ひ・み・つ のしぐさが妙にかわいかつた。

「なんで？」

「そんなことより、待たせたんだから朝はなんべんも食べさせてくれるわよね？」

え・・勝手に朝早く来たのにそんなセリフよく言えるよな・・・

「いいナゾ。食べてこなかつたのかよ？」「へ？」

「ええ。食べねやしてくれるかなつて想つて。」

「・・・」

「ね？ いいでしょ？？」

上田遣いで聞いてくる。

ああ～かわいい。

朝は低血圧でボーとしているが今のじぐわで一気に血圧が上がった  
気がした。

「ああ。分かったからコンビングで待っててくれ。」

「分かったわ。待ってるから早く来てね。」

そう言って陽香はリビングのほうに行つた。

絶対、二重人格の持ち主だ・・・あれは・・・  
威張つてるなっと思つたら急に甘えてくるし・・・

あんなふうによく性格<sup>キャラクター</sup>チョンジできるみな。  
でもあれは両方とも陽香だよな。  
俺には到底無理だけど。

そう思いながらがんばって早く着替えた。

そしてリビングに向かう。

「今から作るからな。」

そういうて作り始める。

「できるだけ早くね~。」

分かつてゐるつて。

作ったのはサンドイッチと玉子焼き。

簡単で時間短縮バランスのとれたいいメニューだ。

「今できただぞ。」

そういつてテーブルに置く。

「どういだ。」

そう言ひて促す。

「ありがとう。じゃあ、いただくな。」

やつ血ひて陽香は食べ始める。

おこしゃれに食べる陽香の姿はかわいかつた。

さつきからかわいいの連発だが、本当に惚れるくらいかわいいんだから仕方ない。

そんなかわいい陽香をチラッと顔を盗み見ながら俺も朝食を食べ始めた。

## 第十六章 二重人格？（後書き）

朝食のシーンだけで終わってしまってすいません。

## 第十七章 水晶

朝食が食べ終わり本題に入った。

第一段階は自分の能力を知ること。

それが今始まるとしていた。

「じゃあ、今からはじめるわよ。」

陽香は水晶を6つ用意した。

「ああ。」

俺は気を引き締めた。

俺の能力・・

緊張してきた・・

陽香が俺に説明しようとしたが、はーーとため息をついた。

「陽魔・・そんなに緊張しなくていいからね?落ち着いて・・体が固まっているわ。」

「あ、ああ。」

見破られたか・・。

俺はリラックス、リラックスと呟いて深呼吸した。

「じゃあ、見本見せるからね？よく見てるのよ？」

「ああ。」

陽香が一つの水晶に波動エネルギーを注ぎ込んだ。

注ぎ込まれたとき、水晶は淡い輝きを放つた。

そして・・薄い煙みたいなものが水晶の中で動き回って何かの形を描いた。

徐々にその形は完成に近づいている。  
少し完成までに時間がかかった。  
といつてもそんなにたつていなが。

描かれたものは・・弓・・？

「これ・・弓か・・？」

「そうよ。これは弓。この水晶は 妖・幽・鬼 の中の 鬼 に反応する水晶よ。

その鬼の中の部類まで描いてくれるの。」

陽香が説明してくれた。

なるほど、そつか。

俺たちはどの部類も当てはまるから・・

「じゃあ、陽香は鬼の能力は弓に値するんだな？」

「やうよ。じゃあ一いつ田ね。」

陽香は一いつ田の水晶に波動エネルギーを注ぎ込んだ。

注ぎ込まれた水晶はこれまた淡い輝きを放った。

輝きが失われた直後、煙のような霧に包まれまた何かを描こうとした。

だが、その煙のような霧は一向に強く濃くなつていいくだけ。

だが、時間をしばらく置くと霧の中に大きな弧を描いた。

なんだ・・・こんなあやふやなもの・・・一体何を表しているんだ？

「何を表しているかわっぱり分からないと言つ風な顔をしてるわね。これは隠を現しているの。」

「隠？」

「隠すって事か？」

「やうよ。まだ分からぬ？じゃあヒントを教えてあげるわ。

私が、転校してきた初日にあなた以外誰もよつては来なかつたでしょ  
？」

陽香はヒントを教えてくれた。

そのヒントで俺は確信がもてた。

「隠すって事か？そこに存在してゐし見えるけど近寄せないつ

て感じで。」

俺のいった言葉に陽香は微笑んだ。

「正解よ。文字通り 隠す 近寄せない つてこと。

この水晶は 幽 の反応とその中の部類を描き出すわ。私は隠。

幽 は操る能力の部類だけどなぜ隠なのか・・それはね、私の能力の土台は霧だからよ。

姿を隠すことも・・見えない壁、気まずい空氣にすることができる・

・それが霧の隠。

さつき、鬼 の水晶の煙の霧が薄かつたのは私の能力の中で一番不得意とするのが鬼だからよ。」

「だから・・はつきりしない描かれ方だつたんだな。」

「といつても並みの相手なら負けないわ。

私の鬼の能力 弓 は相手に向かって力を一点に集中する攻撃だもの。」

「そつか。俺は 鬼が一番強いと言つてたが・・なんだろうな・・・

」

「それは後で分かるわ。次は 妖 の水晶ね。」

陽香はやつて注ぎ込んだ。

水晶はまばゆい輝きを放つた。

鬼でも幽でもこんなにまばゆい光ではなかつたと言つほど比べられないくらいすく輝きを放つた。

そして輝きは失われ水晶には 水・霧 といつ文字がはつきりと映し出された。

絵ではない。どの水晶よりも早く映し出された。

「水・霧 ・・・。」

「 水・霧 ・・妖の中で最も優れている系統。私は 水 より  
霧 の方が好きだけね。」

俺の呟きに陽香は答える。  
そう言って静かに笑う。

でも俺は・・俺には・・悲しく笑っているようでしか見えなかつた。

少し短い沈黙・・

「じゃ、じゃあ、やつて見せて。まずは 幽 からよ。」

そう言って 幽 の水晶を指し示す。

「分かった。やつてみる。」

俺はそつと波動を出すことに集中した。

波動を具現化したらそのまま水晶へ。

俺の波動エネルギーが水晶に注ぎ込まれた。  
注ぎ込まれた水晶は淡く薄い輝きを放つた。

そして俺の波動エネルギーはの中に青い煙となつて動き出す。  
おれの青い煙が描いたものは・・・

「歯車？」

青い煙で描かれたのは一つの歯車だった。

薄い煙だつたのにはつきり映し出されている。

「歯車・・・？一体なんの能力なんだ・・・？」

思わず呟く。

「歯車・・・は時を現している。

あんなに薄い輝きだつたのに、こんな強力な能力だなんて驚きだわ。

」

「時？すごいのか？それって・・・」

「ええ。陽魔、前になかった？時間が止まつたかのよつないや、景色がとまつたのは・・・」

そういえば・・・前世の記憶（その一部の破片）が戻る前に・・・

「ああ、あつた。一回だけだが。」

「強力な理由が分かつたわ。それは自分が危機に陥つたとき発動する潜在能力のようなものなのよ。」

「潜在能力？」

「そうよ。自分の中に眠っている力のこと。

陽魔、その一回以来時間が止まつたよつなこと起こらなかつたでしょ？」

「ああ。そのとき以来ないな。」

「あなたの幽の能力は時。そのことはよく分かつたわ。その力は稀に・・いや、自分が危機に陥つたときしか扱えないと思つていて。」

「ああ。だが、もし普段つかつたらどうなる？」

「発動はしないかもしない。発動してもそのときの消費は激しいわ。その辺はあなたの努力次第だけど。私は稀に起こる力に頼るほど弱い力はいらないわ。さあ、次よ。次は妖。やってみて。」

「ああ。わかつた。」

おれは再び波動を出して水晶に注ぎ込む。

水晶は淡い輝きを放つて、文字を映し出した。

風・炎・刃

この三つの文字が・・・・

「風・炎・刃・・・・」

「三つね。あなた、空、飛べたでしょ？」

「ああ。一回ほどな。」

「私も飛べるのよ。それは基礎だからいいけど。陽魔はそれ以上に扱えるみたいね。

でも・・炎のほうは・・どうこうとかしゃらへ何か心当たりない?」

心当たり?

そんなもの・・ない、な・・・

あ、いや・・一つあった。

「心当たつと叫びはじまらないが・・・

「あるの?教えて。」

「俺、料理してゐる最中な、炎がこいつのほうに強くてほしい、とか、過激にとか、心の中で思つと何も調節してないのに思い通りになるんだ。」

俺は素直に言つた。

あつのおまの事実を・・・。

「そり。だつたら、文字に出る理由が分かつたわ。じゃあ最後、鬼ね。」

「ああ。やつてみる。」

そうこつて俺は水晶に注ぎ込んだ。

そして水晶は眩い輝きを放つた。

輝きが失った後、俺の波動は何かを描き出した。

剣

「剣だよな？」

「そうね。でも、普通の剣じゃないわ。周りに龍と炎が・・描かれてる。

・・・さつきの歯車を覚えてる?一一つの歯車を・・・あれも何か、

龍と関係があるかも知れない。

ねえ、陽魔。あなたつて動物に好かれるタイプ、かしら?」

かもしだれない。

「かも、な。」

「一一つが重なつているときはね、他の存在を表すの。幽の場合に現れたから生き物かと思つて。」

「そうか。それで聞いたんだな。」

「そうよ。これで全部分かつたわね。・・・じゃあ早速、明日から訓練開始ね。」

「え? 明日ー?」

「といつても体力づくりよ。これには体力がほしいからね。精神力は体力とつながってるわ。

私もやるから、明日から体力づくり開始、よー！」

——開始、よー！

の時に俺に陽香はウインクしてきた。

可愛い・・

一瞬見入ってしまった。

だが、その後、果てしない憂鬱間が襲ってきた。

いやだ、俺、運動は得意だが、持久（長い間運動する・体力たぐさんほしい運動）系は苦手なんだ。

そう思いながらも陽香の顔を見ると

憂鬱なことがこの先あつたとしても乗り越えられる・・前向きな考え方ができるかもしねない

と、思えてしまう。

思わずにはいられなくなる。

たぶんこの先、何度もそう思つのだらうなと思いながらも俺は

「ああ、わかったよ。明日から体力づくりだな。」

と言った。



## 第十七章 水晶（後書き）

自分で書いてて能力とかがじゅうじゅくなつてきました。  
整理して能力などの紹介を次回かせてもらいます。  
良かつたら感想などをもらえるとうれしいです。

## 第十八章 キャラクター紹介&能力講座（陽香先生の説明編）

### キャラクター紹介

では、作者の私がキャラクター紹介やっちゃいます。

主人公 陽魔 前世・・幽魔

簡単に言うと頼まれば断れないタイプ。Mっぽい人。  
暗すぎない明るく生きようがんばるタイプ。  
でもがんばるだけで実行したためしがない。  
冷静だと一見思うが冷静な奴ではない。  
一度パニックに陥るとなかなか冷静に考えることができなくなる。  
そんな主人公。

サブ主人公 陽香 前世・・香鈴

はつきり言つと仕切りたがる仕切りやさん。  
陽魔君をいじるのが大好きなSつぽい人。  
自分が一番つて感じの雰囲気だしまくりの陽香さんにもかわいい一面あり。  
そんな人です。

登場人物 ゼレナル

陽魔君の前世の幽魔の戦友である。

いつも冷静沈着で言葉がツンツン してるけど結構 照れている

一面もある。

はつきり言つと シンデレ キャラです。

言葉は ツンツン してゐるけど 照れてるな って思ひよつた言葉  
があります。

### 登場人物 ゼレナルーテ

ゼレナルさんの幼馴染でお気楽キャラのゼレナルーテさん。ゼルデ  
というあだ名もあります。

小さいころからゼレナルさんをからかって怒らせては遊ぶ人。  
この人もSかも。

でもなんだかんだいってゼレナルを大切にしています。  
のんきなキャラを演出しまくりのゼレナルーテさんも結構鋭い感を  
持つてます。

どうですか？共感できたところありますか？

私のスーパーでハイレベルな、いたつて完璧のキャラクター紹介に  
ちょっとびり反論を持つているキャラクターさん達がいるんでその人  
たちの意見聞いてあげてください。

陽魔「俺、そんなにM？」

うん、絶対、M。

陽香「私って仕切りやさん！？そんなんじゃないわ。でも陽魔をい  
じるのは好きかも。」

でしょう？

ゼレナル「ツンデレって何だ？？ほつせりまつとくが俺は照れた覚えはない。」

ツンデレ 知らないのー？ほつせりまつとくがゼレナルのキャラ自体がツンデレなんだけど。。。

ゼルデ「えつ僕ってS-!?-えー。ただ単にゼレナルちゃんをからかうのが好きなんだだけ。」

それがS。

あー、ちよつぴつじいぢやないね。一体どこがおかしいのかな？

『全部』「だー..」「よ。」「だね、うさうさ。」

『全部』の語尾が上に書いてあるとおり。

尚、「だ！」は陽魔君とゼレナルさんの語尾です。

あとは分かるよね？

まあそんなことよつ、

『そんなことー！？』

うん。そんなこと。  
それでそんなことより、

「陽香さん、陽魔君に能力のこと説明して下さー。」

「えつ、なんで？」

「俺、いまいちわからなくて。頼む。」

「わかったわ。じゃあ説明してあげるわ。よく聞くのよ?」

「ああ。」

「じゃあ、妖幽鬼 からね。時々質問するから答えてよ?」

「ああ」

「じゃあ早速。妖幽鬼は能力を持つている。  
能力を大きく分けると三つあって、その三つを答えなさい。」

「えーと、妖 幽 鬼 の三つだ。」

「正解。じゃあその能力はどんな能力?」

「はあ?そこまではしらねえよ。」

「わかつたわ、じゃあ教えてあげる。  
妖 は 呪文を唱えて発動させる能 よ。  
つまり、魔法 ね。

幽 は 物を操る力のことよ。ものは存在しているもののことよ。  
そのまんまで 操る能 力 でいいわ。

鬼 は 自分に合う武器を使うための潜在能力と潜在意識。  
つまり 自分に合う武器使用のための力。  
ここまでわかつた?」

「ああ。つまり、妖 は魔法で 幽 は操るで 鬼 は武器を使つ

ための力 でいいんだろ? 「

「 さうよ。じゃあ次よ。次は普通の妖幽鬼の能力のことについてよ。

「

分かりやすい説明手順だね。

「 ふむ。」

「 普通の妖幽鬼は部類を三つに大きく分けたうちの一つの能力しか使えないの。

たとえばそれが 妖 だとするわよ。

妖 を持つ妖幽鬼は他の能力を使えるようにするためににはとても困難なの。

はつきり言つてそれは無理に等しいわ。」

「 なぜだ?」

「 だつて普通の妖幽鬼だからだもの。自分の能力は遺伝と自分の素質がなければ増やすことなんて無理よ。でもね、長い長い時間をかければもう一つは何とかできるようになるわ。」

「 え? どうして?」

「 それは能力同士の関係にかかわっているの。妖は魔法。幽は操る。鬼は武器使用の力。何か仲間はずれができるない?」

「 仲間はずれ?」

「そうよ。答えはね、鬼 よ。理由はいたつて単純、妖と幽は似て  
いるから。それだけよ。

だからね、妖の持ち主は がんばれば、幽 を手にいれられるの。」

「逆も同じか？」

「ええそうね。幽の持ち主なら妖は手に入れられるわ。だから 鬼  
は手に入れられないのよ。」

「じゃあ鬼の場合は？」

「鬼の場合は 妖 ね。なぜなら幽の方が技量も素質もほしいから  
なのよ。

そういう能力同士の関係が能力得とくにかかわってきてているの。こ  
こまでは理解したかしら？」

「ああ。」

なるほど、なるほど。いい説明だね。

「じゃあ私たちの特別な存在を説明するわ。

全部の部類に当てはまるからって得意不得意があるのよ。

それはさつき言つた通り能力の関係にかかわっているから。

陽魔は覚えてる？妖の水晶に映し出された文字を。」

「ああ。」

「その文字は自分の能力の中心の文字よ。あの文字を 能力柱字のうぢょくちやうじ」

とこうの「

「能力柱字？」

「そう。字の「」とく、能力の柱となる文字よ。あの文字が自分の能力得とくの中心よ。

能力柱字が中心となつて能力の部類の関係がかわつてくるの。私の場合は水・霧。でも私は 妖の中で分ける部類全部をやうりうと思えば使用することは可能よ。

なんだて一番得意な能力の部類なのだから。  
そうは言つてもむりがあるけど。

水・霧と対立関係にある 妖 の中の 炎・晴 は基礎しかできな  
いわ。

基礎しかできないと言つたけれど、それでも十分なのよ。

私は 妖 の保持者だから。

その辺は理解した？」

「うーん。ちょっとじやあしてきました。」

うん。じやあで分かりにくいけ。

「じゃあ簡単に言つわ。

妖の能力に反応する水晶に映し出される文字は能力の柱となる文字を能力柱字。

これが一つ。

能力柱字が自分の能力の中心となつて能力の関係が成立する。

これが二つ。

三つに分かれた中で一番得意の能力でも、その中で分類されて自分の文字と対立関係の能力はある程度でしか使えない。

これで全部。

理解した？」

「ああ。サンキューな。」

「これで大体は説明し終わつたわ。」

「ああ、もういいぜ。」

ふー。やつと終わりました。

ずいぶん長くなつたけれど皆さん分かつたかな？

作者と陽魔君は分かつたみたい。

じゃあ、これにて、キャラクター紹介＆能力講座 終了。

ありがとうございました。



## 第十八章 キャラクター紹介&能力講座（陽香先生の説明編）（後書き）

長くなりました。

これでも分からぬ方はいつてください。  
教えます。

じゃあ、次回もよろしくお願いします。

## 第十九章 体力づくり

翌朝、陽香がきた。

「陽魔、おはよ。じゃあ早速体力づくりスタートよ。まずは町内マラソン、10分間。」

「えーーー！？」

「不満そうね。だつたら増やす？」

「増やすな。これ以上・・頼むから。」

もう、10分間でいいです・・。

心の中で俺はしくしく泣いた。

そしてマラソン準備。

で、よーいスタート。

スッスッハ、ハ。スッスッハ、ハ。

二回吸って二回吐く。

うわーきつい。

・・・10分後。

はあーはあーぜーぜー。

きつい。もうダメだー

俺は家に入つてすぐにソファにくつろぎに言った。

「すうすしー。」

「・・体力ないのね。陽魔は・・。まあいいわ。  
少し休憩したら波動エネルギー保持練習に入るから。」

う、まだやるのか？

「わ、わかった。」

そう言ってボカリをぐつと飲む。

おいしー。

その後、ソファにくつろいだ。

疲労感と脱力感が全身を駆け巡る。

俺は疲れのせいか眠くなつてまぶたを閉じた。  
俺はあつという間に寝てしまつたのだった。

「・・・寝てる・・・」

陽香は呟いて陽魔の寝顔に見入った。

寝顔は・・幼い子供のようね。

陽香は陽魔の頬に触れた。

そして・・・陽香は顔を近づけ、唇をあわす。

そしてしばらくしないうちに放す。

何でしゃべったの?私・・・

自分に問う。

自分でも分からなかつた。

何? ?この気持ち・・・

陽香が陽魔の頬に触れたとき陽魔は起きていた。

急に田が覚めたと思わせれば陽香の驚いた顔を見れるかも

そう思ったのだった。

だが、キスされて悩んだのだった。

いま・・・起きたほうがいい??  
それともこのまま知らない振り??

一つの選択肢を悩んでこらつひて唇を離された。

そして、起きよつかどうか迷っているとき

「陽魔、起きて。訓練始めるわ。」

「ん・・・あ、俺寝てたのか。」

「そうよ。」

「わかった。」

ふあああ

とあぐびして立ち上がる。

「どうすんの?」

「波動エネルギーを出して能力に変化させて維持練習。」

「どうやって?」

「能力っていうても 妖 の練習しか使用がないから、イメージ&維持。

それは私の今からやるのを見てればいいわ。そして自分で覚えて。」

「ああ。」

陽香は波動をだして水に変化させた。

「 いじやつて維持するの。私は水に具現化させたけど、あなたは炎は危ないから、風ね。」

小さな竜巻を思い浮かべてやつて御覧なさい。」

「 ああ。」

うなずいて言われたとおりにやつてみる。

最初はうまくできなかつた。

でもやるうちにコツがつかめてある程度はでき始めた。

「 上達が早いのは驚いたわ。」

陽香もそういつて驚いた。

長時間維持は結構疲れた。

今はだるくて意識が朦朧としてた。

「 これを・・毎日やるから覚悟しなさい。」

「 覚悟・・か。まあそれなりに・・な・・」

そんな風に言つた俺だが、ここ数日は毎日ばつた。

翌朝は筋肉痛で痛くてまともに走れなかつたが、一週間もやつてたら、体が慣れた。

——最近同じ訓練法で修行中。

まあまあがんばっている。

はじめてから一週間以上がたつたときはすでに陽香と話しながらでも維持が可能になった。

戦い方も教えてもらい、陽香の幻術の中でイメ戦イメージバトルもした。

そして大体の基礎が身についたとき、ついにゼレナルがやってきた。



## 第十九章 体力づくり（後書き）

次からはマフィルヨウトウルードでの話となります。

## 第一十章 いや、マフィルコウトウルードへ！

夏休み終盤になつて、ゼレナルが迎えに来た。

もう、戻れない。

心に決意してゼレナルに従つた。  
陽香もゼレナルたちの世界に行くことを承諾した。

そして、今はゼレナルの生み出した、トリップ時空陣とは、世界と世界をつなぐ扉を使う移動手段の一つだとゼレナルが言つた。

「いぐぞ。」

ゼレナルの声に俺と陽香は承諾した。  
ゼレナルが トリップ時空陣 を始動させた。

ウ” イイイ ”ーン！-

騒音が耳に響く。

騒音と共に俺たちの体がふわりと浮く。

そして瞬時に俺たちは俺と陽香の故郷人間界から姿を消した。

騒音と体の不安定さで一瞬目をつぶった俺だがすぐに体が安定したことを感じると目を開けた。

視界に入るのはゼレナルと陽香の姿。

そして背景はまるで宇宙の中こじりよつた世界觀だった。

「さつきも言つたが移動には時間がかかる。その間、お前らに説明しておくれべきことがある。」

ゼレナルが言つ。

俺たち自体が動いているわけではなく、背景がすこい速さで動いていた。

それでも時間はかかるらしい。

「説明、か。いいぞ、しても。」

「ええ。だいぶ、体も安定してるし、いいわ。」

俺と陽香は承諾した。

「一度しか言わないから、聞いて覚える。

まず、お前ら 人間 は定期的に食事が必要だが、妖幽鬼 には必要ない。

俺の世界マフィルヨウトゥルードは人間界と違い妖幽鬼の栄養となりうるものがある。

そのため、食事と言う方法をとらなくても栄養補給は可能なんだ。  
お前らは前世の記憶を持った不完全で不安定な人間だ。妖幽鬼でもない。

だが、お前らがマフィルヨウトゥルードに行けば、食事と言う方法をとらずとも栄養補給が可能なはずだ。つまり、食事に関するこ<sup>ト</sup>は一切心配は要らない。」

「それはまたなんですか？」

ゼレナルの説明に陽香が聞く。

「マフィルコウトワールードの空氣にはその世界に対応できるよう、体を変化させるという特徴を持っているからだ。分かったか？」

「ええ。」

「ならいい。説明はまだあるから、理解しながら聞けよ。  
次はお前らを連れて行く理由だ。  
それはお前らの持つ能力が必要だからだというのは前に教えたな。  
その能力を活用させてもらいたい。  
俺たちには邪神将雷雅じやしんじょうらいゆう という強敵がいる。」

『邪神将雷雅？』

俺と陽香の声がはもつた。

「そうだ。邪惡な力に身を任せた雷の使い手、そいつの名は 龍蛇リュウサ 。

そいつが今、陽魔の前世幽魔が時間をかけて作った世界を滅びへ導こうとしている。

そいつに従う僕の類しきがそちらをつづりしている。

そいつらは並の使い手でも倒せないことはない。

が、そいつらは正直ビリでもいい。眞の目的は龍蛇を倒すことになる。

その手助けをお前らにはしてもらいたい。

だが、ターゲット標的である龍蛇の居場所が不明。

それでは動くに動けない。

そこでお前らは龍蛇の居場所を探る旅に出てもいい。

訓練にもなるしちょうどいいだろ？そのための準備をしてきた。だから、ついたら早速、お前らは行かなければならぬことがある。

「

「セレニアでまた詳しく述べ今を説明つてことか？」

今度は俺が聞く。

「ああ、セレニアだ。」

ゼレナルが頷く。

「これで説明は終わり？」

陽香が問う。

「ああ。もうそろそろ着くはずだ。お前ら、飛ぶ準備しろ。」

ゼレナルが言う。

飛ぶ？

もしかしてつくといひて空なのか？？

「早くしろ。」

ゼレナルがせかす。

せかされて、俺たちは準備した。

そして

ウ”イイイ”ン

騒音と共に視界に映る景色が変わった。  
さつきまで足元に何か支えるものが会ったのにそれが瞬時になくな  
る。

飛び準備ってことか。

納得しながら俺たちは浮いた。

だが、陽香は少しバランスを崩したみたいだ。

慌てて陽香の腕をとつさにつかむ。

「あ、ありがと。」

「いいさ。」

陽香が下を見ながら言った。

俺は安堵した。

少し遅かったら・・・と思いつつ冷や汗が出る。

だつて下は針山。

落ちたら確實に死ぬ。

「だから言つただろ。準備しようと。」

ゼレナルがそつけなく言つ。

そして、近くにある崖を指差して

「あそこに降りる。」

と、ゼレナルはそう言つた。

陽香も体勢を立て直し、三人は崖に降り立つ。

するとさつきまで体に変化がなかつたが急に変化が訪れた。

体が、まばゆい光を放つ。

それは陽香も同じだつた。

『！？』

「変化すると言つただろ？」

俺はゼレナルを見た。

ゼレナルは光には包まれなかつたが、人間界で見た姿・・いや、移動中で見た姿とかけ離れた姿になつていた。

だが、多少面影は残つてゐる。

「...」

なんか体にすぐ違和感が走つた。

な、なんだ、この感じは・・・

一体体に何が起つてるんだ!!

そう思いながら、じつとこらえた。



## 第一十一章 変化

俺は体に何か違和感を感じた。

光に包まれている俺は自分の身に何が起こったかはわからない。ただ、体に違和感を感じておるおるしているのだと自分で思つ。

陽香もおれと同じようだつた。

体に感じる違和感が自分を冷静でいられなくさせる。

じゃあ、俺は何でこんなに冷静なんだ??

不思議と思つ自分がいる。

やがて光は輝きを失い自分の姿が田にまつりと映し出された。

な、ななつーーなんだ?ーー、うううーー・・・のすすす、がたはつー?

さつきまでの冷静さはことも簡単に消えた。

体の変化と共に服装まで変化した。

白いTシャツに下は藍色のジーンズだったのにー!

『ー?』

「鏡を見ろ。そして自分の姿を認める。」

驚きすぎて言葉も出ない俺たちにゼレナルは大きな鏡を出した。

俺たちは鏡で自分の姿を見た。

一番驚いたのは・・・自分に尻尾があつたことだ。

そう 俺には戸尾がある たのたつた

模様。その尻尾はまるで豹が持つ尻尾のような・・黄色と黒のまだら

そして次、それは服装だつた。

ここに来る前は白いTシャツに藍色のジーンズだったのに……それが……

面影が一切なくなつてしまつたのであつた。

あ  
”  
—あ  
あ  
”  
{  
{  
{  
!  
!  
!  
!

まず、耳に黒のイヤリング。首に豹柄のチョーカー。そしてファーがついている豹柄のベスト。

ベストをつなげるかのように鎖・・・チェーンがつなげである。下は黒いズボンだが、ところどころ破れている。

以上、だ。

正直こんな姿を見て驚かない奴がいたら俺はすぐ見たい。

・・・

で、何とか落ち着いた頃、俺はじつと陽香を見入ってしまった。

きれい・・・

そうとしか言いようがなかつた。

かわいいと言う表現はしつくりしないし、美しいと言うほど大人びたものでもなかつたし。

とにかく、きれい こそが今の陽香に一番しつくりするものだつたのだ。

その姿は・・・

変化する前、陽香はかわいい柄のTシャツに膝まであるジーンズをはいていた。

それが・・・なんとつ！一浴衣のような衣を着た姿になつているのだった。

髪は銀髪。

首には銀のチョーカー。

浴衣と言つと、少し重そうなイメージのものが多いかが陽香の着ているものは身軽に動けそうなものだつた。

たとえだが、まるで雪景色が似合つ雪女のような姿だつたのだ。雪女といつと悪いイメージしかないが、それとは真逆の印象を持つていた。

ゼレナルはもともと異形な姿のため変わつたのは服装だけだつた。だが、服装だけでも印象 자체はすぐ変わる。

それを俺は思い知らされた。

「 もういいか？ 悪いが時間がない。」

ゼレナルが俺と陽香に聞かれた。

「 ああ。悪かつたな。」

「 もう・・いいわ。」

自分が出していくのにさうではなくて同じ聞こえる。

声がおかしいのか？？

陽香も同じようだつた。

「 ここに来て少し声が変化したな。それもじきになれるだろ。行く。

ゼレナルが再び宙に舞う。

「ああ。」

「ええ。」

俺と陽香は領いて、ゼナルの後を追つた。



## 第一十一章 荒れた自然と暴走

ゼレナルを先頭に俺と陽香は宙を舞つてゐる。

行き先は知らない。

どこに連れて行かれるかが分からない。

そのこととても不安を感じている。

「ゼレナへ向かつているんだ?」

「すぐ分かる。」

俺がゼレナルに聞いてもはつきりとした答えが来ない。

だから俺はそのことに諦めた。

諦めただけで不安を消し去る「ことは無理だが・・・

だが、不安と言つ感情より驚きと言つ感情が俺の心を満たした。

体が変化する前に飛んだときより、

変化した後のほうが消費している力が少なくなつていてのを感じている。

身軽になつた氣がするんだ。

それがいい驚きと言えるだろ?。

だが、それ以上に今見ていける景色に驚いた。

それはさつき崖に下りたときに見た景色とは全く違った。

俺の言う 違う は ただ、景色が違うのはなしをしているわけじゃない。

俺が言いたいのは 景色にある自然の荒れ方が 違う と言つたのだ。

荒れている

そのことに驚いたのだった。

—マフイルヨウトウルード《こゝ》へ来たときに見た景色はまだ今  
見ているほど荒れている景色ではなかつた。

来たばかりはもつと自然が豊かで生き生きしていた。

だが、今は違う。

今は自然に活力がなくなつてゐる。

自然はそこに 存在して いる のに 存在して いる 気配 が ない。

そして 活力がなくなつてきて いる 自然は枯れ朽ちていく。

俺がいった 違う はそういう意味だ。

ゼレナルは 存在して いる が 気配のない 自然 のある ほゞへ向かつ  
て いる。

来た場所から今飛んで いる 場所までの 距離は 果てしない。

時間を気にすれば もう 一時間以上 飛んでいるだらう。

それなのにゼレナルは平然と飛んでいる。

俺は飛び立つたときほど身軽ではないがまだ平氣だ。

だが、陽香には異変が起こつた。

陽香の顔色は徐々に悪くなつた。

飛びスペースも落ちてきてしまつが我慢して必死に飛んでいる。

それを俺は見るために耐えれなくなつて、声をかけようとしたとき、

陽香の体はガクッとゆれた。

その瞬間、周囲に霧が発生する。

ゼレナルも俺も動きを止めた。

霧の中心である陽香はふわふわと不安定にゆれている。

「陽・・香・・?」

なんとか振り絞つて陽香の名を出すがそれには全く反応しない。だが、周囲の霧は濃くなるばかりで俺やゼレナルをも包んだ。

つ、つめたつ。

冷たい霧が俺の肌にまとわりつく。

「暴走している・・・」

ゼレナルが不意に呴いた。

「はあ？ 暴走だと？ ハーブのことだつてー。」

俺は明らかに動搖した。

たが  
せに力はいた  
て冷静た  
た

「無理をいたしました。暑い中、陽喬を飛ばさないでよせつまづかつた。」

「はあ？？」

ゼレナルの冷静さについていけない俺。

「お前、陽香の変化した姿を見て雪が浮かばなかつたのか？」

ゼレナルは俺に問う。

そういえば・・雪女みたいだとは思つたが・・・

「ああ。だが、それが何の関係が……つて……まさかっ！？」

ゼレナルの意図がようやく俺にもわかつた。

それを察したかのように

「そつだ。雪は熱いと溶ける。つまり熱さに弱いんだ。

陽香の着ている衣は通気性がいい物だったが・・・。それすらも上回

つていたんだ。」「

と、ゼレナルは言った。

「どうすれば、暴走を止められる?」

俺はゼレナルに聞いた。

「終わるまで待つ　といつ選択肢は取れないのか？あいつの体温調節が起こした霧だ。

終わるまで待つほうがいいと思うが。それに害もないだろ？」

ゼレナルは冷静に言つた。

害はある。

俺、今、とっても・・さみい

「害はある。俺、すんごく寒い。

俺は、ゼレナルみたいに寒さに耐えるような物羽織つてないんだ！だから止めさせてもらひ。」「

俺は言つた。

そり、俺の体、今、すんごく震えてる。  
何のせいだと思つ？

そんなの決まつてるだろ。服、だよつーふ・く！

今俺は、上半身裸からチーンのついたベストしかやつてねえんだ。

チヨーカーだつてファーアだつてあつたつて何の足しにもならない。

そんな服装で寒いなんていえない奴がいたら教えてほしいもんだ。

ちなみにゼレナルはもともと、人型の妖幽鬼だが、俺のよつた姿ではない。

俺よりあつたかそうな物着てるんだつ。

するいつ。

不公平だッ。

「・・・なら、やつてみる。」

ゼレナルは俺に許可した。

陽香の暴走を止める

暴走　と言つより、霧の異常発生　みたいなもんだが、明らかに時間がたつにつれ霧は濃くなり、温度も低下している。

荒れた自然が凍りつくほどまでに。

力　による暴走ではないからどうやつて止めるか

俺は悩んだ。

そういえば、ゲームであつたぞ。

霧を払うとき、きりばらい　つてのをして払う技があつたことが。

よじへ、その手で行へ。

俺はポンと手を打つて、実行した。

両手を「じぶし」ほど間を空けてかざし、波動エネルギーを具現化させる。

それを呪文で 風 に変換する。

そして変換させた風を陽香に纏っている霧全てにかかるよいつこ

「タゞづけてえー、風波霧散！！」

と、叫んで投げる。

文字の意味どおり、霧は吹き飛ぶ。

文字の意味は 風の波で霧が散る まさに字の「」とべ。

霧がなくなつた後陽香だけがその場に残つた。

陽香は霧の力がなくなつたのか、下へまつさかねまに落ちていぐ。

慌てて俺は陽香に風の周波を送る。

風は陽香をふんわり包む。

俺は陽香を抱き上げた。

それと同時に風は消える。

俺は陽香を抱き上げる際に妙な熱さを陽香から感じた。

きっと、そのせいで暴走したんだわ。

意識がなく顔色も思わしくない。

我慢してたのだろうか・・・

俺の気持ちを察してか

「おもうく我慢していただろう。お前は平氣か?」

と、ゼレナルが聞く。

「ああ。今多少疲れたが、飛ぶことには支障は出ないはずだ。」  
から後びのくらいいふぶ?

「そんなに遠くない。あと少し。それならもつか?」

「ああ。」

「俺が運ぶか?」

「いいや。俺があれを止めたしな。」

たぶん、ゼレナルは自分を責めているのだろう。

陽香に無理をさせたことを。

でも俺は断つた。

何より止めなくていいといわれて尚止めに入ったのは紛れもなく俺なのだから。

「わかった。疲れたら遠慮なく言え。陽香のよつや有様になる前に必ず言えよ」

「ああ。」

ゼレナルが言つたので俺も頷いた。

そして、俺たちは再び向かつた。

どこへ行くのかは知らなかつたが。

ゼレナルと俺は降り立つた。

そこは山の中にある、一つの建物。

「ついた。ここだ。」

「ここ?」

俺は聞き返す。

「そうだ。ここは———

「ここは、倉庫だよ。何の変哲のないただの倉庫。」

ゼレナルの声にさえきり、説明した声の主がいるほうへ俺は振り返る。

声の主は俺の見知らぬ奴だつた。

「なんだ、イールか。驚かせるな。背後に回りやがつて。」

ゼレナルにイールと呼ばれた奴はゼレナルに近づいて言つた。

「相変わらず言葉遣い悪いね、ゼレナル。」

一方、ゼレナルのほうは

と。

「相変わらず背後に回る癖直さないんだな、イール。」

と、言い返す。

二人の間に表現しようのないどす黒いオーラが漂う。火花を散らしているとも言おうか。

イールはゼレナルの次に俺に視線を向けた。

「君が幽魔の生まれ変わりなんだろう？」

姿は何かしら幽魔の面影を感じさせるね。名前は？」

「陽魔だ。」

「陽魔・・・いい名だね。僕はイール。俺はこここの管理役を買って出

てるんだ。」

イールは言った。

「お、君が抱えているのは香鈴の生まれ変わりかい？」

「ああ。陽香ひつじんだ。」

「へえ。この子も香鈴の面影を残してゐる。氣を失つてゐるんだね。何かあつたのかい？」

イールは聞いてきた。

旗から見たら、何かあつたんじゃないかと思つのはいたつて普通のことだ。

だが、事情が事情だ。話していいものなのか、悪いものなのか・・

無理して限界で暴走したなんていう話。

言つたら、笑われるんじゃないかと思つて話すのはまづこんじやないのか・・？

俺が悩んでいた

「今日、暑いからそのせいかな？」

と、イールが聞いてきた。

「ああ。暑さに弱いみたいだから。」

俺は言った。

良かつた勝手に結論言つてくれて・・助かった。

実際、暑さのせいだから変わりないけど。

「立ち話もなんだから、中に入りなよ。陽香ちゃんもこの日差しあ  
ちときついでしょ。」

イールが建物の扉を開けて太陽を見上げる。

そして俺たちを中へ入るよう促す。

そして俺たちは建物の中に入った。





## 第一十一章 荒れた自然と暴走（後書き）

少し長くなりましたが。  
楽しんでいただけたのならうれしいです。  
次回もお楽しみに。

俺は今、イールの案内を受けている。

中に入つてから陽香をベットルームに寝かせてそれから説明を受けているんだ。

正直に言ひついで、部屋のつくりとか家具とか全てに驚いた。

文化が違う ところだけでは説明がつかないほどだ。

本当に異世界なんだと思われる。

でも、だ。

初めて感じるわけではない。

どれも懐かしいとしか感じることができない。  
見るもの全てが俺自身初めてなのに、懐かしいと感じてしまう俺に  
驚いている。

そして、案内されていて驚くこともあった。

案内途中に 寒いだろうから といわれ、もうつた赤いクリスタル  
が今手元にある。

あげると言われた赤いクリスタル。

それを首に下げて俺は進む。

もちろんゼレナルもついてきた。

案内されたのはイールの部屋と創意室といつ武器を作る場所だけ。

武器を作る場所は全部で三つも部屋があつたことに驚いた。

そしてその部屋の温度は全て違つ。

暑い・寒い・普通

その三つだ。

暑いとは感じなかつた、そして、赤いクリスタルを持っていたから  
寒いとは感じなかつた。

だが、熱気、冷氣 共にそれは感じた。

それを感じたびに尻尾が過敏に反応する。

自分の意思で動かせるがそのときはどうじよつもない。

まあ、それはともかく、ようやく案内が終わつたときにはすでに夜  
だつた。

この世界にも朝、昼、夜、はあるひじ。

そして、ベットルームに戻つたとき、すでに陽香は意識を取り戻し  
ていた。

だが、まだ体調が思わしくない。

体はふらつき、虚ろな眼をしている。

それよりも明らかなのは体温。

衣から伝わる温度はまだ微妙に熱い。

それを踏まえて詳しくは明日こやることになったらしい。

と、言つてから俺たちは寝た。

明日に向かへ。

## 第一二三章 倉庫（後書き）

簡単になつて、「めんなさい」。  
会話がなくて、「めんなさい」。  
次回は頑張ります。

## 第一十四章 保険としての武器

そして、翌日。

陽香はすっかり良くなっていた。

陽香の胸元にはイールに渡された青いクリスタルが淡い輝きを放っている。

そのおかげと云つてもいい。

そして、俺と陽香とゼレナルとイールは今、武器倉庫に向かっている。

向かう途中、障害は何もなかつた。

あると言えば、温度ぐらうだが、俺は少なからずなんともない。

「陽香は大丈夫か？」

「私? なんともないわ。平気よ、どうして?」

「いや、いい。俺は暑くないが陽香には暑いかなと思つただけだから。」

「やつぱり、覚えてなかつたのか・・・?」

「やつぱり、覚えてなかつたのか・・・?」

思わず最後に呟いてしまつ。

「なにが？」

陽香はそれを逃さず聞いている。

「だつて、イールのとこまで行くのに、陽香は無理して氣を失ったんだぞ？」

ゼレナルは暑さのせいだ、と言っていたが。もつ無理すんなよ？

俺は暴走したことを抜きにして話す。

「ええ。もしかして・・運んだの・・陽魔？」

陽香は俺を見つめて囁く。

「やうだよ。氣づけなかつた俺が悪い。  
あ、その辺は氣にすんなよ？」

陽香が氣を失つた後からイールのとこまでそんなに距離なかつたし。

「

俺は陽香に囁く。

実際、そんなに距離は長くなかった。

陽香も軽かつたし、俺自身そんなに負担はかかつてなかつた。

「ありがとう、陽魔。これからは氣をつけるわ

陽香は言った。

「ああ。」

俺も言ひ。

「よつばのとが、到着した。

「・・・こじが、武器倉庫・・

俺は思わず呟いた。

「さうだよ。これが僕の管理場所の武器倉庫。やあ、中に入つて。

イールが俺たちを促す。

促されるまま中に入る。

「たくさんある・・・

陽香が呟いた。

思わず呟いてしまつほど、倉庫の中にはたくさんの武器があった。

「じゃあ、早速、選んで。」

『え?』

思わず俺と陽香は声をはもり出す。

詳しへは武器倉庫で と言われたからこゝまで来たわけだが・・

はあ? ?

来て早々に選べ、だとお？

説明して欲しいんだけど。

「選ぶって・・説明もなし?」?

陽香が俺と同じことを言ってくれる。

「あ、説明ね、忘れてた。『めん』『めん』。」

イールは思い出したかのように手をぽんと打った。

「今、武器を選んでと言ったのは  
これから君たちが 鬼 の能力を使う際に使う道具のためなんだ。  
でも、僕としては君たちには僕が作った君たち専用の武器を使って  
もらいたい。

でもね、君たちの使う武器は 剣 と 弓 だろ?  
だから、それを作るための材料を取ってきて欲しいんだ。  
だから今選ぶのは保険だと思つてくれていいい。  
それが説明なんだけど・・わかつたかな?」

イールはそう言って説明する。

「ああ。その材料ってのは?」

「それは、ある特定の地域でしか手に入らない貴重な鉱物さ。  
剣 も 弓 も元は同じ鉱物で作る。  
場所は地図を渡すからそれを見て。」

そう言つてイールは俺と陽香に地図を渡す。

地図は俺が触れたと同時にぽつんと一箇所だけ輝かせた。

「・・光つてゐる。」

思わず呟く。

「光つている場所は今いる現在地。そこから、青く光つているのは鉱物があるところ。  
そこへ行つて、鉱物をここまで持つてくれればいい。それと・・・ん？」

イールは話の途中で今来た扉のほうを見た。

「やばい。連中が來たつ！――」

「――」

「何してゐるー？早く選べ。眼を閉じて、武器だけに集中してー。」

『はいっ。』

イールの焦つた声に俺と陽香は氣を引き締め眼を閉じた。

そして武器だけに集中する。

俺の武器は 剣。

俺の剣・俺の・・・・・

それだけを心にとどめて。

「今つ！ 眼を開けて、武器をとれつ！…」

イールの声に俺と陽香は眼を開ける。

そして見たのは 輝く剣

俺はそれを手に取った。

剣は俺に触れたことで輝きを増した。

陽香のほうも同じようだった。

そしてそれを見届けると、

「その武器と君たちの能力で襲い掛かる連中たちを倒せ！…」

と、イールは叫ぶ。

「今来る連中は俺らの敵、俺らはそこいつらを 怪奇 まあ、せいぜい死ぬな。」

ゼレナルは焦った様子もなく叫ぶ。

俺たちは頷き、表に出る。

血の手にした武器を持つて。

そして表にはたくさんの怪奇。

俺と陽香は眼で合図をして相手に切りかかる。

俺は 剣 なんて使うのが初めてだ。

だが、勝手に手が動く。

俺たちは敵をバツサバツサとなぎ倒した。

次第に剣技にも慣れてきて、応用を利かせる事ができた。

俺のほうは有利に持ち込んだが陽香のほうはやばかった。  
弓は中距離がベストだ。

だが、陽香と怪奇たちとの距離は近距離だ。

非常にまずい。

「陽香！伏せろ！－！」

思わず叫んで陽香と怪奇の間にに入った。

陽香は俺の指示通り身をかがめ伏せた。

だから、俺は剣に風を纏わせて怪奇たちはなぎ払った。

陽香の周囲にいた怪奇たちは俺の手によつて消された。

俺と陽香の周囲には一時的にいなくなる。

だが、陽香を立ち上げられるほどの余裕までなかつた。

「そのまま、伏せてる。俺がやる。」

俺はそう言って剣を構えなおし、再び襲い掛かってくる怪奇たちを

なぎ払うため、呪文を用いた。

こいつらは数が多いが連携はない。  
所詮、鳥合の衆だ。

そいつらは俺たちの敵じゃない。  
俺の敵なんかじゃない。

俺は波動エネルギーを風に変え、炎に変え、その両方を纏わらせて怪  
奇たちをなぎ払った。

ぶわああつあ！……！ふあぼぼおおおおおお……！

風と炎が剣の威力を増大させた。

なぎ払われた怪奇たちは一瞬にして消え去る。

俺と陽香たちから多少離れていた奴も消えた。

だから怪奇たちは全滅といつてもいいだろ？

俺の強さに怯えてか、数匹は逃げていった。

「陽香・・大丈夫か？」

そういうながら、陽香に手を貸して立ち上がらせる。

「ええ、ありがとう。」

陽香はそう言って立つた。





## 第一十四章 保険としての武器（後書き）

修正しました。

## 第一一十五章 鉱物探しは旅の余興

陽香を立ち上がらせた後、倉庫の方から拍手が聞こえてきた。

「おお、すごかつたよ。これなら大丈夫だね、心配要らないね。」

拍手したのは紛れもなくイールだった。

ゼレナルがするはずがないから当たり前だが。

「君たちはじこかでやつこいつのやってた?」

「俺は初めてです。」

「能力に気づいてから『道の方を少しあつてきました。』

俺は初めてだといったが、陽香の方はどうやら経験したことがあるらしい。

「それでも狙い通りに当たたのは今田が初めてでしたけど。」

陽香は勘違いするなと云ひ感じで付け足した。

「うーん、それにしてもすごかつたよ。」

初めてだと思えないくらいに陽魔の剣捌きはすごかつたし、陽香ちゃんの見事な距離感と使い分けが言葉にできないほどすげかつたよ。

「

「私は陽魔に助けられましたけど。」

イールの言葉に陽香は助けられたことを持ち出す。

「あれは大変だらうと思つて俺が勝手に乱入しただけさ。」

俺は言つ。

「あれは乱入じゃないわ。私は助けられたのよ、あなたに。」

陽香ははつきりといふ。

「そりやつて言い合ひのもいいけど仲間割れはしないようにな。じやあ武器選びも終わつたし、君たちには早速探しに言つてもらおうか。」

イールが言つた。

はやつ！

「今からですか？？」

「やうだけど・・？」

イールは 突然なに言い出すの？ という風な表情をしている。

「お前らにもう地図は渡しちゃう。だから一人で行つてきな。なんのために能力があるんだと思ってる？鉱物探しは旅の余興に過ぎん。まあ念のため監視はつけてやるが。」

ゼレナルが淡々と述べる。

「監視？」

陽香がそんなものつけるの?といいたげに首をかしげて問う。

首をかしげる姿が俺にはかわいらしく見える。

そんな俺はおかしいか?

おかしくはない。これは普通の男子には当たり前なんだ。

キスされて前より意識している女子の動作全てが  
俺には全てかわいく思えるフィルムかなにかがかったようにかわ  
いく思えてしまつものだ。

そういうもんなんだよつ。

「やつだ。今呼び出すからな。」

ゼレナルはそう言つて呪文を唱える。

「・・招來天靈、憑依装着、天地動派、雅狼雷獸・・・・」

呪文のような理解不能の言葉がゼレナルからつむぎだされる。

何なんだ?この呪文・・・

俺の唱える呪文とは違つ・・・

心中で違和感を覚えながらゼレナルを待っていた。

ゼレナルは長い呪文を早々に終わらせる監視役を召喚する。

呪文完成と同時にゼレナルの周りには非常に細かく刻まれる魔法陣が出現した。

ゼレナルはその魔法陣に手をかざし、

「召喚ー！」

と、言つて、呼び出した。

魔法陣はとてもなく輝きだして俺たちの田をくらます。

あまりのまぶしさに田をつぶる。

やがて輝きは消え、一匹の猫のような可愛らしい幼い獸 が現れた。

「こいつは雷獸の幼獸だ。名前は・・まあ、お前から名乗れ。」

ゼレナルはそう言って幼い雷獸？を俺たちのまへと押し出す。

雷獸に見えない。

何？この可愛らじや。

子猫と間違えてもいいだろう。

子猫 ときやすく表現したがそんな容姿ではない。

子猫のような外見をしていて、耳は猫耳だし尻尾も可愛らじいけど、猫らしさはそれだけ。

小さこから弱いんじゃないのかと思つが実際そつではないとも思つ。

子猫の大きさだが、毛並みは雷のマークが体に巻きついているみたいだし。

口から出るのは歯といつより、小さい牙。

尻尾は雷のマークに豹柄模様。

かわいい田は猫の目にそっくりだが、瞳の色はヒメラルドグリーン。

幼いし、可愛い。

とだけで第一印象は終わらないことが良く分かる外見だった。

「・・私、ラル。」

ゼレナルに押し出された雷獣は、小さくそれでいてはつきりとラルと名乗つた。

「ラル、か。いい名だな。俺は陽魔。よろしくな。」

「私は陽香よ。」

俺と陽香は名乗つた。

「ラル、お前はこいつらの監視役を任せる。分かつたな？」

「うん・・じゃなかつた・・はいっ。」

ゼレナルの言葉につんと頷きかけてラルは言い直した。

先々不安だが、仲間が増えたことには素直にうれしかった。

陽香とじゅる気ままになりそうなときがありそうだからな。

俺はそう思いながらゼレナルたちの光景を見ていた。

一方、陽香は、

あああ、せっかく陽魔と一人っきりで旅ができると思ったのに残念だわ。  
でも、まあいいわ。

雷獸はとても強いといわれているし旅は安全ね。

と、少しラルを快く思つていなかつた。

「じゃあ俺たちは行くぞ?」

陽魔はゼレナルたちに言つた。

どうせ、早く行けといわれるんだから俺から切り出さなことな。

「ああ。」

「頑張つて鉱物をとつてきてね。」

ゼレナルとイールが言葉を返す。

「じゃあラル、行くぞ。」

俺はそつ言つてラルを抱える。

「…?」

ラルは一瞬何をされたか分からなかつた。

「陽魔、別に歩かせてもいいんぢやない? ラルがびっくりしてゐるわ。」

陽香が少し戸惑つたよつに言つ。

「ん? ああ、突然で悪かつたな。だつて、これから長い間、歩くだろ? 」

だつたらこれのほうが楽だと思つたからで。いいだろ? ラル? それとも、自分で乗るか?」

ああ、突然だつたと、自分で思い出しながら言つ。

これ癖だつたんだよな。  
小さいころの。

俺は過去を思い出して久しぶりに手が動いたことに笑う。

「…自分で歩ける…」

ラルはちよつぴり恥ずかしそうに言つ。

「そつか? 悪かつたな、つい癖で。」

俺は悪い悪いと謝りながらラルを降ろす。

「癖 なんだ？」

陽香が気になつたらしくて呟つ。

「ううなんだよ。

俺さ、一人暮らしになる前に歳の離れた義兄弟がいてさ、よく抱えて出かけてたから。」

そう言つてゼレナルたちを背に歩き出す。

陽香もそれにつれて歩き出し、後ろからラルもつゝいついてくる。

「義兄弟？」

陽香は俺にまたもや問いかける。

こつちにこつちむのか・・

内心そう思いながら俺は過去を簡単に語る。

「うう。俺な、一人暮らしになる前、義理母と暮らしてたんだけど、その義理母が再婚して夫のほうに歳の離れた子供がたくさんいて一人暮らしになるまで一緒に遊んだり出かけたりしてたんだ。だけど俺が高校に上がつたら

義理母、義理父の両方とも仕事の都合で海外転勤で俺は家に残つたんだ。」

志望校受かつたばつかなのに転勤について行くなんて嫌だろ?と後

から付け足して話す。

そりやつて、話しながらの俺たちの旅は始まった。

## 第一十五章 鉱物探しは旅の余興（後書き）

次は陽魔たちの過去の思い出を会話に入れていく予定です。

## 第一十六章 雷獣のラル

地図を見て進む方向を確認しながら俺たちは森の中を歩いた。

歩きながら、俺の癖が元となつて過去の話を陽香とすることになつた。

「私はいつも独りだつた。一人暮らしをする前は母と暮らしてたんだけど、母は仕事で夜遅くまで帰つてこなかつたからいつも、家にいたわ。その頃からかしら。能力のことが分かるようになつたのは・・・」

陽香は過去を思い出すよつなじぐさで語りだす。

「やうなのか？」

俺は聞き返す。

そんなに早くに能力が目覚めたなんていくらなんでも早いだろ？

そう思つた。

「ええ、たぶん。記憶も大半が分かりかけたけど母には聞かなかつた。

聞く時間さえなかつたし。

母とは話す余裕さえなかつたのに生活が成り立つていたことが今になつて不思議に思うわ。」

陽香が過去を話すときの表情は声とは違ひ悲しいものだった。

「そりなのか・・・。俺は義理母や義理父とは最低限のことぐらいしか話さなかつたな。

俺のこと嫌つてたみたいだつたからな。それが嫌になつて残りたいといったのかもな。」

俺も陽香には同情できた。

「そりう。陽魔もそんなことがあつたのね・・・。」

陽香と俺の過去の会話の空気が重くなつてきた気がした。

「俺たち似たもの同士だな?」

「そうね。」

空気を軽くさせようと俺は笑う。

それを察したかのように陽香も笑つた。

会話に夢中になつていたせいか、ラルのことをすっかり忘れていた。

「おい、ラル。大丈夫か?」

俺はそう言ひながらラルの方を振り返る。

「・・・だいじょうぶ・・・」

ラルはそりうが明らかに表情が大丈夫じゃないと言つことが分かる。

俺はラルに近づいてラルをひょこっと抱えた。

「結構歩いたな。やつぱりラルにはきつかったみたいだな。なあ、  
陽香、地図開いてくれるか?」

俺はラルを腕で抱えなおして陽香に頼む。

「・・・ほら、まだ私たちがここだ、目的地はここ。まだ距離がある  
わ。どうする?」

陽香は地図を見せながら囁く。

「」のまま俺はラルを抱えて歩けるけど陽香はまだ平氣か?疲れた  
なら一休みするナビ?」

俺はラルの様子を見ながら囁く。

ラルは肩で息をしている。

俺が抱えなかつたら倒れていてもおかしくないだろう。

すっかり忘れていたことを後悔していると、

「私はまだ平氣よ。でも、一休みしたほうがいいと思う。わい想  
いつ怪奇が襲つてくるか分からぬもの。」

陽香は一休みする」とを勧める。

陽香がいいなら俺も何も言つことはない。

「一休み決定だな。一休みするならあそこの日陰がいいんじゃない

か？」

俺は口陰を指差して囁く。

「そうね。私も口陰のまづが涼しくて良いわ。」

陽香も賛成してくれる。

「ラルは？」

「・・・・う・・ん・・」

ラルは俺の言葉にからじて答える。

よほど体力が限界だつたんだろう。

「じゃあそこで決定な。」

俺はそつと口に向かって歩く。

陽香も俺と向かって歩く。

そして俺たちは口陰に腰を下ろして休む。

俺は木を背もたれにしてラルをひざの上にあげる。

陽香も隣に座る。

ラルは以外にも軽かった。

小さく幼いせいか、獣といえど重さは普通の猫並だった。

ラルは俺のひざで丸くなつて、目を閉じる。  
そのしぐさがまるで猫のよう。

息遣いは多少乱れているがそれ以外に異常はない。

ラルは目を閉じてしばらくしないつまに寝息を立て始める。

「陽香、ラルが起きたら出発な？」

俺はラルを撫でながら小さな陽香に囁く。

「・・・」

だが返事がなくその代わりに俺の方へ重みが来た。

「陽、香？」

思わず、陽香の方を見る。

陽香は俺に体を預けるような形で肩によさりかかつて目を閉じ、口からは寝息が漏れていた。

邪魔しちゃいけないな。

そう思つて俺は動かなかつた。

陽香・・疲れてたんだな。

そう思いながら俺に触れる陽香の髪に俺は手で触れる。

しばりくじつとじていたがやがて俺は眠気に誘われていつの間にか  
眠ってしまった。

・・・

俺は殺氣の気配を感じて田が覚めた。

まだ陽香もラルも寝ていたが俺はためらわずに起こした。

「もう出発するぞ。起きろ、陽香。」

殺氣は近くにないが遠いところにある。  
確実に俺たちに向けられれている。

早くに出発したほうがいい。

「ん・・」

陽香は目を開けた。

「田が覚めたか?」

「ええ。」

陽香は多少寝ぼけていたようだが、遠くに殺氣を感じたか真顔にな  
る。

「遠くに殺氣がある。近づいてくるわね。」

「ああ。ラル、起きる。」

俺はラルを起こしてかかる。

陽香が殺気に感づいたなら安心だ。

後はラルの体調が良いならすぐにでも出発できる。

「ん・・あ、殺氣つ。」

ラルも起きてすぐには感づいたらしい。  
さすがは獣。

ラルは俺のひざから降りて殺氣を探る。

俺は立ち上がりて陽香を立ち上がらせた。

「ラルはもう大丈夫か?」

「・・平氣・・」

ラルはそう答えるがラルの足取りはふらつとしている。

俺がラルに言おうと口を開いたとき、今感じた殺氣じゃない気配が唐突に現れた。

「…」

俺は気配を感じた瞬間、

ラルと陽香を両手に抱え、現れた気配と距離を置いたところにラルと陽香を降ろす。

相手は怪奇。

しかも大勢いる。

それも、突然。

何の前触れもなかった。

頭にはたまざまな疑問がよぎる。

なぜ気づかなかつた！？

それが一番の驚きだ。

こんなに大勢いるのに気づかないなんて・・どうかしてゐる。

たくさんの怪奇は異様な形をかたどつたものばかりだ。

その大半はジャングルにあるような大きな植物をかたどつてゐる。

そいつらはすぐに俺たちに攻撃を仕掛けてきた。

「陽香すぐに弓を出せッ。俺がサポートしながら敵を倒す。」

俺はそつと劍を出現させる。

鬼の能力で使用するものは本人の意思で自在に出し入れが可能なのが

だと教えられた。

だから今までしまつっていたのだ。

そして相手に立ち向かうべく走る。

相手の攻撃をかわし、剣で払いのけ切り裂く。

そして陽香が怪奇たちを倒しやすいように距離を作っていく。

陽香は「弓」を出現させ、俺が作った相手との距離をつまく使い相手を一撃でしとめていく。

陽香の足元には足取りがおぼつかないラルがいた。  
まだ本調子ではないらしく、動こうとする気配がない。

ラルも危ないな。

俺は風を剣に纏い怪奇たちをなぎ払い、  
一時的に大きな距離を作つてラルのそばまでより、ラルを肩に抱えた。

「しつかりつかまつてろよ。」

俺はそう言つて再び陽香のサポートに入る。

だが、あまりにも怪奇の数が多く、サポートし切れなかつた。  
そして陽香の「弓」の判断が少しでも遅かつたりするとピンチな状況になつてしまつ。

「や、やばこいつ。」

思わず声に出してしまつ。

陽香の周りを怪奇たちに囲まれた！－！

陽香の後ろが危ないっ！

そつ思つて叫びましたとき、

「これでも私は雷獸だもん！……雷条招来！！」

俺の肩に乗つてゐるラルがいきなり声を上げた。

すると、

ダーン！……ビリビリビン！……

陽香の背後に襲い掛からうとした怪奇は雷に突如打たれ体に電気を  
帯びらせて消滅した。

その音にビクッとして陽香が後ろに振り向く。

陽香の後ろには大きな雷で焦げついた穴があつた。

「ラル・お前がやつたのか？」

俺はラルに問い合わせながら怪奇たちを炎で焼いていく。

「……う……ん……私も……役に立ちたかった……から……

」

ラルは途切れ途切れに言つて俺の肩からずり落ちた。

「おいつ……」

思わず叫び、慌てて片手で受け止めた。

ラルは氣を失っていた。

・・力を使い果たしたのか・・?

そう思いながら俺は片手でラルを抱え炎を剣に纏つて周りを焼き払つた。

陽香も雷には驚いたみたいだがすぐに平常心を取り戻して『で怪奇を射る。

俺の炎と陽香の『で怪奇たちは次々と消滅していった。

やがて俺たちを襲つた怪奇は全て消滅し、遠くにあつた殺氣もいつの間にか消えていた。

「陽香、大丈夫だったか?」

「ええ。・・この大きな穴作つたのつてまさかラル?」

「ああ。そうみたいなんだ。力を使い果たしたのか、今はこの通り。」

俺は俺の腕の中で氣を失つたラルを陽香に指し示す。

「私・・助けられたのね・・。」

「ああ。俺だけじゃあの多さサポートするにはきつかつた。ほんとに良かったよ、無事で。」

「ええ。ラルはやっぱり幼くても雷獣なのね。」

「ああ。そうだな。ラルな、雷落とす前に言ったんだ。これでも雷獣なんだってな。」

多少違うが意味は同じだから言葉を俺なりに変えた。

「そう。甘く見ないほうが良いわね、雷獣は。」

「ああ。やうだな。」

陽香と俺はやうやく笑った。

そして、俺と陽香は歩き出す。田畠地に向かって。



## 第一十六章 雷獸のワル（後書き）

これから戦う場面が多くなつて来ると思います。  
迫力あるものにしようと頑張りますので  
ご不満などがあつたらいつでもいつくください。  
感想お待ちしています。

## 第一十七章 龍蛇を崇める邪神卿

目的地に向かい始めて一週間が過ぎ去る。

普通の人間なら飢え死にしていてもおかしくない。

だが、俺と陽香は餓えてはいない。

俺たちも元は人間だったのに。

それはともかくとして旅は順調だった。

ラルが雷を出した日からちょくちょく怪奇が夜襲をかけてきたりすることができった。

しかし、俺の見事なサポートとすばらじい剣技によつ消滅せざる」とができた。

じ、自慢じゃないぞ、こんなのが……自慢したいけど……

話がそれだから元に戻すが

目的地まであと少しといつとこ今まで来た今日の下がりのときだつた。

「そろそろ休むか?」

俺が陽香とラルに話しかけたとき、答えは空から聞いた。

「おーほつほつほー。あなたたち、私が来たからには休ませないわ

ପ୍ରକାଶକ - !

と、何かしら意味不明な声を上げて俺たちの進むべき道をふさぐよう

服装は・・・露出度がすこく高い・・・いつもちゃなんだが時代遅れの服装だった。

わあーなんだこれ？ サークルか何かか？

俺がそう思つたとき、隣にいる陽香が

おはさん

と  
「あんじて呑いた

そ、だよなー 外見的にはさんだよなー

「……た」「わがおはさんよ……!」たれか……!?

おはなは怒鳴る

「論で決まるわ。タサい服装をしてる私の目の前にいるイカれてる人よ。」

陽體立正直に於てはんを擇ひテ是ハ

「ダサイですつてえーーー？あなたたちには分からぬわ。このよさが、この美学が！」

おばさんは答える。

わかりたくもねーな、そんな美学。

「おばさん、あんた、誰?」

俺はおばさんに聞く。

「おばさんって言つたじやないよつ、そここの坊主<sup>ガサ</sup>が。  
私には 氷歌<sup>ひょうか</sup> と言つ名前があるんだからシ。」

おばさんさ 氷歌 と名乗る。

服装ともまるで違つただけど・・・

心の中で呟く俺。

「で、何のためにここに来たのかしら。氷歌おばさん??？」

陽香がからかいつぶつな口ぶりで聞く。

「おばさんて言つたじやないよつーーそれにこの名前は龍蛇様が  
つけてくださつたんだから。

私は龍蛇様の邪神卿の一昧なのよつーー

龍蛇がつけた・・だと?  
ネーミングセンスが分からん。  
龍蛇つてどんな奴??  
それに邪神卿つて何??

氷歌おばさんの言葉に心底氣になりだす俺。

「えーそのばかげた名前龍蛇っていう奴がつけたのぉ~ビリヤッヒ  
つけたのかしらあ？」

理解不能だわ。じゃああなたは龍蛇の命令で「ぐもたのかしり~」

陽香は心底馬鹿にするような口調で囁く。

「龍蛇様を呼び捨てにするんじやないよ、やこのお嬢ちやん!!!  
たしかにあの方のお考えになることは分からなこともあるけれど  
素敵な方なんだからッ!!」

氷歌おばさんが囁く。

やつぱり考えることがおばさんでも理解不能なんだ。

「田的はなんなの? おばさん。」

「おばさんって囁ひなつ。田的はこれで教えてあげるわッ!!」

陽香の問いかけにおばさんは言葉ではなく行動で示した。

おばさんは氷のつぶてのようなもので俺たちを攻撃してきた。

俺たちはそれをよけ鬼の能力を発動させた。

俺は剣を。

陽香は「」を。

ラルは身構えてうなる。

「あんたは俺たちの命をもらひに来たんだな？だったら俺たちも遠慮なく殺れるな。」

俺はそう言って氷に対抗できる炎を相手に放射する。

氷のつぶては一瞬にして消え去りおばさんの方へと向かう。

「ふんっ。炎がなによ。私を甘く見ないうね。」

おばさんは後ろへ退きしながら氷での攻撃を続ける。

俺の炎が消えたとき、俺たちに向かって氷は襲い掛かる。

「炎だけって俺を甘くみんなよ。」

俺はそつと風を使い、氷の攻撃角度を半回転させる。

「なにっ！？・・・・・ぐわあ””」

おばさんは一瞬反応が送れてまともに自分の攻撃を浴びる。

そこにはかさず陽香が矢を射る。

おばさんは何とかよけようとするがバランスを崩してよけることはできなかつた。

おばさんの腕に矢が刺さつた。

「ぐう””・・・今日のヒヒのせじねくらこにしておいてあげる。  
覚えておきなやこ。」

おばさんは三流悪役の捨て台詞を吐いてどこかへ消えていった。

「覚えていたくないわね。」

陽香がうざりした口調で言つ。

「まつたくだ」

俺も言つ。

「無事たどり着けるかな・・?」

ラルが呟く。

「大丈夫さ。油断は禁物だがなんとかなるだろ。どうする?休憩入  
れるか?」

「そうね、少しだけ。」

「うん。」

俺の言葉に陽香とラルが頷く。

そして俺たちは日陰で休憩を取りに行く。

俺のひざにはいつもラルが座つて休む。

隣には陽香も。

俺は地図を見ながら

「町・・とかないのか・・」

と、呟く。

地図には町の名前やしき文字はない。

示されてるのは地形と現在地と目的地だけだ。

ないなんておかしいだろ。

絶対どこがあるはずだ。

よくよく見ると田的で地までの経路の中に建物のようなもの二ヶ所が連なっているところがあった。

ここがそうかもしれない。

俺がじつと地図を見ていると

「眠らないの?」

陽香が聞いかけてきた。

「ああ。陽香は寝ていいよ。ただ地図を見てるだけだから。」

俺は問いかね答える。

すると陽香は肩に立ちよじると頭を乗っける。

そして俺の腕もつかむ。

「 ょうかあ ・・? 」

頬が熱くなつてこくのを感じながら聞く。  
声が裏返っていることも感じながら。

「 いのままでこさせて ・・? 」

「 ああ ・・ 」

陽香の甘えてるようなないつもの口調のような声に俺は思わず頷く。

俺もじきに眠くなつて寝た。

## 第一十七章 龍蛇を崇める邪神卿（後書き）

誤字脱字などがあつたらすいません。  
感想、ご希望、評価、お待ちしています。

## 第一十八章 町はめぢやくぢや、邪神卿の仕業！？

俺たちは目的地までの経路にある町に着いたはずだった。

だが、そこには荒れ果てた土地が広がるばかり。

本当に・・町・・？

誰もが見て疑つほじ土地は荒れ果てていた。

建物は連なつているが妖幽鬼たちが外でにぎやかに騒いでいるわけではない。

すゞしく静かで町に活氣などあつたもんじやなかつた。

「リリ・・ほんとに町なの？」

陽香が探るよつまなざしで町を見て聞いてくる。

「たぶん、な。地図を見るといつも俺たちがいる地点にねがしるされているだろ？」

読めないけどな と、後から付け足して俺は言つ。

「リリは町。建物の中に氣配感じin・・」

ラルが建物を見渡して言つ。

「そつだな・・確かに氣配が・・ん！？」

俺はラルに頷きそうになつて周囲の気配に異様なものを感じた。

「どうしたの？」

陽香がそんな俺を怪訝そうに見つめる。

ラルも不思議そうに見てくる。

陽香もラルも気づいていないみたいだ。

「！」の場からいつたん退<sup>ヒツ</sup>。 気配を隠せよ。」

俺は陽香たちの返事も聞かぬまま陽香とラルを抱え、町にある大きな木まで飛躍し気配を消した。

「！？」

「…」

陽香もラルも俺のとつた行動に理解ができなかつたためか口を見開いていいる。

だが、ラルは少なからず異様な気配には本能的に察したようだ。

・・俺の直観力が皆より勝つているのか・・？

そのことが不思議で仕方がない。

だがそれよりも氣になることがある。

「あのおばさん・・・妙なもの連れてきたぜ？」

俺は木から見下りしきみをせつ口調で言ひへ。

「えつ。ほんとこへ。」

「・・・敵。」

陽香が少く驚き、リルはおばさんたちを冷たいまなざしで見下りす。

異様な気配・・それは氷歌おばさんたちのことだつたのだ。

おばさんは何か妙な獸を連れている。

「かわいいかわいい私のフロウ。この町の生命エネルギーを凍らせてしまいなさい。」

「！？」

おばさんは妙な生き物をフロウと呼んだ。  
そのうえものすごいことをいいます。

俺たちは言葉を失つた。

生命エネルギーだとお！？

「どうする？」

陽香は聞いてくる。

「陽香がいいならあいつらを殺<sup>や</sup>う。こいか?」

「ええ、もちろん。」

「じゃあ決まりだな、ラルはここにいる。何かあつたら助けてくれるのを期待してるからな?」

「・・無茶しないで。」

俺と陽香は戦闘準備に入りラルに言<sup>い</sup>ひ。

ラルは俺たちを心配してくれた。

まだラルといる時間は少ないが多少なりとも心を俺たちに開いてくれた。

陽香とはあまりつかまへやつてはいないようだが・・・

「ああ。努力する。いくぞ、陽香」

「ええ。」

俺は頷いて、陽香と木から飛び降りた。

「冗談はそこまでにするんだな、おばさん?」

俺はおばさんたちに向かっていった。

「なつなんであんただちガキがこんなところこんのよつ。

まあ、いいわ。私がここで相手にしてあげる。

あんたたちを葬ることができるば、龍蛇様にいい顔向けができるわ  
つ。」

おばさんは言った。

「あれ？ おばさんって言われても否定しないわね。まあそれが妥当  
かもしないわね。

ふふふ、あなたの悪役台詞にはまってもお似合いよ？」

陽香も言った。

おばさんの顔が見る見る赤くなつていいく。

「おばさんって言つんじゃないよ、ガキがつ――  
そういうえば、あんたたち、ガキって言われても否定しなかつたわよ  
ね？」

おーほつほつほつほ。子供がいつような言葉はあんたたち、ガキ  
にはお似合いよ。」

おばさんは俺たちが否定しなかつたことをいろいろと俺たちのことを好き勝手に言つてゐる。

だが俺には策略がある。

「ガキ？ そうだな、俺たちはガキだよ。そんなガキにやられて帰つ  
ていったのはどこの誰だったっけ？？」

俺は、ニット笑つて言つた。

陽香も、こい思につか と言わんばかりに笑つて、

「やうやう。だれだつたかしら？あいにくガキなんで記憶力がちい  
んだよねえ？」

と、くすくす笑いながら言ひ。

その後付け足すように、おばさんも記憶力悪いからお互い様ね」と  
言ひ。

「ぐつ……ああいえぱこいつ……ぞこに連中だね……  
やつておしまい、フロウ……！」

おばさんまつれてきた妙な生き物に命じる。

それを合図に戦闘が始まった。

フロウと呼ばれた生き物は凍りつくよつな吹雪を俺たちに向ける。

俺は剣を呼び出し炎を纏つて吹雪から身を守る。

早速俺はおばさんに切りかかりに行つた。

陽香はフロウの方をたのんだ。

陽香は苦手といった妖の炎を使って『』で倒そうとしている。

俺はおばさんと聞合こを詰めて隙をうががつ。

そしてタイミングを計つて攻撃しに行く。

キーンっ！――！

何か金属の出す音が俺の剣に当たった。

「私を甘く見ないことね？私の鬼は マイク よ？」

「一・？」

俺の剣はおばあさんのマイク？に当たって音をかもし出したのだった。

俺はいったん身を退き、間合いを取る。

そうこえぱ、このおばあさん、氷歌 って名前だつたな。

今頃になつて思い出す。

「あ、悪い。おばあさんおばあさんついてたらあんたの名前がれてた。」

俺はあちやーと手を頭に乗せて笑う。

そのとき、おばさんはガクッと傾いた。

隙ありつ

俺はその瞬間をついて切りかかるが動きが途中で止まってしまった。

それは・・・

ぴいーーーー  
” ” ” ”

そんな音が頭に響いてくるからだつた。

「あら、どうしたの?」  
「いけない?」

そりやあわうね、フロウの音波をずっと聞いていたんだからね?」

「・・おん・・・ぱ・・・だとお?」

俺は聞いた。

音波?自分自身動かなくなるまで氣づかなかつた。

こんなことつてあるのか?

「さうよ。今回も龍蛇様のじ命令で  
フロウをつれてこの町に行つて住民どもからエネルギーを奪いに來  
たの。

普通、特殊な場所でもない限りフロウの音波は害を起さないんだ  
けどねえ?

ここはどうしてか、音波の効果があるみたいなのよ。」

おばさんは説明する。

俺以外に陽香までもが体を硬直させている。

「わあ、今までの分ぱつちり受けてもいいつわよ。  
みさひりじりつて俺を蹴り上げた。

おばさんはそつぱつて俺を蹴り上げた。

「ううーー。」

痛みがけられた中心から激痛が走る。

何とか、一、二歩後ろに退くだけでおさまった。

俺は心の中で風を呼んだ。  
剣を持つ手に力を加える。

風よ、音を消し去ってくれッ！！

強く俺は願う。

それと同時にフロウに雷が落とされた。

ダーン！！！

フロウは雷で炎がついたのか燃え上がる。

そのうちに西湖は消え去った。

動けるようになたことを感じ取り俺はすぐさまおぼさんに向かって  
けりを一発食らわした。

「ぐうーー。」

そのとおり、ワルが木から落下してきた。

ねざさんば景気よく吹つ飛び。

そのとおり、ワルが木から落下してきた。

俺は慌ててラルをキャッチできる位置に滑り込んだ。

「ラルは氣を失っていた。

助けてくれて・・サンキューな、ラル。

心の中で礼を言ふ、おばさんたちのまつに向き直る。

そして、俺は剣をかかげ、炎を纏わせる。

「とじめだつ……」

俺は叫び、おばさんとのまつに向けて剣でなぎ払つ。

風と共に炎がおばさんたちのまつに押し寄せ、まともに食ひ入る。

「ああ……あつ……、また邪魔してッ……覚えていらっしゃい  
ツ……！」

おばさんはやがてまた姿を消した。

「ふう。終わったね。といふで蹴られたとい、平氣?」

陽香は俺の心配をしてくれぬ。

「だいぶ痛みはないからたぶん大丈夫。そつちは苦戦したか?」

俺は心配ないと伝え、陽香に聞く。

「ええ。相手が同じ属性だつたからね。ただ、音波のせいか体がまだふらつくわ。」

陽香は少しつらそうに言つ。

「大丈夫か？」

俺はそういうながら手を貸す。

「平気よ・・・一人で歩けるわ・・・」

陽香はそつ言つたが体がバランスを崩して倒れた。

慌てて陽香の体を抱える。

「・・・」

陽香から何も反応がない。

俺は陽香の体を抱き上げた。

陽香には意識がないことが分かった。

仕方ない、どこか日陰まで抱えてくか。

俺は陽香とラルを抱えて町はずれにある川辺の日陰に行つた。

はあ、はあ、はあ。

抱えて歩くのは意外にも困難だった。

ラルは小さいとはいえ 獣 だし、陽香だって軽いほうだが 女だ。

手荒なまねをすれば後で俺の首が吹き飛ぶ。

俺は陽香とラルを一寧に横たわらせながら俺も地面に腰掛けた。

俺は陽香たちが目覚めるのを待った。

ふああねむい。すこしねる・・か・・

待つていろうひじひといしてきて・・俺は眠ってしまった。

すや・・・すや・・

すぴー・・・すぴー・・

俺が起きたときはすでにラルが起きていた。

陽香はまだ意識がない。

よほど消耗したんだと思つ。

「ラル、起きてたのか・・サンキュー?あの時助けてくれて・・

俺はそう言つながらラルの頭を撫でる。

「・・期待されたか」

ラルは相変わらず冷たい言葉を言つ。

だがラルの表情からして撫でられるのは嫌いじゃなさそうだ。

「もつ・・夕方。そろそろ移動しないと怪奇の餌食になっちゃう。

ラルは俺をじっと見つめて呟つ。

「ああ、もうだな。今日は・・木の上にするか。」

俺はそつと陽香を抱える。

「じゃあこへか。」

「うん」

そつと俺たちは歩き出した。

## 第二十九章 疲れ

俺は今、木の上にいる。

体を浮かせて幹の太い枝まで移動した。

ラルも俺と距離を置いて寝ている。

俺は太陽の光がまぶしくてついさつき起きたばかりだった。

ん・・眠い。

まだ寝ぼけるがうっかり木から落ちるわけには行かない。

まだ陽香は寝ているのだから。

怪奇や他の奴らに教われないように木へ上ったが人一人を支えながら寝るのは大変だ。

結局深くは眠っていない。

陽香を落とさないよう必死で抱えていたんだからな。

「ん・・・」

このとき陽香は起きた。

「・・・起きたか?」

俺は声をかける。

俺と陽香の距離はゼロに近かった。

そのためか・・・

「ち、ちかつ」

陽香は慌てて離れようとする。

「おいつ落ちる。」

俺はそう言ったが陽香がもがくせいでバランスを崩す。

そして一人はまっさかさまに落ちた。

陽香っ！

俺は陽香をかばうように抱きしめ落ちた。

背中に衝撃が来た。

だが、幸い下は落ち葉がたくさんあって怪我はない。

俺と陽香の体勢は今けよつといいムードをかもし出していた。

俺のひざの上には陽香がいて、陽香の頭は俺の胸にあって、互いの背中には手があつてお互い抱きしめている状態だったからだつた。

落ちたことによつてその状態に同様など全くなかった。

ただ、俺は陽香を守りたかつただけだつたから今は陽香の無事を安堵している。

「大丈夫、か？」

念のために聞く。

「・・ええ。大丈夫。」

陽香はまだちょっと体が震えている。

落ちたことにまだ驚いているんだろうな・・

俺はそう思つ。

だつてそうだろ？

起きたら木の上にいるんだからな。

「大丈夫、だつた？」

木の上からラルが降りてきて聞いてくる。

俺は立ち上がり、陽香の手を引いて陽香も立ち上がらせて

「ああ。落ち葉がクツショソになつてくれた。」

と、言つ。

「陽香、回復したか？」

「ええ。多少。」

「そりか、ならまだ休んだほうが良いな。体から体温があまり感じない。」

俺は陽香の手を放さず言つ。

「どうあえず、な。」

俺たちは日陰に移動して休みを入れた。

陽香は休むことをためらっていたから俺が無理やり座らせて体を抱き寄せた。

「なつ——～～」

「ほり、休め。木の上は不安定だつたろ？」

「～～～」

「俺たちも休むからな。・・ほり、ラルもこっち来て休め。」

ラルも自分のほうへと引き寄せ、ラルの頭を俺は撫ではじめる。

ラルはじきに目を開じてまた眠る。

まだ昨日の疲れを引きずつてゐるようだ。

陽香も安心したのか眠り始める。

俺は周囲の気配をつかがいながら眠りについた。

だが眠りについたとはいえ、すぐに俺は起きた。

陽香の呼吸が速かつたからだつた。

俺は陽香の額に手を当てる。

「おまえ・・無理に炎なんて使つからだぞ?」

俺はそう言つて陽香を抱き上げた。

陽香の顔色は悪く陽香は意識がはつきりしていなかつた。

俺が陽香を抱き上げたときにはラルもすでに起きていた。

「ラル、川辺のぼうにこつたん戻るべ。」

俺はそう言つて川辺まで戻つた。

そして川辺の近くにある日陰に陽香を横たわらせた。

陽香の胸元にあるイールからの防暑対策である青いクリスタルは以前より輝きを失っている。

俺は自分のズボンに入っていたタオルを出す。

人間界から持つてきただ唯一の物になるかもしれない。  
服は「じつに来て体と共に変化してしまったのだから。

そのタオルを川の水でぬらす。

ラルはじっと陽香を見ていた。

俺はぬらしたタオルを陽香の額にかける。

・・・これで熱が下がればいいが・・・

考え込んでいた俺にラルは体を摺り寄せてきた。

まるで猫が自分の飼い主に寄り添うかのように。

「疲れが出てきただけならすぐに熱は下がるさ。」

俺はそう言いながらラルの頭を撫でる。

・・陽香・・ほんと、疲れや暑さによわいんだな・・

俺は思つ。

陽香といふときよく力を使つた後とかには意識失つたときが多く  
つたなあ・・

今になるとそれも思い出の一部だが・・

ここは川の近くだからなのか結構涼しい。

夜になると余計涼しくなつた。

目的地まであと少しだけど陽香がこんな危うい状態ではいけないな。  
・

俺はそう思いながら横になつた。

時々、タオルをぬらしたりして一日中様子を見た。

「ラルは・・なんともないのか?暑さや寒さは・・

「暑さは平気。寒さは苦手。」

ラルは答える。

「やうか・・俺も暑さは苦手だな。じゃあこいつに来いよ。一緒に  
らあつたかいぜ?」

「・・・」

俺はそつとが俺の隣に陽香がいるせいか俺と少しはなれたところ  
にいて動じひとつしない。

俺は無理やり捕まえて

「一緒にあつたかいだろ?」

と、聞く。

俺は横になりながらも腕でラルを体に引き寄せた。

「・・・」

ラルは黙つたまま何も言わない。

抵抗もしない。

ラルは隣にいる陽香を鋭い目つきで睨んでいるだけだ。

・・ラルは・・陽香が嫌いなのか・・?  
・・・それとも・・こういう性格の奴と何があつたんじゃないのか  
?過去に・・

俺はラルを撫でながら

「陽香がそんなに気に食わないのか?」

と、聞く。

「心が嫌い」

ラルは答える。

心?  
感情、か?  
意思、か?  
思考、か?

「やつ、心中でもつとも嫌いなのは思春期。」

ラルは俺の考えることをずばりと当てる。

「…・俺の心を読めるのか？」

驚きながらも聞く。

「読めるんじゃない。感じるの。」

冷たく言い放つ。

「そりゃ…じゃあ、過去にそれに辛い目にあつただろ？」

「…不気味とか思わないの？」

俺の問いに答えずラルは聞く。

「心を感じることは不気味とは言わないんじゃないか？俺は別にすごいことだと思うけど？」

それに俺もなんとなく察するんだよね。

人の性格で過去にこうこうことがあつたかが。」

俺は言つ。

ラルは目を見開き俺を見つめる。

「性格っていうのはむ、自分の経験したことでえてしまつことが多いんだ。

怖い・辛い・悲しい・苦しい

そういう感情は人によって対処法が違うけど、過去に会つた嫌な事がその対処法を制限してしまう。

自分を縛り付けてしまったんだ。  
言っている意味分かったか？」

俺はそう言って聞く。

「・・なんとなく。」

「なんとなく、か。それでここさ。自分のことなくて自分が一番分  
からないからな。

でも俺が思うに陽香とラルは似てると思つ~。

「似てる~。」

俺の言葉にあつむ返しで聞き返すラル。

「ああ。しゃべり方こそ違つが辛いのを我慢しようとするといふこと  
か。  
陽香は甘えることを我慢しなくなつたがあつた當時はそつだつたか  
らな。  
ラルも今さつき、拒んだだろ~。」

「・・・・・」

俺の言葉に黙るラル。

俺はラルを撫でて

「思えていいんだが、そのまつが俺もつれこしな。」

と、恥ずかしながらもまづ。

「うれしい？」

「なんで?と、心底分からないと呟つ風な表情をラルがした。

「昔のこと思い出すからな。小さい義理兄弟の姿が。理由になつてないか?」

「・・・なつてる気がする。」

ラルは答える。

「じゃあ寝るか。お休み

俺はそつ言つて眼を閉じる。

「お休み」

ラルもそつ言つて眼を閉じる。

・・かわいくて仕方ないんだよな、

俺は・・独りでいるところを見てこると誘いたくなるからな。以前、自分がそうだったよつ・・

俺は心の中でやつ思いながら寝た。



## 第二十九章 疲れ（後書き）

話が進まなくてごめんなさい。

次回は頑張ります。

感想お待ちしています。

## 第三十章 目的地到達

陽香が回復した後、俺たちは目的地へと向かった。

「本当にここなの？」

陽香が俺に問う。

「・・地図はここを指しているからたぶんここだな。俺も信じられないが。」

俺は素直に言つ。

陽香が聞いてきたのも無理はない。

そこには泉があるだけなのだから。

俺たちは崖に囲まれた泉を呆然と見ていた。

鉱物、と書つからには山だらけと思い込んでいた。

だから 本当にここなのか？ と聞かれれば 本当だよ とはほつきりいえない。

この泉を田の前にしてするリアクションは一番これがベストなかもしれない。

「・・鉱物を取つて来いつて言つてたけどどうすればいいのかしらね？」

陽香が俺に聞いてくる。

「俺に聞かれても……。そうだ。ラル、なんかゼレナルたちに聞いていいのか？」

俺はラルに一応聞いてみた。

いい答えがあれば良いが。

「……泉に飛び込めって言つてた。ただそれだけ。」

ラルは言いつぶやきで言つた。

「飛び込む？ そういうの？」

「うん。」

俺の言葉に頷くラル。

「飛び込むの！？ ……私、嫌だわ。」

陽香の顔色が悪い。

「水が・・怖いのか？・・過去に何かあったか？」

俺は思わず口に出してしまった。

陽香は俺の言葉に驚きを示した後、

「水は嫌いなのよ。だから・・・」

陽香は弱気な声で呟つ。

「じゃあ、俺の風の結界の中に入らひ。そいつすれば水に触れなくて済む。

俺は一応もぐるが。」

俺はそつ言つて呪文を唱えだす。

そして呪文は完成した。

「いべぞ?」

「・・ええ。」

「うん。」

俺の言葉に陽香とラルは頷く。

俺は自分たちの周りを風の結界で包み込んだ。

そして浮き上がり水の中へ入つていく。

ズズズウーラジュワーアー

泉の水は俺たちをまるで歓迎するかのよつとせしたる抵抗はなく俺たちを中に導いてくれるようだった。

水の中にすっぽりと入つたら中は口差しで明るくきれいな景色だった。

魚が優雅に泳ぎ、泉のせりはまるでサンゴ礁のよう。

俺は結界をつまぐ操つて泉の中を探検する。

しばらくそんな状態で見回していたらすると一つの洞窟が見えた。

「行つてみるか?」

「・・・ええ。」

「うん。」

俺の言葉に陽香とラルは頷く。

だが陽香は明らかに戸惑つているようだつた。

俺はその洞窟に近づいた。

だがその洞窟はあまりにも小さくて結界のある状態では無理そうだった。

「どうする? こつたん上に戻るか?」

「・・・」

俺の言葉に陽香はひどく青ざめでいた。

「こいつのまじや入れない。」

ラルが言つ。

「ひへへ

陽香は怯えた顔をしながら水を見る。

俺は思わず陽香を抱いてしまった。

「一」

陽香は声も上げずただ驚くばかりだった。

体が・・震えている。

水がそんなに怖いのか・・

「陽香・・水が怖いんだな。・・大丈夫だからいつたん戻ろう・・  
な?」「

俺は抱きしめたまま言つ。

きつと過去になにかあつたんだ。

トライアゴになつてるかもしれない。

でなければいつものように強気な態度で「まかすに違いない。

「ひーーー

陽香は震えながらも「クンと小さく頷く。

「じゃあ戻るぞ。」

俺は結界をコントロールして水面に向かつて戻る。

そして陸に到着した。

「…あの大きさからすると一人ずつしか入れないな。  
あと、水面から距離が遠いし息も続かない。」

俺は言う

「俺が小さい空気の泡を作つて顔をそれで覆えばいいがやつぱりもぐるしかないな。」

俺がそう言つと陽香はしゃがんで震えだした。

俺もしやがんで陽香の肩を抱く。

「大丈夫。俺が陽香を運んでやるからずっと目を閉じていればいい。  
水に触れたくないのは分かつてる。  
だけど、俺がいるから不安がらなくていい。  
だから、行こう、な？」

俺は陽香を説得するよつて言ひ。

だが陽香は何も言わない。

これでもだめ、か。

「陽香、顔上げろ。そして俺の瞳を見るんだ。」

俺は陽香と向き合ひ、陽香のあいに手をかけて視線を合わせる。

陽香は俺を怯える瞳で見つめ上げる。

水に触れたくない。怖い・・水が。だから・・嫌なの。

その陽香の意思が俺に伝わるようだ。

これしかない・・この方法しか水には連れて行けない。

俺はそう考え込んだ後、心の中で呪を唱える。

「陽香、しばらくお前の意識を失わせる。ごめんな。」

俺は唇が重なったと感じたらすぐさま陽香の口に舌を入れる。

俺は舌を上手く使い、陽香の舌にあるものをすりこんでいく。  
俺の舌に驚いているんだと思ひ。

陽香の甘い声が漏れる。

俺は舌を上手く使い、陽香の舌にあるものをすりこんでいく。  
俺の舌に驚いているんだと思ひ。

陽香はもがくが俺はしっかりと腕で押さえつけた。

「・・んつ・・んう・・んつ・・・・・・

陽香は必死に自分の舌を動かして拒否しようとす。

俺は唇をがっちり押さえつけ、自分の舌で陽香の口の中を這はずつていぐ。

拒否を陽香は続けていたがそのつち受け入れられずにはいられなくなり、

俺の思惑通りになつた。

呪、発動！－

俺は自分の舌が陽香の舌と絡めたとき、発動させた。

陽香は自分の舌から感じる異変にわざから感じていたらしかったから今も必死で拒絶している。

だが、それもじばしの間だけ。

陽香の体から力は抜けて、抵抗力もなくなる。

陽香の体が俺の方に倒れるように重みが来る。

俺は唇を放した。

そして倒れそうになる陽香の背に腕を回し支えた。

「『』みんな・・

俺は呟く。

陽香は必死でまぶたを開けようとするが無理だつたらしく、眼を閉じる。

そして陽香は意識を失つた。

いや、俺の呪によつて失わされたんだ。

今のは一時的に意識を手放させる **疲労襲撃呪。**

それは呪者（呪を発動させる人）の疲労を相手に移し相手の疲労も加えた

その全部を襲わせ意識を失わせる方法なんだ。

だから呪者の疲労 + プラス 相手の疲労 -> を 相手の体

に移すこと なんだ。

呪を心の中で唱えながら自分の舌に呪を移動させ発動させながらその力を解放させる。

それが口移しの疲労襲撃呪なんだ。

俺は陽香の体を抱き上げて立ち上がる。

## 第三十章 目的地到達（後書き）

せっかくガールラブを注意書きに書いたので入れてみました。  
次回は今回の話を陽香視点で書こうと思います。

## 第三十章 目的地到達（陽香視点）

「本当に……」なの？」

私は目的地に着いたとき陽魔に聞いた。

「……地図はここを指しているからたぶんここだな。俺も信じられないが。」

陽魔は私の言葉に答えた。

信じられない……」とは泉よね……どうみても……

私は目の前にある光景を凝視していた。

崖に囲まれた泉がぽつんとあるだけの風景を。

「……鉱物を取つて来いつて言つてたけどどうすればいいのかしらね？」

私は陽魔に聞いてみる。

水にはもうぐりないことを祈つて。

「俺に聞かれても……。そうだ。ラル、なんかゼレナルたちに聞いていないのか？」

陽魔は私の疑問をラルにまわして聞いた。

「・・・泉に飛び込めて言つてた。ただそれだけ。」

ラルは陽魔の言葉に言いにくそうに言ひ。

！・・・・もぐりたくない。水に触れたくない。

私は心の中で呟く。

「飛び込む？ そういうのか？」

陽魔がラルに再び問う。

「ぐくつ・・

私はつばを飲む込んだ。

「うん。」

陽魔の質問にラルは頷いた。

「飛び込むの！？・・・私、嫌だわ。」

私は言った。

私は今非常に顔色が悪い気がする。

飛び込みたくない。

その感情が私を飲み込もうとする。

「水が・・怖いのか？・・過去に何かあったか？」

陽魔は私に問う。

私は驚いた。

何で分かつたの！？

どうして・・・

私、水が嫌いなのよ・・・怖いのよ・・・

「水は嫌いなのよ。だから・・・

私は小さく弱々しく伝える。

陽魔に迷惑かけちゃいけないのは分かつてるんだけど・・・

「じゃあ、俺の風の結界の中に入らう。そうすれば水に触れなくて済む。―――」

陽香にはその言葉を聞いても不安は消えなかつた。

不安が音を消すかのように陽魔の声が聞きずらくなる。

陽魔は呪文を唱えた。

私はその間、水が怖くてどうじょうもなかつた。

ただ・・水に触れないのなら・・もつわがままは言わないことこうと思つた。

「こべぞ？」

陽魔の声に

「・・・ええ。」

と、私は戸惑いながらも頷く。

「うん。」

ラルも頷ぐが少し声が震えているよう私は聞こえた。

そして私たちは結界に包まれた。

泉の中にもぐりこすっぽり入ってしまつ。

水の中の風景はきれいだと私は思つたが、過去の思い出が次々と脳裏によがる。

陽魔は私やラルに向かって

「行つてみるか？」

と、洞窟を指し示して聞く。

嫌な予感が・・胸騒ぎが・・私の心の中でざわめいた。

戸惑いながらも私は

「・・・ええ。」

と、頷いた。

「うん。」

ラルも頷いた。

ラルも多少戸惑つているように見えた。

洞窟の方へ近づいたが小さくて結界のままじゃ入れそうになかった。

「どうする？ いつたん上に戻るか？」

「・・・」

私は陽魔の問いに答えられなかつた。

いつたん上に戻つてからどうするの？  
私・・・もぐりたくない・・・  
水に触れたくないつ

水への恐怖心が言葉に出すのを拒否しているのが自分でも分かる。

「このままじゃ入れない。」

ラルが悔しそうに私に言つのが聞こえた。

分かつてるわよ、そんなの・・・

そういいたかった。

でも言葉は出なかつた。

「ひへへへ

私は言葉には出せなかつた。

私は私を囲む水を見る。

怖い。触れたくない。・・嫌だ。

そう思つて水を見つめる。

すると、私はいきなり陽魔に抱きしめられた。

「！」

言葉に出したくても・・突き飛ばしたくもできなかつた。

なんで・・私は抱きしめられてるの！？

疑問が体中を駆け巡る。

「陽香・・水が怖いんだな。・・大丈夫だからいつたん戻ろっ・・  
な？」

陽魔は私を抱きしめながら言つ。

陽魔・・私はあなたが分からぬ。

私のこと・・気づいてるんだよね？

それで不安を取り除こうとしてるんだよね？

でも・・私・・水は嫌い・・怖い・・  
だけど・・仕方がないんだよね・・?

「ひーーー」

私は言葉にならず「くんと頷くことしかできなかつた。

体が震えている。

過去の記憶がよみがえる。

前世の記憶ではない幼い自分の過去が・・・

私は涙を止めるのに必死だつた。

「じゃあ戻るぞ。」

陽魔はそつと水面へと移動させる。

そして陸に着いた。

「・・・あの大きさからすると一人ずつしか入れないな。  
あと、水面からの距離も遠いし息も続かない。」

陽魔は言ひ。

それ以上、私に言わないで・・・  
もぐりたくないの・・・  
水が・・怖いの・・やめて・・・

私は足に力が入らなくなつた。

「俺が小さい空氣の泡を作つてそれで顔を覆えばいいがやつぱりもぐるしかないな。」

陽魔が仕方なさそうに言つのが聞こえる。

私、水にいれられるつ！？

私は立つていられなくなつてしまふ。

水・・・怖いよ・・水・・いやだつ・・ふれたくない・・・

私は震えだした。

陽魔もしゃがんだ。

そして私の肩を抱く。

「大丈夫。俺が陽香を運んでやるからずつと目を閉じていればいい。水に触れたくないのは分かつてる。だけど、俺がいるから不安がらなくていい。だから、行こう、な？」

陽魔は私を説得するように言つが私の心は動かない。

- ・ それでも・・私・・水に触れたくない・・怖いの・・
- ・ いやなの・・・嫌いなの・・・
- ・ 過去と同じ目にはあいたくない。

私は心中で渦巻いていた。

「陽香、顔上げろ。そして俺の瞳を見るんだ。」

陽魔にせいつぶされ無理やりあいを上げられた。

水に触れたくない・・怖いの・・水が。だから・・

私は陽魔にその想いが伝わるよつに見上げる。

陽魔は私を見つめ顔を歪ませた後

「陽香、しばらくお前の意識を失わせる。ごめんな。」

と、言ひ。

そして陽魔に口をふさがれた。

そして口を開けられることができず、陽魔の舌が入つてきた。

唇と唇が重なり、深いキスに私は吸い込まれそうだった。

だが、陽魔の舌から異様なものを感じた。

だから拒否をしようともがいた。

「んっ・・・ん！・・・んう・・・・・・・・

私の声が漏れる。

陽魔つ・・・いつたい・・何を・・

陽魔は舌をうまく使って私の口の中を動き回る。

なんだろう・・・力が・・・ ireられない・・・  
疲れが押し寄せてくる嫌な感じが・・・・

私はもがくが押さえつけられ唇もがっちりふさがれる。

陽魔の舌が私の舌と絡まった瞬間、異様なものが私の口の中にあふ  
れてのどへと伝わってきた。

や、めてつ・・陽魔・・・・

必死に拒絶をするがそれは体中に伝わった。

私は体から力が抜け抵抗力を失つた。

陽魔はそのころあいを見計らってか唇を放す。

私の体は陽魔に支えられた。

私は陽魔を見上げた。

脱力感と疲労感が体中を駆け巡った。

・・陽・・魔・・・・呪・・・なん・・・か・・・を・・・お・・・

「ごめんな・・」

陽魔の呟く声が聞こえた。

私は体中を襲うものに耐えられなくなり、私は意識を失った。

## 第三十章 目的地到達（陽香視点）（後書き）

次回はしっかり話を進めます。

次からも少しずつ陽香視点もまぜて書いていこうと想います。  
ベースは主人公の陽魔ですが・・・。

陽魔は陽香を抱き上げた後、呪を唱え始めた。

早くしないとな。

陽香は回復力が高いからな・・・

そつ思つてゐるがやはり意識を奪つことには後悔してゐる俺だった。

「ラルは大丈夫か？」

俺はラルに一応聞いてみる。

「水は・・嫌い。でも陽香**ほゞ**じやない。」

ラルは言つてくわつて言つた。

「やうか・・。ならラルの周りに薄く **呪輪**  
じゅわ をはるか？」

俺は聞いてみる。

呪輪つてのは呪を輪のように広げる効果範囲を広げる奴なんだ。

陽香にはできないが・・ラルぐらいの大きさなら・・。

そう想いながら聞いたのであった。

「どうして陽香にしなかつたの？」

ラルは意外そうに聞く。

「陽香ぐらじの大きさには長い時間は貼る」ことができない。

「ラルぐらいならちょいと良いくのさ。」

俺の消耗も陽香じゃちょっときついからな。

ラルも怖いんだろ？水が。」

俺はそう聞き返す。

「・・正直に言ひ怖い。」

ラルはやつ言ひへ。

「やつが、なら・・貼るだ。」

おれはそつ言つて両方の呪を唱えて発動せん。

おれと陽香とラルの頭はおれの空気の泡で覆われ、ラルの体は呪輪で覆われた。

「こぐだ。」

おれはそつ言つて陽香を抱きながら水に飛び込む。

ラルも頷き、泉に飛び込む。

ぱっしゃーん！…！

大きな音を立ててもぐり始める。

水が体中に圧迫感を与える。

服が水を吸収して重くなる。

尻尾にも異様な感触がして俺は身震いした。

・・・この尻尾って豹のだよな・・

俺、ネコ科は水が嫌いなことすっかり忘れてた。

俺は身震いに耐え、洞窟のほうへ向かつ。

水に入つても息苦しくはない。

俺は陽香を肩にかついで片手でおわせ、足ともう片方の手で水の中を突き進んだ。

ラルも脚を使つてうまく水の中を進む。

そして俺たちは洞窟の前までやつてきた。

洞窟の中がどうなつてゐるかは暗くてよく分からぬ。

入るぞつて俺が言おうとしたとき、突然、水に異変が起きた。

ズウオ”オオオオオオ

水は渦を巻いて俺たちを巻き込む。

俺は陽香を降ろしかばつづいて抱いた。

水は意思があるかのよつて洞窟の中へ俺たちを引き込む。

ギギギイウイイオオオ” ”

体を締め付ける水があまりにも強くて抵抗ができない。

そして俺たちは洞窟の中に引き込まれた。

引き込まれる途中、体のあちこちを打ち付けて俺は意識を失った。

・ ・ ・

「・・・ま。・・・つま。・・・まつま。・・・陽魔・・・」

誰かが俺を呼んでいる。

その声で俺は目を開ける。

視界に移ったのは暗闇の中に目を光らせるラルだ。  
俺の腕の中には意識のない陽香がいた。

「・・・ラル・・・」は・・洞窟の中、か?」

俺はとりあえず上半身を起こし、ラルに問いかける。

「・・・たぶん。

私も気を失つてたからよく分からない。  
気がついたときにはここにいた。」

ラルが俺を見つめて言つ。

「そうか。しかし・暗闇はきついな。明るくするか。」

俺はそう言って 妖 の能力を使い明かりを灯す。

そうすると、次第に洞窟の奥の方も明るくなつた。

連鎖反応が起つたのだろう。

しばらく洞窟の中を見渡していると

「・・・ん・・・・」

と、陽香から声が漏れた。

俺は陽香を抱き上げ、

「大丈夫・・か？」

と、聞く。

「・・・・・」

陽香は何も言わない。

意識が取り戻せても体が遅れているのだろう。

陽香の皿は空虚で俺やラルが視界に映っているか怪しいものだった。

陽香は俺を見上げるがまだ意識ははっきりしていなさそうだ。

俺は炎を地に灯しぬれた服を乾かそと近くによる。

俺は陽香を抱き寄せて温まらせる。

俺は陽香の頬に手で触れる。

冷たい・・

俺は心の中で呟いた。

陽香の体から暖かさを感じない。

きっとぬれたせいだとと思う。

ラルも炎の傍で毛づくろいしている。

じきに体に温かみが戻ってきた。

「・・・み・・・ま・・・

不意に陽香が俺の名を呟く。

「ん？ 陽香、大丈夫か？」

俺は陽香に視線を向け聞いてみる。

「・・・からだじゅう・・・が・・・だるい。」

陽香は俺を見つめて囁く。

「悪かつたな。あんな方法をとつて。

あれしか、ここへ行く方法がなかつたからな。」「めんな、本当に。」

俺は陽香を見つめて謝る。

「やっぱり・・・」「洞窟なのね・・・私・・・全く覚えてないわ。」

・

「意識を完全に失つてたからな。

・・・しづらいたら洞窟の中へ行くから今のついで休めよ？ 陽香  
もラルも。」

俺はそう言って陽香とラルに視線を向ける。

陽香は返事をしたがラルはしない。

俺は立ち上がりつてラルの傍に寄つた。

「・・・」

「・・・ええ。」

俺はラルの顔を覗き込む。

するヒラルは目を閉じて寝息を立てていた。

俺はラルを撫でて傍に腰を下ろす。

陽香は俺の傍までふりふりとした足取りで近づいてくるから慌てて俺が受け止める。

「まだ歩くな。俺なにしてるから。休もう、な？」

俺はそつと阳香を抱きながら地面に横になる。

「俺も寝るからな？」

俺はそつと阳香を抱き寄せる。

「・・お休み

阳香がそつと阳香を抱き寄せて目を開じた。

俺もそつと眼を開じて眼を閉じ眠りについた。

「あ

## 第三十一章 道は己の力で切り開け

皆が目を覚ましたから陽魔はラルと陽香を引き連れて洞窟の中を進んだ。

・・明るくなつていぐ・・まるで俺たちを導いているかのよつだ。

俺は不意にそう思った。

「陽香・・大丈夫か?」

俺は多少疲れ気味の陽香に問う。

「・・ええ。」

陽香は言つ。

だが少し疲れているよつだ。

俺が運んでやろうかな・・・

と思い、俺がそれを言おうと思つたとき

“ゴーパ、ゴーパオオ”

と、音を立てて地面が揺れた。

ピキピキピキッ

そんな音を立てて次々と地割れが起きた。

なつ、なんなんだついつたい！？

俺はそのことに動搖した。

ラルも陽香も動搖している。

俺はすばやく陽香を抱きラルも片手に抱いた。

そのとき、今まで以上のことが起きた。

洞窟の奥からたくさん岩が転がってきたのだ！！

「！？」

俺はそのことにびっくり仰天。

おいおいおい、こんなことってあるかっ！？

地割れで地面が割れたのにもかかわらず岩はその中に落不はしない。  
それに加え意思があるかのような動きで俺たちのまうに向かってくれる。

俺はいったん自分の傍に陽香とラルを置き、  
妖の風を呼び出して岩を切り裂いて粉々に砕いた。

シュツシュツ・・スペパン。

そんな感じで。

そしてそれを何度も繰り返すうちに岩は転がつてこなくなつた。

「一体何なんだつたんだ・・・。  
まあいいや。とりあえず進むか。」

俺は独り言のように呟いた。

俺は呆然と俺の傍にいる陽香とラルを抱き上げて奥へ進んだ。

少し奥に進むと、次は大木が道を通せんぼしていた。

「あー行き止まりだな。・・・」

俺はでっかい大木を見上げて呟つ。

「私・・・やる。」

ラルが俺と陽香にぼそりと呟いた。

「じゃあ頼む。」

「頑張つて。」

俺が言つて陽香も呟つ。

「うん」

ラルが領き、呪文を唱え始める。

「雷よ、打ち消せ！！」

ラルが強く言つたその言葉で大木は一瞬にして消え去つた。

ダーン！――シユールルルル・・・・・・

と言つよつな音を立てながら。

「さすがだ。・・サンキューな。」

「すゞいわ。」

俺と陽香はラルに言つ。

「・・・・。

これで進める。」

ラルは俯いて言つ。

言葉は静かで小さくが少しうれしさも混ざつたよつて聞こえた。

俺たちは大木を消し去つた後洞窟の中を進んだ。

進んだけれど迷いが俺たちには生じた。

分かれ道になつたからだ。

選択肢は・・右か左か真ん中か。

そのどれかである。

「どうぞ聞こへ。」

俺は誰こと言ひよつて聞いた。

「・・・」

「真ん中。」

ラルは無言で陽香はまつまつと言ひ。

・・真ん中?

「陽香、それはなんでだ?」

俺が問うと、

「・・右も左も幻覚だからよ。」

と、答える。

幻覚?・・・どう見ても普通の分かれ道な気がするなあ。

俺は納得がいかないまま

「じゃあ、真ん中を選ぶか。」

と、言つて真ん中を選びその道を進んだ。

その道も少し進むと分かれ道があつた。

「これはどうする?」

俺が聞くと

「・・・」

と、二人は答えない。

「幻覚じゃないことなのか?」

俺が聞くと

「そうよ。だから分からぬ。  
・・でも、右に引き寄せられるの。」

と、陽香が答える。

「そうか。なら右に行くか。  
右が違つたら戻ればいいんだからな。」

俺はそう言つて二人を促す。

そして右を選んで進んだのだった。

すると急に霧のよひなものがかかるた。

「ん?」「

「?」

「・・・」

俺は、ん?

と首をかしげ立ち止まつラルは無言で首をかしげる。  
陽香はたたずんでいる。

「陽香?」

「・・・」

俺は声をかけるが返事がない。

「?」

俺もラルも?が頭に浮かぶ。

「・・・私を・・・呼んでいる・・・いかなくちゃ」

突然陽香が言い出し霧がかかつているのにもかかわらず前に前にと  
進んでいく。

「お、おいつ」

俺が呼び止めても全く見向きもせずそのまままた歩いていく。

陽香の姿はあつといつ間に見えなくなってしまった。

陽香・・ビニにいったんだッ

俺たちも陽香が見えなくなってしまったほうに向かって歩いているとき

ガタツ・ズリツ・ズザズザズザアー・・・・・・

といつ音が洞窟に鳴り響いた。

「...?」

「...」

陽香つ。お前のかツ！？こんな顔を出したのは！？

「陽香あーーー！」

俺は叫んだ。

だが返事は返つてこない。

「くそつー！」

俺は舌打ちしたい気持ちに駆られた。

「・・霧が邪魔ツ

ラルも悪態をついた。

「霧が陽香を…・・・仕方ない霧を吹き飛ばす。」

俺は言った。

「これは普通の霧じやない。」

ラルが悔しそうに言ひついで。

「ああ、分かってるや、そんなこと。  
だが戸惑つてる場合じやない。」

俺はそつと言つて、風を喰ふだす。

「霧を吹き飛ばせッ…・・・」

俺は叫び霧を吹き飛ばした。

するとそこには見えたのは…・・・なんとそこが見えないくらいの高さ  
の崖だった。

## 第三十一章 道は己の力で切り開け（後書き）

これから更新が遅くなります。

できるだけ早く更新できるよう努力しますがご了承ください。

## 第三十一章 巖の下にある物

俺の風で一瞬霧が切り開かれた。

そこに見えたのはそこが見えない巖である。

「へえつ。陽喬はここで落ちたのか。俺たちも行くぞ、ラル。」

俺はそつとラルをついて巖から飛び降りる。

ピコカー

落下の速度は意外にも早かった。

風を切る音が耳元に聞こえる。

俺は風を操り下へと急いだ。

そうしてくる間にもまた霧がかかった。

「これは普通の霧じゃない

ラルが呟く。

「分かつてゐるや、そんなこと。わつきも言つたる?」

俺がラルに言い返す。

「言つたけど・・・」

ラルは押し黙つた。

俺は風を操り、霧を何度も吹き飛ばした。

何回も霧を吹き飛ばし、安定感を保つて落下するのは多少きつかつた。

そして地面に降り立つた。

そこで見たものはーー！

「陽香っーーー？」

俺は叫んだ。

なんと陽香は体中に深い傷を負つてまで降りた地の向こうに行こうとしている。

陽香の向こうにあるものは凍つた泉に浮いている大きなクリスタルだつた。

クリスタルは淡い輝きを放つて陽香を引き寄せているのだらう。

体はもうぼろぼろで限界のはずなのに陽香は顔を歪ませながらそのクリスタルに近づこうとしている。

「陽香ーーー」

俺は陽香を後ろから抱きしめて動きを止めた。

陽香・・もういい・・もういいよ。

「は・・な・・・・し・・て・・」

俺が抱きしめても尚ほこいつとする陽香。

なぜそんなに引き寄せられているんだ。  
そこまでして陽香を苦しめる必要がどこにある。  
陽香・・もういい、やめてくれ。

「陽香・・もういい。 戻ろ。」  
この場から離れよう。」

俺はそう言つて陽香を抱き上げた。

「は・・な・・して・・・・いか・・せて・・・・」

陽香の口から声が漏れるが体は俺にされるがまだ。

俺はクリスタルのほうを見た。

淡い輝きを放ち俺を嫌悪している。

俺にはどうして陽香が引き寄せられたかが分かつた気がした。

俺と陽香は 表裏一体 だ。

俺たちは正反対の能力の保持者だ。

だから俺は寒いのが苦手。  
だから陽香は暑いのが苦手。

つまりそういうことだ。

俺を嫌悪するクリスタルの力は陽香と同類の力を持っているのだ。

だからきっと、

俺をひきつけるクリスタルがあるとすればそれは陽香を嫌悪するだ  
らう。

それと一つ思ったことがある。

武器を作るためにはこのクリスタルがほしいのじゃないかと。

「クリスタルよ、オマエに意思はあるか？」

俺はクリスタルに問いかける。

「・・・・」

クリスタルは淡い輝きを放つだけだ。

「意思があるなら答える。」「

俺がそう言つと

「私は意思を持つ。ゆえにこの女を呼び寄せた。」

と、答えた。

「それはなぜだ？」

俺が問う。

「我とその女は同じだ。  
いや、その女の前世が我と同じだ。  
ゆえに我はその女の武器となるにふさわしい。」

と、クリスタルは淡々と言つ。

そつか・・武器には自分と同じ波動を持つ鉱物がほしいのか。

「呼び寄せた理由がそこにあるならなぜ陽香を傷つけ暗示をかけた  
？」

俺は怒りに満ちた声で問う。

「暗示？ 我はその女に呼びかけただけだ。  
暗示などかけてはいない。」

クリスタルは答える。

「呼びかけ、か。じゃあこれは陽香に対する試練と言う奴か？」

俺は聞く。

「そうだ。ここまで来るのにいくつかの喚問があった。  
それを潜り抜けたら我はその女に従おうと思つた。  
その女の前世の生き[写]しだ。」

唯一違うところと言えば、前世は水を好み霧を嫌った、そしてその女の好み水を嫌うところだけだ。だが、私は気に入った。

ゆえに私はその女の武器となるだろう。」

クリスタルはそう言って小さくなり陽香の額にくつづいた。

「言い忘れていた、私は汝が嫌いだ。」

クリスタルは最後にそう言って輝きを失った。

「俺は陽香は好きだがクリスタルは嫌いだ。あんた」

俺はそう言い放った。

「終わったみたいだね。霧が晴れた。」

ラルはそう言って上を見上げた。

俺は陽香を横たわらせ、苦手な能力だが癒し系の呪文を唱えた。

「ラル、少し手伝ってくれ。今の俺の魔力じゃ足りない。」

俺はそう言って助けを求めた。

「私・・専門外。」

ラルはそう言った。

「頼む。陽香が危ないんだ。専門外でもできるだろう?」

増幅するだけでいい。頼む。

陽香が嫌いなのは分かつてゐる。だが、俺のためと思えば悪くないだ  
ろ？」「

俺はそつと陽香に手をかざした。

「・・・。しかたない。」

ラルはそつと俺の手に自分の前足をかざした。

陽香が光に包まれた。

その輝きがラルのおかげでより輝きを増した。

俺やラルに汗が染み渡つてきた頃、陽香の傷は徐々にふさがつてい  
つた。

俺がもう大丈夫だと安心すると陽香から光が消え去つた。

ラルは肩で息をしていた。

「サンキューな、ラル。」

俺はラルをひざに乗つけて頭を撫でた。

「・・・もつと・・・なでて・・・」

ラルが小さい声で甘えた声を出す。

ラル・・・可愛いなあ。

俺はラルによしよしと頭を撫でて抱いてやつた。

「ラルの毛皮がふさふさしていて気持ちがいい。」

「さつきの、」褒美は何がいい?」

俺は聞いた。

「このまま続けてくれればいい・・・」

ラルは気持ちよさそうに口を開じて小さく言った。

「ああ、わかった。」

俺は頷いてラルを胸元に抱き寄せて頭を撫でたり背中を撫でたりした。

## 第三十四章 鉱物の役目

俺は陽香が意識を取り戻すと体力を回復させた。

どうやら俺の尻尾は癒す効果があるみたいだった。

「俺の尻尾、そんなに効果があるのか？」

俺の尻尾に触る陽香とラルに不本意ながらも聞いてみた。

「すぐ効果があるわ。」

「癒される。」

二人は目を閉じて癒されているような表情をする。

俺の尻尾・・・邪魔だと思つてたが案外役に立つじゃんか。

俺は自分の尻尾の存在価値を認めた。

今まで人間だつたせいか、いや、目の色が変わつても能力が目覚めても実感がわからなかつた。

だが、この世界に来て、尻尾が生えて・・認めたくなかったけど認めなければならなかつた。

そしてこの尻尾の存在がどうにもなじめず嫌だつた。

だが、今、陽香を救えて、みんなの糧となつてゐるならば、認めざ

る終えない。  
むしろ喜ぶべきだ。

「そりか・・」

だが、心とは裏腹になんかどうもむなしい声が出てきた。

たぶん、今、活躍してるのは俺じゃなくて俺の尻尾だからだと思う。  
俺は陽香の体力、魔力、ラルの・・以下同文を感じ取った後、  
尻尾を陽香たちから放した。

「次、行くぞ。陽香のクリスタルは手に入れたんだ。  
次は俺のだ。」

俺はそう言つてまだ不服そうな陽香を立ち上がらせた。

「あのクリスタル、ここにあるのね」

陽香はそう言つて自分の額を指し示す。

「ああ。」

俺は頷いて、陽香とラルを抱き上げた。

「行くぞ。」

俺は 妖の能力、風 を操つて崖の上を田指した。

そして分かれ道のところまで戻った。

陽香たちを降ろして俺自身が呼び寄せられる方へ歩いていった。

「 いじだ

俺は指し示して歩き出した。

俺を呼び寄せる力が進むほど強くなつてゐるのがわかつた。

そして陽香を拒んでこるゝとも。

そして陽香は耐え切れずその場にしゃがみこんだ。

「 お、大丈夫か?

・・無理もなきか。

これは陽香を拒んでいる。」

俺は眩せ、しゃがみこんで陽香を覗き込んだ。

陽香の顔は苦痛で歪まされていた。

俺は・・・拒まれなかつたのに・・・。

俺は心の中で眩きながら、尻尾で陽香を癒した。

尻尾にラルも寄り添つてきた。

俺の尻尾によつて陽香の具合はよくなつたがこれ以上先には無理に近かつた。

ラルももしかしたら拒まれるかもしれない・・・

俺は自然とそう思った。

獣といつてもラルは幼い。

そして雷は炎と似た境遇にあるけど俺のとは異なるはずだ。

そしてラルの放つ波動・・神気は非常に弱い。

たぶん、その神気さえ強ければ受け入れてくれるかもしれない。

神気・・それは獣特有の波動であり、

神の放つ氣でもあり、獣は最も神に近き存在なのである。

俺は

「ラル、陽香、今、結界を張るから安心しろ。」

と、言って二人の周りに俺の結界を張り巡らせた。

これなら、拒まれないだろう。

俺は陽香を抱き上げて再び歩き始めた。

ラルも表情が緩んで俺の傍を歩いた。

俺のゴクわずかな範囲にその結界はまとわりついて動いていた。

「いじか。」

俺は呟いた。

少し暑くなつたかと思つたとき、道は開けた。

そしてそこは熱気が漂つマグマの中だつた。

この洞窟どこまでつづいてんだよ・・・

ふいにそう思つた。

俺は暑さと俺を呼び寄せるものに苦痛を感じていた陽香とラルをその場に残して結界を強化した。

「ラル、陽香とそこにいてくれ。

俺はいつてくれる。」

俺はそう言つて少し崩れている段差を飛び降りて自分を引き寄せるクリスタルの元へと歩み進んでいった。

途中、道がなくなつた。

といふといふ足場があつたから

ぴょん、ぴょんと、飛びながら進んだ。

奥へ進むたびに熱気と引き寄せる力が強くなつた。

「お、あつた

俺は呟いた。

俺が立ち止まり、その先を見ていた。

それは・・マグマに浮かぶ 紅いクリスタル。

淡く紅い輝きを放つてゐるクリスタルはルビーを思わせるほど紅かつた。

「お前に、意思はあるよな？」

俺はクリスターに聞いた。

「あるに決まっている。

そこのお前、あれはお前の連れか？」

クリスターは俺に問う。

「ああ。何故拒んだ？」

俺は聞いた。

「拒む？

それはお前の想い込みだな。

我はお前を呼び寄せたかつただけだ。

あやつらには耐えられなかつたゆえにあの病状を起こしたのだ。」

クリスターは淡々と述べた。

拒んでいたんじゃなかつたのかあ・・・  
よかつた・・・いや、それはよくなかったかな？

「 そりゃ。」

じゃあ、なぜ、陽香たちの体調を崩させるほどの力で俺を引き寄せた？

俺は少しの気でも感じれば、俺は気づいた。」

俺は眉をひそめて聞いた。

「 我が気づかなかつたのだ。私は洞窟に来たものの気配を感じたがそれがお前なのかは理解できなかつた。本来のお前ならば、ここまでする必要はなかつたのだが・・。今のお前は力を一段階封じられている。」

クリスタルは述べた。

「 封じられている？」

俺が、か？と、付け加えて聞く。

「 そうだ。お前は封じられている。

今のお前の姿は第一段階だ。

完全なる力を解放するには我で作った武器が必要とする。

第一段階はきつかけと我的力添えが必要だ。」

クリスタルは淡々と静かに述べる。

つまり・・

俺の力を解放するにはどっちにせよ、クリスタルが必要なんだな・・ん？第一段階？・・やな予感が・・・・

「そりゃ。俺は鬼の能力がもつとも優れているらしくからな。  
そのときに全ての力が引き出せるわけか。  
で、今、俺の姿は第一段階って言つたな？」

俺は内心動搖しながら聞いてみた。

「左様。

お前の姿は仮の姿でしかない、しかもその初段だ。  
お前の姿は力の大きさに対応できる器となるためそのつど変化する。  
お前は我が必要だ。それは分かる。  
だが、我を扱う理由が分からぬ。  
お前は我を何のために使つ？」

クリスタルは俺を伺つよつに聞いてきた。

「俺は・・陽香たちを守りたい。  
守つて前世の俺がしたかったことをしてやりたい。  
前世の俺が残してきたものを守りたいからだ。  
正直・・体が変化するのは堪えるが。」

俺は強い意思を込めたまなざいで答えた。

クリスタルに言つたことは全部本当のことだ。

嘘偽りは何一つない。

「そりゃ・・、お前はお前の前世とよく似ている。  
体の変化を嫌うところもな。  
だが、それは仕方がないことだ。  
我はお前を気に入つた。

「我を心置きなく自分のために使つといい。」

クリスタルはそう言つて俺の額に収まつた。

「ぐつ」

俺はクリスタルが体に埋め込まれるような感覚を感じてよろめいた。

よろめきひざをついた瞬間、体に変化があつた。

「あああつああ！」

俺は体の異変に驚いた。

俺の腕には豹柄模様が刻まれ、おまけに耳まで豹の耳に変化した。

歯も牙に変わつた気がした。

・・・これが第一段階つて奴か・・・?

俺ははあーとため息をついた。

力も殺氣より格段に上がつた氣がしたのはそのせいだろうが、まさか、ここまで体が変化するとは思つても見なかつた。

ああ”人間から遠ざかつていくう～

おれはそつ落胆した。

能力が目覚めた直後人間じゃなくなつるのは分かつてゐるけど

・・元は人間だぞ？

少しは原型にどどまつてほしいぜ・・・・

それにもしても・・

俺がクリスタルで作つた剣を使って

真の力を發揮したら一体どんな体になるんだろうなあ～

俺はもうこれ以上、

異常な体になることはできるだけ避けたいと思つたのであつた。

そして陽香たちの元へ戻つたのであつた。

## 三十五章 帰還その1

陽香たちのところへ戻ると陽香もラルも驚いていた。

はあ。

俺はため息をついた。

「俺の額にこれが埋め込まれたせいだ。  
不本意だが今の俺は全力を発揮できないうらしい。  
この姿に驚くのも分かる。  
俺も驚いたからな。  
さあ、かえるぞ」

俺は一方的にしゃべり、陽香をひょいと抱き上げた。

そしてもと来た道へと歩く。

ラルは俺をまじまじと見ながら

「陽魔の本来の姿・・もしかしたら豹かもしれない・・」

と、小さく呟いた。

「ラル、それが本当だとしても俺をそんな目で見ないでくれ。  
俺は人間なんだ。

と言つよりだつたんだからな。  
とにかくさつと帰ろうぜ」

俺はそつとラルを抱えあげた。

「…」

ラルは何の抵抗もできずに田を見開いたままである。

俺はすたすた歩き洞窟の中を突き進む。

そして俺たちが倒れていたところにたどり着いた。

れて・・じからまた水があるわけだが・・

同じ方法でやつちやおつかな?

俺はそつきから一切何もしゃべらない陽香を見て思つた。

そつするか。

陽香をいつたん降ろして向かい合わせにした。

何の抵抗もしない陽香にするのもなんだか気が引けるがこれも陽香のためだ。

しかたない。

「陽香、わるい。」

俺はそつき、陽香の唇に自分のそれでもうひと口んだ。

「んっ」

陽香は俺を抱もつとした。

だが、俺は拒む力よりさうに上の力で押さえつけ、触れるだけのキスから深いキスに変えた。

陽香の口の中で舌が絡まりあつ。

「ん・・・んつんう・・・

陽香は声を漏らすがその声で俺は理性を失いそうになつた。

もつと、乱したい・・・

俺の中で欲情があふれてくる。

呪文を使つこと忘れ俺はキスに夢中になつた。

触れ合づ唇、絡まりあづ舌・・・陽香の甘い声

それらが俺を狂わせる。

そしてそのキスに陽香は力を奪われたかのように俺に体を預けてきた。

俺はぐつたりした陽香の体を支え、唇を離した。

「ん・・・はあ・・・んんつ」

陽香は息を吸う。

そしてその後に合つた一瞬の隙に俺が口をふせぎつけた。

そして呪文を解放させた。

その瞬間、陽香は氣を失い、立つていられなくなつた。

俺は陽香の体を受け止め、肩で息をしながら泉へと向かつた。

そして俺はラルに水を防ぐ粒子を纏わせた。

俺は指先で弧を描き、浮き上がつた輪をラルにかぶせるよひに包んだ。

ワイン・・・ホワン

そのときに発した音は一瞬で消え去つた。

「・・・ありがと」

ラルは俯いて言つた。

「俺や陽香のためにラルはここにいるんだから助けるのは当たり前さ。

さあ、いくぞ、早くしないと陽香が目覚める。」

俺はラルと陽香をかついで水に飛び込んだ。

ザブーン

そして水面まで一気に突き進んだ。

そして水面から顔を出した。

そのときだった、何かつぶてのようなもので攻撃されたのは。

バシュシュシュシュツ

俺は風でガードし、一人を担いで浮き上がった。

「またおばさんか。」

俺はうんざり口調で相手に言った。

## 第三十六章 ルリモでもこつこつ邪神卿

「おばさん、いいかげんあきらめなよ」

俺はガードしながら言ひ。

おばさん・・氷歌がまたもや現れたのだ。

しつこすぎだな。

俺はガードの強化をして防御を固める。

両腕がふさがつてゐるから攻撃は不可能だ。

「だれが、あきらめるのですか。」

「わざとあなたたちが倒されてくれればいいのよ。」

おばさんはそういうながら氷のつぶてを俺たちに向けて襲わせる。

パキキキキン

ガード壁に当たリ氷が碎け散る。

「つ・・むひして」

ラルが申し訳なさうに言ひ。

「無理だな、ラルだつて体力はほとんどないだろ?」

俺はラルに言ひ。

「・・・」

ラルは無言だ。

言ひ返せないのかもしだれない。

事実なのだから

んーうひつときつへなつてきたか・・・

俺はひとつでこそう思いガードしながら地面のほうへ行くが  
おばさんガ邪魔にて降りられないし、地面も凍らされて立てない状  
況にいる。

「んーうひつときつにもできないなあ

俺は呟いた。

すると、額から声が聞こえた。

「我を使え。」

と。

「一。」

俺は田を見開いた。

「 我がお前に力を貸してやる。」  
鬼の能力を発動させる。

「 我の力で手にしなくとも操れるよつこにしてやるのだ。」

クリスタルは言った。

「 ああ、助かる。」

俺は頷いた。

「 剣よ！！」

俺は剣を呼び出す。

ウ”オン

剣は突如姿を現し、俺の前で浮かぶ。

「 さあ、お前が操れ。」

クリスタルは俺を促す。

すると、疲労感は感じなくなり、  
力が・・パワーが体中を駆け巡った。

力が体にみなぎり染み渡る。



## 第三十六章 パリまでもこつつい邪神卿（後書き）

短くて「」ねんなさい。

誤字脱字があつたら報告してくださいね」といふ感じです。

感想お待ちしています。

## 第二十七章 退散

俺は剣をあやつり、氷歌を攻めた。

キン一キ”ン！-

氷歌の氷と音が響きあう。

俺は自分が剣を持つよつの感覚で動かし始めた。

「ひつ」

氷歌は舌打ちする。

そしてどどん追い詰められていく。

いや、追い詰められているよろこび見えた。

グイ

氷歌はこのとき、剣の柄をいきなり握った。

「俺のーー！」

俺は叫ぶ。

ウ”オン”

するとその声に反応して剣から炎があふれ出した。

ブウワアツアアア

「あつアチチチチ！……！」

氷歌は握っていられなくなり、手を離した。

その隙を見て

「スキアリ！…！」

と、叫び、相手のみぞおちに剣を突き刺した。

グサッ

そして俺は剣を抜いた。

「うぐっ”・・・・げほげほっ」

氷歌はうめき、血を吐く。

うわっ、赤じゃない、何だあの色つ

その血は赤ではなかつた。

それは・・・青紫のような氣味悪い血であつた。

「うつ、じんかいは・・・このくんこ・・・じておくわ  
・・おぼえてらっしゃい」

いつもよつ弱々しい言葉を吐いて氷歌は消えた。

「これでひとあんしんだな」

俺はそう呟くと、剣を戻して地に降り立った。

## 第三十七章 退散（後書き）

今回もすこしく短くなつてしまつました。  
すいません。

## 第三十八章 帰還して待ち受けていたものは——

俺は陽香を抱えて、イールのいる倉庫のもとへ帰った。

倉庫が見えた先でゼレナルが現れた。

「・・ようやく帰ってきたな。  
手に入れたか?」

「ああ」

ゼレナルの問いに俺は頷く。

「ん——」

唐突に陽香が意識を取り戻した。

「だいじょうぶか?」

俺は顔を覗き込む。

「もう一ついたの?」

陽香は目を瞬きしながら聞いてきた。

「ああ。」

「それより——」

「大丈夫よ。」

それより、降ろしてくれる?」

俺の言葉をさえざつて言ひ陽香。

・・なんだかーー

俺に對して冷たくなつたのは俺の・・気のせいーーか?

「・・ああ。悪い」

俺は素直に謝り陽香をおうす。

「・・ラルもよくやつたな。  
もどつていいで」

ゼレナルが言つた。

「・・・

ラルは何も言わなかつたが、  
ちらつと俺のほうを一瞬見た。

「・・ラル?」

俺は戸惑つた。

なんだか寂しそうな表情をしてたからーー

「・・・

ラルは何も言わない。

「・・・ラルがいたいのならそのまま続ける。

・・で、着いたところで休む暇もなく悪いが――  
急ぎでしなければならないことが発生した。

とりあえず、話はイールのもとでするからついて来い」

ゼレナルはラルに言い放ち俺等に言った。

そしてゼレナルは倉庫の中に入る。

俺等も入った。

「やあ、久しぶり、二人とも。  
クリスタルは持ってきた?」

久しぶりにイールと会った。

コクン

と俺と陽香は頷いた。

「じゃあ、悪いけど早速くれないかな。

急ぎのこともあるし何より時間がもつたいない

イールは言った。

「分かった」

俺は頷くと力を額に集中させた。

クリスタルよ——俺の手に”

心の中でそう願い、  
手のひらに乗せるようなイメージをする。

すると

スポンつ

と音を立て額から抜けた。

そして俺の手元にクリスタルがあちる。

俺がそれを握り締めると同時に  
陽香もクリスタルを取り出した。

フラーーッ

陽香の体が崩れる。

とつさに俺は陽香の体を抱え込むよつとして支えた。

「大丈夫か?」

俺は聞く。

「平気よ・・

クリスタルを抜いたから・・だと思つかり・・

そういう陽香だが顔色が悪かった。

「顔色が悪い・・・」

俺は呟く。

イールが

「こんなときに無理をさせてごめん。  
だけどほんとに急ぎなんだ。  
陽香はゆっくり休んで。  
ゼレナルは陽魔に話してくれ。  
僕はクリスタルの改良するからーー」

と、言つて倉庫の奥にさつていった。

「うわちだーー

ゼレナルはそう言つて、

陽香をはじめて寝かせた部屋へと向かつた。

俺は陽香を再び抱えてその部屋へ足を踏み入れた。

懐かしいーー

部屋の中を見て思った。

そして陽香をベットに寝かせた。

「私は——」

「平気じやないだろ？」

頼むから、休んでいてくれ

「俺は言つた。

陽香はいつも無理をする。

水のことでも体にも精神的にも負担をかけた。

できれば今は休んで欲しい。

「・・・・

陽香は俺を見て黙つてしまつた。

唐突にゼレナルが——

「陽魔、部屋を変えんが。

陽香はそこにしてる

と、言つて、部屋を出た。

「分かつた。

ラル、こいつにおいで。

陽香・・無理はするな、休めよ?」

俺はそつと出て、部屋を出た。

陽香の寝ている隣の部屋に移動して俺とゼレナルは話した。

「急ぎでいつづることだ?」

「・・・龍蛇が大きな行動に出た」

ゼレナルは静かに言った。

「なーーそれはどうことだ?」

「木々たちによれば巫女を一人手に入れられてしまったと判明した。」

「・・・分かるように話してくれ、ゼレナル」

俺は無残な思いで口にした。

何が何やらで意味が分からぬ。

巫女を手に入れたってどうこと?・?

「・・・。

以前、龍蛇がこの世界を滅ぼそうとしている、とはなしたよな?」

「ああ」

「この世界を滅ぼすと口で簡単に言えるが簡単なはずがない。  
滅ぼすにはそれなりの力が必要る。」

「そこで目をつけたのが巫女の力なんだ」

「・・・。

巫女の力ってそんなに強いのか？」

「当たり前だ。

巫女は神の愛娘。

神・・天を支配する強大な力。

それを巫女は加護として譲られている。

天は地上をも支配し、二人の巫女を地上に配置した。

一人は、白銀の巫女、もう一人は、漆黒の巫女。

その二人を配置したのだ。」

「龍蛇は・・どっちの巫女を手に入れたんだ？」

「・・漆黒の巫女だ」

「それまたなんで？」

「さあな、俺にはわからない。

ただいえることは俺たちには時間が無いことだけだ」

「そつはいうけどさあ、おれたちになにをしろと?」

「白銀の巫女を探し出し、

漆黒の巫女を取り返し、龍蛇を滅ぼし、世界を元に戻す。」

ゼレナルは淡々と言い放った。

“し”の三連発じゃねえかっ―――!

のび下まできたそれをぐつと抑える俺。

「・・・」

で、その田舎の巫女ばべこ？」

俺は聞いた。

## 第三十八章 帰還して待ち受けていたものは——（後書き）

久しぶりに書きました。

スランプ脱出！！

ほんとに呼んでくださる皆様に大変申し訳なかつたです。  
これからも頑張りますのでよろしくお願いします。

## 第三十九章 巫女の居場所

「それは 水晶の洞窟の奥底 だ。」

ゼレナルが答えた。

「・・・、龍蛇たちより先に救い出せ・・・と？」

俺は眉ひそめ聞いてみる。

「そういうことになる。

たとえ、龍蛇たちが先に来たとしてもおそらくは手に入れられないだろうがな」

「どういふことだ？」

先に来たとしても手に入れられないって・・・

「今、白銀の巫女は封印されている。

それを破ることは龍蛇たちにはできない。  
だから漆黒の巫女を狙つたんだ。

漆黒の巫女は攻撃的で並ならぬ能力を持つていたが  
龍蛇には及ばなかった。」

ゼレナルは淡々と説明した。

「龍蛇も並ならぬ能力を持つていてるからか？」

「それもあるが、おそらく能力を使う時点では

龍蛇も苦戦を強いられるだらう。「

「だつたら—— 一体どうやって捕まえたんだよ？  
何か汚い手をつかったのか？」

「おそらくは呪いをかけたんだろうな。  
それが、邪氣で蝕んだか・・・だな。  
神の愛娘は天からのいわば最強兵器だからな、  
邪氣で操られさえしなければそんな簡単に手出しができない奴だ」

「兵器つて・・。

巫女も一応生きてるだろ？

道具扱いなのか？この世界で巫女つてものは？？

なんだか少し怒ってきた。

兵器つていわれたら道具扱い同然だらう？

それはそいつを侮辱してるようなものだ。

俺だつて前世の記憶を持つていろだけで・・・道具扱いされたら  
それこそ、俺は激怒する。

・・それでも少し抑えていたただけマシだと黙つ。

「」で声を張り上げたら陽香に迷惑かけまつし、な。

「道具扱いなんかしていいない。  
もっとも、そんなことがいつてられたのは

幽魔がいたころの話だが。

死んだ後からはそれなりにいろいろあったから手助けしてくれると言え怪しいものだ」「

ゼレナルは呟くよつて言つ。

「それなのに、巫女のところへいかせるのかあ！？」

俺は目を見開く。

「オイオイ、絶対やばいぜ。

俺、そこで殺されかねんぞ。

「お前が行けば白銀の巫女も手を貸すはずだ。漆黒の巫女の方がつかまつたからには助けると言つ出すはずだからな」

「俺が？？」

「お前の前世は幽魔だろつ。

幽魔は巫女とも面識がある。

それと同時に幽魔は巫女に借りがあるからな。とにかく、陽香が回復したら出発だ。

俺もついて行くから、それなりにお前も休めよ？」「

「あ、ああ

その言葉に俺は頷く」としかできなかつた。

はつきりこつて、俺は、宿命がありすぎると思つた。

前世が幽魔だからってこんなに大変な目にあつとはな。

・いや、幽魔もそれこそ大変だつたんだろうな——

## 第三十九章 巫女の居場所（後書き）

ちょっと短い・・・かな?  
すいません、遅くなりました。  
次も頑張りますへ

## 第四十章 休息

俺は陽香のいる部屋に戻った。

すると、陽香は目を覚ましてしまった。

俺は陽香の寝台の傍のいすに座り・・

「起こしたか？悪かったな」

俺は謝る。

「陽魔は悪くない。

その前から起きていたわ。  
だいぶ回復したし」

陽香は上半身を起き上がらせて言つ。

顔色・・・悪いじゃないか。

「そりか。

だが、顔色悪いぞ？」

俺は陽香の頬に手を伸ばし、触れる。

「つ・・・。」

ピクンと陽香が震えるが・・  
何事もなかつたかのように俺の手に陽香は手を重ねる。

「……」

俺のほうが驚いた、跳ね返されたと思つてたから。

だつて、この『じろ冷たかっただろ？』陽香は俺に對して……。

「平氣よ、・・それにしても陽魔の手は大きいのね。」

「え？ あ、そ、そうかあ？」

戸惑いが声に出てしまつ俺。

手の『じじやないぞ、』陽香に手を触られたからなんだ。

「そりゃ。陽魔の腕に・・何度も救われたわ。」

なんだかいつもより優しい口調の陽香。

そのことに慣れているはずもない俺はどう反応したらいい？

「だ、だつてや、守ることに必死だし、

そ、それに、俺、何度も救つたか？ 陽香を。

俺、陽香が傍にいるだけでも救われてる気がするのに

ううたえる俺は句とか言葉をつむぎだす。

「陽魔が傍にいるだけで私だつていつも救われてるわ。  
安心できるし、頼れるし、守ってくれるし、

なにより私を心配してくれる優しい、救われる

陽香の口調は優しいを通り越して  
俺を褒め称てる気がする。

「よ、陽香あ？大丈夫か？  
いつもとなんか違う気が・・」

俺は陽香の額に手を当しようとするが、陽香は俺の手をつかんだ。

陽香の表情はなんか火照ってる。

「大丈夫よ、・・陽魔の手、冷たい・・。  
ひんやりする、安心する・・陽魔、傍にいて、いじしているだけで  
いいから」

俺の方へと身体を陽香が寄せてくる。

「お・・おこつ」

陽香が落ちそうになつたとき、俺は陽香の肩を抱くと・・熱かつた。

ぴたつと、身体が密着する。

すると、陽香のぬくもりが・・いや、熱が伝わってくる。

「よ、陽香つやはしづき大丈夫じゃなこって、おとなしく寝よつ、な？」

俺は子供をあやすよつた口調で聞く。

「こんな態勢だと、俺・、心臓バクバクでビリビリかなつちゅいそう。

「だいじょうぶ・・だわ・・で・・も・・つああれえ・・え？」

俺に身体を預けてくる陽香。

自分で自分を支える力はないようだ。

「大丈夫じゃ、ないだろ。

熱あるし。俺、ゼレナルに解熱剤もらってくらうか、おとなしく・・・」

「よつ・・ま、そばに・・いて。  
いつしょに・・いて。薬なんていらない・・陽魔が・・  
そばにいるだけで・・いい」

陽香は熱で浮かされていた。

それでも必死に俺に言葉を伝える。

陽香・・。

俺、自分を抑えられなくなりそうだ・・。

「陽香、分かつたから、力を抜け。  
俺も添い寝してやるから」

俺、今そいつをやばいこといわなかつたか？

「ん・・・そばにいてくれるなら・・・」

「ああ、」

俺は陽香を寝台に寝かせ、その中へ俺も入る。

すると・・

おまつり

陽香は俺に抱きついてきた。

「～～～」

今日の陽香はぜつたいおかしい・

普通にこんなことしないはずだ。

熱のせい? ? そつだよな? 陽香の本心じゃないよな?  
違うよな?

違つたら違つたらで悲しいけど、思い切つたこと普通はしないもん  
な?

「陽香・・」

俺は毛布をかぶつて、陽香の背元腕を回した。

なんか、熱下がった後に何か言われそつだが、  
このやい、そのときほそのときだ。

「ん、あつたかい・・」

陽香は気持ちよさそうに俺の腕の中で眠りについていた。

うつとりしているその顔が俺を興奮させる。

「熱なんて俺が吹き飛ばしてやるからな・・」

そういうながら俺は田を閉じ、隣りに立った。

陽香といつしていてなんか罰が当たりそうだと  
いまさらながらに思う俺の休息だった。

## 第四十章 休息（後書き）

えと、熱で優しくなつた陽香ちゃんでした。

そしてそれにうろたえる陽魔くん。

はつきりいつて現実ではこんなことないですよね。

小説だからこそその展開？かな。まあ、そんなこんなでまたの機会に。

## 第四十一章 いつものイール？

陽香が熱を出して早数日。

意外と遅く感じるが…。

ばたんつ

イールが倉庫から出てきた。

「できたよーおーーーお、」

「イール・・・!?

よひよひとイールが出てきた。

傍にいたゼレナルですら田を瞬ぐ。

ばたんつ

扉を開いた音と同じくして倒れるイール。

よっぽど、無理して作つたらしい。

倒れたのにもかかわらず改良品はしつかりもつっていた。

・ そこだけはしつかりものだな。  
そしてなんてすごい奴。

いきなり現れるのはこれで何度目か。

「イール、大丈夫か？」

田に隈ができるが・・？」

俺はイールに手を指し伸ばす。

「はあーつ、・・・」

ゼレナルは何故かあきれるよつたため息をついていた。

「ゼレナル・・?」

俺は半ばゼレナルに田を見やる。

「こいつって、それは日常茶飯事だ。  
隈なんていつでもできる。  
ないほうがおかしいといえる。」

ゼレナルはそうイールを見下ろし、述べた。

「は？・・初対面のときはなかつた気がするが

俺はそれを思い出しながら言つ。

「あのときは実験どひじやなかつたからな。」

「ふーん、そんなもんか

「そんなもんだ」

俺はいまだに不満を持つがいつまでもゼレナルと話してイールを起き上がらせるのに手間をかけたくない。

「ひむ

「陽魔・・たすかた・・あんがと

あんがとつて・・普段こんな言葉つかつたやつか?

「で、改良し終えたんだな?」

ゼレナルはイールの片手にもつ袋を見てそう聞いた。

「改良したから・・きたにいい、決まってるじゃんつ・・はあー、  
僕だつてなあ・・いろいろとかんがえてるんだよつ」

イールはなんかムキになつてた。

「で、改良品は?」

ムキになつたイール バーサス VS 冷徹なゼレナルだと、

いつまでたつても言い合ひは治まらない気がしたから俺は先を促した。

「・・やつやつ、これだよ」

そういうつてイールは袋から俺と陽香の分のを取り出した。



## 第四十一章 いつものイール？（後書き）

少し異なったイールになってしましました。

世の中人はこうも変わっちゃうのかなと、思いそう。

世界は自分で書いてるから少し口調が変わるだけでだれなのか何を言いたいのかとかわからなくなっちゃいます。

書き終えたあとも自分で読み直して確認はするけれどね。

いいたいことをいえないキャラ、

てれてムキになるキャラ

いじっぱりなキャラ

くーるなキャラ

人・・個性溢れる人って書くのは難しいー！

—

セールスやつてる人とかも案外書くのは簡単そうで難しそう。

ツンデレは案外書きやすいかも。書いててタノシー。

ネコみたいなどうぶつキャラも書くのは楽しそうかも。

この物語に合わないキャラも考えてこれからも登場人物ふやします。

ではこのへんで

## 第四十一章 改良品、その名も――――――！

「！」、これだ――――！

イールがやけにテンション高く叫んで取り出したのは・・

「腕輪・・か？これ」

俺はもつとすこものが出来るかと思つてた。

まあ・・いまわりの時代に  
俺を驚かすものはないだろうが・・。

その腕輪は腕にはめる部分に  
梵字に似た魔界の文字が書いてあつた。

おそらくはなにかの召喚術とかだらう。  
そんな気がした。

俺のは紅いクリスタルがはめ込まれていて

陽香は蒼いクリスタルがはめ込まれている。

「そつや。

武器もその中から取り出せるよつ  
いろいろ改造したんだからつ！

召喚術と意思開通の呪を刻むのはそういう時間がかかったよ。」

「ふうーん」

熱く語るイールをよそに俺は、  
本当にソレがしつかり力を發揮するのか  
疑問に思つてた。

ていうか、興味がない。・・アタリマエだが。

「その名も・・クリスタル装着輪！・・」

「そのままかっ！・・」

俺は熱く叫ぶ・・いや暑苦しく叫ぶイールに  
即座に突っ込んだ。

「・・・

なんかゼレナルも微妙にあきれてるような・・。

実は慣れてないのか・・コイツも・・?

「・・・まだ鎧メイルも、イヤリングも  
作り途中だからそれまでこれで待つてくれ！・・  
もつといいのだから！・・」

バタンッ

と強く閉めて彼は行つてしまつた。

俺の突つ込みにも負けず（・・いや、へこむる？）  
そう叫んで去つていった。

「・・俺・・どうすればいいか  
イマイチわからないんだけど・・・？」

ゼレナルに助けを求めるよひびきつと・・・

「・・俺に言われても、・・なあ。・・」

ゼレナルはなんだかいつもと調子がずれてた。  
よつぼどこえたんだな、イール作のコレが。（名前）

何も分からぬまま、俺はソレを利き腕にはめた。

ピカー——！

そう輝いて俺の腕にしつかりと馴染んだ。

と、・・とにかく、イールが完成させるまで  
体力回復、特訓にいそしもうと、

気長に待つことじよつと思つ。

・・次は・・名前聞きたくない・・なあ。

そう内に秘めた彼に対する思い（願い）を抱きながら。



## 第四十一章 改良品、その名も――――――（後書き）

はい、今回短かったです。  
でも、スランプ抜け出しました。  
これからも頑張っていこうと思います。  
もし、キャライメージ崩れたら「めんなさい」  
では誤字脱字あつたら報告を。  
よろしければ感想ご意見くださいとおねしいです。

## 第四十三章 悪魔の憑くアーヴィング（前書き）

ついでに登場、悪役龍蛇！

と云ふことで、これからは敵の事情を話します。

## 第四十二章 悪魔の憑ぐるのホトコ

完全なる秩序を生んだ——“無”  
そこから歪み生まれた二つの存在が——“神たち”

一人は、生命を司る神、もう一人は秩序を司る神。  
生命を司る神を、聖神 と呼び、秩序を司る神を、理神 と呼ぶ。

秩序それは、狂いのない輪を意味する。  
生命それは、生まれ死に行く魂を意味する。

生命があるから生まれる秩序、  
秩序があるから流れる生命。

一つかければ狂うと誰もがそう思った。

だが、神を生んだのは“無”という完全な秩序。

その理から、——・乱れが起こった。

聖神が創り出し細胞に与えた魂はさまざまな生物を生み出した。

植物や動物、空や海。

その中でも魂が異様に力を得た者、妖幽鬼がいた。

誠心誠意、正義、生きることに全うする彼らがいれば  
邪心をもち、支配をたくらむ者も生まれた。

それらは出会い、争いを生んだ。

それが生命と秩序の歪んだ乱れ。

ソレに哀しむ一人の神は、

聖神は天使を、理神は悪魔を生み出した。

天使は、この世を正義という名の道に生きることだけを全うさせることを誠心誠意込もる彼らに憑いた。

悪魔は、全てを支配、統一させる悪しき心をもつ者に全てを統一といつ目的に、彼らに憑いた。

天使等が全うする時代があれば  
悪魔等が全うする時代もあった。

生命と共ににある感情といつ名の心。  
秩序の輪にある魂。

ヒトに憑いた魂が、ヒトの死によつて解き放たれる。  
解き放たれた魂は次の生まれるものに憑く。

そして秩序は流れていった。

神は創ることに大きな代償を払わなければならない。  
それが、昏睡。

長い長い間、眠つていれば、自分の創った世界を見守ることができない。

天使の憑いた者が世を治めれば  
世は生命溢れる世界となろう。

悪魔の憑いた者が世を治めれば  
世は滅びに向かうだろ。う。

悪魔は統一だけでは飽き足らず  
滅ぼし完全な秩序を求めてしまった。

それが乱れ。

生命のない世界は世界じゃない。

流れる秩序を乱してしまつ。

乱された秩序は完全な秩序をも揺るがし  
神の終わりを告げる。

神が終わるといふことは  
与えられた魂が解き放たれ、  
騒動を起こす。

神はあくまでこの世界を作るための神だ。

他の世界にはたくさんの神が存在する。

他の世界まで乱れた秩序は影響をもたらしてしまつ。

それは、神たちの戦争にもなりかねない。

だが、神にも創りだした悪魔を滅ぼすことはできない。

滅ぼせば滅ぼしたで乱れが生まれるからだ。

天使が憑いたからといつてもそれが悪魔となりうる可能性はあってもおかしくないのだから。

\* 龍蛇視点

これは神話に語り継がれているものだ。

余は、この神話で言えば悪魔に憑かれてるのだ。心から支配をもくろんでるのだから。

つい前の話、余は幽魔という男に負けた。

力の差はないに等しい。

だが、信頼、友情、余が捨てたものがあいつにはあった。そのせいで負けたと言つておかしくはない。

余はそれで深く傷を負い、重症だった。  
傷が癒えた頃、幽魔は死んだ。

余は再び、仲間を集めた。

余のチカラをもってすれば自我のない獣やチカラで魅了されるやからは多い。

そしてこの世界を地盤から揺るがそつと大地のチカラを吸収していった。

余は空にうかぶ無数の島のひとつに拠点を置いている。

空から大地を監視していたのだ。

余は徐々に台地を支配しはじめていった。

それからだ、大地が騒がしくなったのは、  
なにごとかと思えば強力な能力を持つ奴が  
増えている。

仲間を放つたが殺されたり失敗の繰り返しだ。

いい加減、島の富廷にいるのもあきてきたくらいだ。

「龍蛇様、いい案がござります」

敵となろう相手に放つた奴が、余に相談してきた。  
氷歌だ。

\* 氷歌視点

龍蛇様は私の恩人。

全てを捧げてもいいと思える相手。

だからこそ、龍蛇様のために  
敵を葬ろうとした。  
でも、幾度となく失敗する。

だから信用を取り戻すために私は、富廷に戻った。

煌びやかな地下屋敷。

屋敷は宝石で飾られており、大広間には龍蛇様の玉座が。

今日もそこで座っていた。

\* 龍蛇視点

「いい案とは？きかせてみよ、氷歌」

死にそこなつた雨女、それがこいつ。

余が新たに生まれ変わりを果たさせてやつたんだ。使えるとおもつてな。

「はい。

私が思うには、漆黒の巫女を手に入れることが支配力の増加に繋がるとおもうんです。」

漆黒の巫女・・か。なるほど、な。

見つければ手に入るも同然だが見つからなければーーな。

「ほおう、いい案だが、居場所が分からなければ無理であろう？」

「この氷歌、事前に調べはついております。

場所はーー・・この空島の真下の海洋でござります。

私の放つた密偵が、黒い髪をした羽と尻尾のある者が泳いでいたと

やはり、水を司るこの女、使える。

「やうか、よくやつた、褒美をやむづか

俺は玉座から立ち上がり、氷歌に近づき口付けを落とした。

「んん・・んむ」

甘い声が余を震えさせる。

なんとも柔らかい唇に我を忘れそうにならうとした。

「んう・・うんつ・・あん・・つ」

口付けを深くしていく。

一度離して――

「――満足か?」

と妖艶の笑みを浮かべれば

「え、ええ・・私、にはつもつたいない、へうじですわ^\_」

と、頬を朱に染め、誘つような笑みを見せてくる。

これ以上、ここでそんなことするのももつたいない。

「余が血ひ出回ひや。」

氷歌も来るがよい

「はい、龍蛇様つ」

余はそうして真下にある海洋に向かつた。

屋敷を出て、空を飛ぶ。

数人の仲間を呼んだ。

「今からどうやらへ、龍蛇様」

そつ聞くのは雀。<sup>スズメ</sup>

茶髪の髪に鳥のよつな翼。

右田は眼帶。

全身闇色の服をまとつ男だ。

「漆黒の巫女のとこりうだ。

お前には力を借りることになる。」

「それはそれは光榮です^」

雀はこり笑つた。

その笑みの下は残酷な笑みが眠つてゐるのを  
余は知つてゐる。

「ハーモヒツヨウなのか?」

自分をミーと呼ぶ少年は  
くすんだ紫色の髪を持つてゐる。  
瞳は輝かしいばかりの黄金だ。

夜になると光つて見えるソレは猫のよつだと思ひ。

「イツの名はオブシティアン。

「ディアンも必要だから龍蛇様は  
お呼びになられた、そうでしょ？龍蛇様」「

そう問うのは金髪の女、ティラミ。

純粋そうに笑顔振りまく彼女は策士だ。

「そうにきまつてゐるわ、ディアンのチカラは  
魔力を奪うことですもの、ねえ？龍蛇様」「

この間うのは氷歌だ。

「ここにいるお前たちの  
チカラはすべて必要だからだ。  
世界征服のために、な」

雀、オブシティアン、ティラミ、氷歌

この四人が余の配下において強い四人集だ。

水でも息が吸える術を氷歌にやらせて  
海洋の中へもぐりこんだのだつた。

## 第四十三章 悪魔の憑く少女たち（後書き）

やっと登場しました。

はやく陽魔にあわせたいですね。。。

といふか、エロくなりそうだ、龍蛇にキスシーン任せると。  
陽魔はまだ初心だけださ。。。

ねえ！少女漫画の少女って何歳までが少女！？

かなり危ないのがあるきが。。。

危険が区別できない無知な作者で下さいません。

第四十四章 滋黒の巫女を揃め! (前書き)

龍蛇視点です。

## 第四十四章 漆黒の巫女を捕まえに

じやほんつ  
ふくふくぶく

漆黒の巫女は深海に潜み暮らしてこなりしへ。

深く深くどれだけもぐつたであろうか  
長い間、潜り続けると、

黒い髪に深緑の尻尾、背中には黒い翼がある人魚を見つけた。

「咄のもの、よく聞け。

余が巫女の注意を惹きつける。

その間に四方を囲むのだ」

余の言葉に

「任せのままに、龍蛇様へ」

「ほいんへかじこまりましたわへへ」

「御意に」

「ワカツタ」

皆はそれぞれ額を氣配と共に姿を消した。

余は世に背中を向けたまま氣づかない巫女と  
距離をとり、

「巫女よ、久しぶりだな？」

と、妖艶に笑つてみせる。

「き、貴様は――？・・龍蛇つ――」

巫女は振り向いた。

振り向き側に長い黒髪がゆれなびく。

漆黒の巫女の眼は見開き、驚愕した。

「ほおう？名前を覚えてくれてたとは  
光榮だな。そう、余の名は龍蛇。  
お前の名はなんだ？」

不敵な笑みをしながら徐々に近づく。

巫女はじりじりと後ろに下がる。

「お前なんかにつかまるか！――」

そう叫んで彼女は余に背を向けて  
泳ぎだした。

「余の配下よ、今だ」

余がそつとまとものとき、

「アアアアンッ

黒い霞が・・もやが巫女を取り巻いた。

「つー?」

いきなり視界が悪くなり、  
それにもなつて身体も動かなくなつたのだろう。  
彼女はうめいた。

黒い霞が、鎖のように巻きつき  
巫女の身柄を拘束する。

配下の四人が姿を現した。

黒い霞・・闇を生み出したのは、ティラミだ。  
黄金の髪は、闇をも秘めた光の髪なのだから。

「ふふふ、やつたわ^」

くいっと指を動かせば

それだけ闇の鎖で拘束するチカラは強まる。

「つー・・くそつー・・は、はなせつー!ー」

漆黒の巫女はもがいて暴れる。

「あらあら、これだけじゃダメエ?」

くいと指を動かすティラミ。

「つ、うう、・・は、はなせつ！」

まだもがく巫女。

「オブシティアン、魔力を奪え」

余は命を下した。

魔力を奪えばおとなしくなるだろう。  
そうでなければ連れて行けぬ。

「ウン、ワカッた。」

ディアンは、暴れる巫女に手をがぞし  
魔力の中心を探つた。

半身半漁の巫女は一体どれだけの能力があるのかー・・。

「・・ココだ」

ディアンは巫女の背中・・。  
つまり、翼を差したのだった。

「よし、奪え」

ディアンは、翼に触れ、

「魔力ヨ、我ガ手ニ」

そう呟いて魔力を奪い始めた。

シユウウウウーー

黒く清い魔力があふれ出す。

「う” “ひああああああ ”」

巫女は叫んだ。

チカラが抜けしていくのを感じるだらう。

しばらくすれば、がくんと巫女の力が抜け、  
ディアンも

「ほんと、ウバッタ。  
モウないハズ^」

と期限が良い。

「やうか、じぐるう、オブシディアン。  
・・・・雀、翼に闇を込めぬ。」

「御意^」

「や、・・やめ・・、ひ

巫女はまだ話せる元氣があるらしい。

まあ、そのくらいは許してやるか  
あとの楽しみがある。

雀は巫女に近づき、翼に手をかざして  
闇を翼に込めた。

「つあああああああ」

闇がひとつあふれ出す。

ティラミは攻撃型、拘束型だが、  
雀は、精神を病む、世親攻撃型が多い。

「つう・う・う・つ・・・・・

巫女の翼がやみに染まる。

翼は本来、出さなくともいいもののはず。  
それを出し続けるほど、魔力はたまる。  
・・それは翼が清いから。

闇に染まつた翼はー・・しまえばどうなるか  
巫女も分かつてゐるのだろう。  
あえて、出したままでいる。

「龍蛇様、翼をしまつていただけなければ  
・・通用いたしませんが・・

「余もそれは分かる。  
どれ、余がやつてみよ」

余は、巫女の背中に近づき、  
背に触れた。

「・・あつー?」

何か、感じたのであらう。

余はそのまま、翼のないヒョウを指で触れ続け、円を描いてやる。

スウーッ

「う”・・!うあ”  
や、・・やめ・・ひ”・!」

巫女はうめく。

そう拒絶する割には

しゅうう”・・うう”・・

翼はもの見事に小さくなつて背中にしまこられていぐが。

「う”・・!」

完全に闇に染まつた翼がしまわると巫女は力を失つて、その場に崩れる。

ぐいっ

余は巫女の身体を引き寄せた。

「う”・・う”・・

巫女はうつめき続ける。

「・・連れて行くぞへ」

「御意」

「ワカツテルヨ」

「おおせのままで

「わかつてますつてばあーへへ

余は巫女を抱き上げて、海面へと向かった。

海から上がれば、巫女の人魚の尻尾は、ヒトの足へと変わった。

そのまま地下屋敷に余は巫女を連れ去ったのはうつまでもないだろ  
う。

## 第四十四章 漆黒の巫女を捕まえに（後書き）

巫女の活躍がなくてすいません。

圧倒的な力を持つてゐる龍蛇様には敵わないへ

巫女は・・まあしぶといことは

次回も分かるかと。

龍蛇「巫女は団太いが弱い。

余より強いものはもうこの世にはおらぬのだへ」

珍しくご機嫌です、龍蛇様

配下「そうですね！龍蛇様が一番の、お・か・たへ」

「龍蛇様、ミーより強いへ」

「絶対服従を誓えるのはこの方しか！！」

「ティラミーン、龍蛇様、ダーイスキへ」

「このように配下も」機嫌。でした。では、またへ

## 第四十五章 巫女（前書き）

漆黒の巫女視点です。

## 第四十五章 巫女

神々に愛されし、一つの存在。

心に憑くとされる天使も悪魔も及ばない存在、

それが巫女。

別個にして同一の存在であり、欠けてはならないもの。

巫女は互いに愛し合い、互いの存在を共有していた。

天使が憑くオトコは巫女に協力を要請した。

悪魔が憑くオトコは巫女を滅ぼそうとした。

白銀の巫女は力尽きて、誕生した己の居場所に封印された。

アタシ、漆黒の巫女は、海へと戻った。

もともとは巫女ではない。

ただ、海で生まれ、神との融合により巫女と化した。

白銀の巫女は完全なる神の遣い、  
白銀の巫女がいなければ漆黒の巫女のチカラなど  
發揮できない。

アタシも身を海に隠し、平和に過ごしていた。

憎き敵に捕まるまでは。

気づけば、私は鎖につながっていた。

ガチャンガチャンツ・・ガチャン！

卷之三

一ノへやくせんべい

逃げなければ・・こいつたちからー・・！！

「あらあ？ 龍蛇様、彼女、この期に及んで  
にげだそうとしておりますわ？」

憎き敵の配下の一人がアタシをあざ笑うかのように呴いた。

## 第四十五章 巫女（後書き）

うわっ！短っ！！

と、思った方には本当にすみません。  
スランプがなかなか治らないので。。。

うう・・やる気が・・・。

気長に書いてこくので、じつぞ温かい田でよひしきおねがいします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3261m/>

---

前世の記憶

2011年10月7日11時10分発行